

強行遠足70回記念誌



強行遠足70回記念誌

歩け、心のかぎり

1924—1996



山梨県立甲府第一高等学校

歩け、心のかぎり

1924—1996

山梨県立甲府第一高等学校

歩け、心のかぎり

1924 - 1996

山梨県立甲府第一高等学校



研究報告紹介

本校の強行遠足は教育的側面だけでなく、体育学、医学等の方面からも、早くから注目されていた。これは本校の強行遠足の時間・距離が長いということばかりでなく、周到な準備のもとで実施され、大きな事故もなく長年にわたり継続され続けてきたことが大きい。また、事後の分析や反省を徹底して行っているほか、綿密な統計の積み重ねも関心のもとになっている。

本校の強行遠足は昭和12年（1935）発刊の『本校に於ける強行遠足の意義と其の実際』によって全国に一躍有名になった。17年（1941）、東京の学校衛生医師会からの照会に応じて、嶋田武先生が東京・岸体育館に赴いて詳細な説明を行った。その際、17年版『本校に於ける強行遠足の意義と其の実際』が資料として作成された。出席した体育、医学の関係者はすでに19回も実施されている実績に驚嘆し、翌18年（1943）の20回大会には文部省の体育技官ほか4名が視察に訪れた。

強行遠足は第2次世界大戦中にも実施され、本校の強行遠足を軍隊の行軍におきかえて調査されたこともあった。結果は極秘とされたが、この年齢の若者でも24時間の行軍に耐えられるものだと賞賛された。

戦後、23年（1948）には東京慈恵会医科大学の第一生理学・名取研究室の名取教授の指導のもと、文部省の科学研究費を受けて2年間にわたり12名のスタッフが科学的な調査、研究を行った。この報告6篇は体力医学会の機関誌「体力科学」（昭和24年第2号、26年第3号）に発表された。

35年には本校職員・花輪民夫先生が行った「土踏まずの大きさと歩行距離の関係について」はユニークな研究だとして、全国体育優秀学校研究集録に紹介される一方、日本体育学会で発表された（「体育学研究」昭和35年・第5巻第1）。

その後、38年（1963）には、ソビエト連邦（当時）大使館の通訳・河島みどり氏を通して、エヌ・カー・クラブスカヤ教育専門学校への資料の提供を求められた。

また、46年（1971）には、東京教育大学（現・筑波大学）の小川新吉教授の指導で、学生数名が被験者として実地に参加し、長距離・長時間の持久歩行における生体機能の研究を行った。

51年（1976）には、都留文科大学が歩行距離約100kmの本校と33kmの他校とを比較して、尿成分排泄量に与える影響を比較する研究を行った。

また、54年（1979）には官公庁へ配布されていた「フォト」誌のグラビア、記事によって社会体育関係者からの問い合わせが増えてきた。

56年（1981）には、ジョギング、市民マラソンの隆盛を反映して、スポーツ・マガジン「ランナース」が同行取材を行った。

研究報告紹介

24時間強歩の体力医学的研究 (I)

酒井敏夫 (浦研・慈大生理) 他1名

昭和23年 (1948) 10月25日正午に出発する生徒100余名のうち希望者27名を被験者にした。

出発前に予め身長・体重・胸囲等の形態計測や脈搏・血圧・肺活量・握力・唾液のPH・尿のPH・尿蛋白質を検査し、一応の基準値とした。上諏訪 (68k)・小野 (94k)・松本 (110k) では、それらの機能変化を調査したり、また血尿の有無や更に疲労の程度を知るため空間定位能 (勝沼法にて) と膝蓋腱反射閾 (浦本法による) を調査、その他顔貌・一般的疲労状態、体力概要について調べた。

それらの調査成績の考察・摘要をみると、

- ① 個々の観察から、強行遠足の結果、強度の疲労状態にあると推察せられるが、強歩それ自体の負荷より受ける生理学危険閾は、一時越えても被験者の競技に対する自由により調節せられる。これはこの強歩が十分な注意と指導を以って行われれば、大して危険な運動競技ではないことを示すのであろう。
- ② 優秀なる成績を挙げたものは、従来知られていたように比較的体重の重くなく、又“最小限項目に依る体力判定法”の概評による「良」及び「普通」に属するものが多いようであった。

24時間強歩の体力医学的研究 (II)

山本清 (慈恵大・名取研究室) 他8名

前年に引き続いての体力学的調査研究の総括的な報告である。

今回の被験者は自然科学研究部員 (1~3年) 23名である。23名の平均身長は159.4cm。体重48.9kg。背活量3699cc。背筋力118kg。それらの平均値は同年令層の平均値よりはかなり劣っていた。23名の他、上諏訪で12名、松本で18名、また検者12名も臨時の被験者になり、同様な検査を受けた。

検査は、精神機能及び体液の変化を含めて、広く体力の変化を知ることとし、現場で極めて容易に検査が実施できるという点を考えて、次の8項目を決めた。

- (1) 一般検査及び調査 (顔付、貧血、震顫・跛行痛みの部位、一般的気分、続行の意志、疲れた地点、休んだ地点・理由・時間・回数・食事の回数・種類・量と地点・排尿の回数)
- (2) 膝閾測定

- (3) 柔軟度 (躯幹前屈度)
- (4) 下腿周
- (5) 描線検査 (神経筋総合機能を調べる)
- (6) 視覚機能 (裸眼、矯正視力・中心暗点、色覚近点距離、調節弛緩時間)
- (7) 白血球比率
- (8) 扁平足 (整形外科的見地から歩行能力を調査)・調査の総括
- ① 膝閾、柔軟度、視覚、描線機能、下腿周、白血球像等の変化の過程を調査したところ、いずれにも著明な変化を認めた。
- ② 諸検査の結果を総合すると、強歩の経過と共に機能変化も高度となる。そして、それは疲労の度合と大体平行する。
- ③ しかし、変化の程度は強歩開始後が最も大で、その後、変化の速度は低下する。強歩後期において、ある機能はやや回復を示したのは、検査直前の地形が下り坂であること、夜明けと共に全身機能が転換することなどに関係が多いと思われる。
- ④ 強歩者 (高度筋作業) と検査者 (徹夜精神作業) の機能変化の間には量的差異だけでなく質的差異も著しい。たとえば柔軟度では全く逆であり白血球比率でも質的に異なる。
- ⑤ しかし、強歩者において精神機能・精神調節機能の変化も強い。たとえば大脳筋総合機能検査と見られる描線検査法での変化は検査者よりも著しい。

これらのI・IIの発表の他に、同時に調査を項目別に発表したものとして、次の4編があった。

これらの題名・代表者および摘要を紹介するとつぎの通りである。

24時間強歩時の柔軟度について

浦本 一 (浦本研究所)

△ 摘要

- ① 柔軟度は長時間強歩という強い筋的負荷により明かに低下する。
- ② 柔軟度は徹夜体力検査という強い精神的負荷により明かに増加する。
- ③ 柔軟度は年齢と共に低下するらしい。
- ④ 柔軟度は身長、下肢長、背筋力、体重、胸囲等とは無関係の体力指標であるらしい。
- ⑤ 柔軟度の変化は屈、伸の拮抗筋の相互神経支配機能低下によるものではないかと考える。

以上により、柔軟度は極めて簡単に測りうるから、現場での質検が容易であり、しかも体力学上重要な一指標であると考えられる。柔軟度の日差、年齢差、生活条件（スポーツ、労働姿勢等）による差等は今後研究すべき興味ある問題である。

24時間強歩時の視機能の変化について

酒井敏夫（慈大生理・名取研究室）他3名

△ 摘要

吾々は、昭和24年度甲府第一高校24時間強行遠足時に於ける視機能の変化を見る目的にて、近点距離・調節弛緩時間・視力・中心暗点・色神の5種目の検査を実施した。

- (1) 中心暗点・色神はこの様な肉體負荷にても何ら変化を示さなかった。
- (2) 近点距離測定では、負荷の程度に依り延長する傾向があり、特に甲府・上諏訪間では著明な延長が見られた。
- (3) 調節弛緩時間に於ては、上諏訪で著しい延長が認められたが、小野・松本では逆に短縮する傾向であった。
- (4) 視力は、上諏訪・小野・松本と負荷に応じて低下する事が認められる。
- (5) これら諸検査の結果より見て、この様に強度の競歩では、身体機能は或程度の負荷になると定常状態に入り、その後は余り変動を示さず経過すると思われる。

24時間強歩時の白血球比率変化について

奥津汪（慈大生理・名取研究室）他4名

△ 摘要

21人の被験者及び6名の実験者に就いて白血球百分比の変化を観察した。

- (1) 強度の運動負荷により、白血球百分比に於て好酸球の減少が著明に認められた。
- (2) 相当の精神負荷と考えられた徹夜の実験者の血液像では、好酸球の減少、好中球桿状核細胞及び単球の増加が認められたが、その程度は運動負荷に比して軽度で且つ経過にも稍異なる所がある。

以上により白血球百分比の算定は可なり強い肉體負荷の場合、その程度の判定に有用な検査法と思われる。

24時間強歩時における「描線検査法」の実施結果について

増田凭（慈大生理・名取研究室）他3名

△ 摘要

- (1) 描線検査法なる簡易な検査方法を考案し、主として強度の肉體作業（強歩）時の変化につき実験した。
- (2) 被験生徒各群とも強歩の経過は共に度数分布曲線の右方転位と曲線形の乱れは著明となり、尖度も低くなる。
- (3) 強歩者が自己の能力の限度に達したと見られる停止地に於ては上の変化は最も高度で、平均値、分散度も最高値を示す。尚強歩能力を残す場合には著明でなかったことは、本検査法が疲労判定法として使用し得ることを示すものである。
- (4) 本法は筋作業時の大脳機構の変化、及び筋運動調整機構の機能低下の状況を示すものかと思われるが尚明かでない。

土踏まずの大きさと歩行距離の関係について

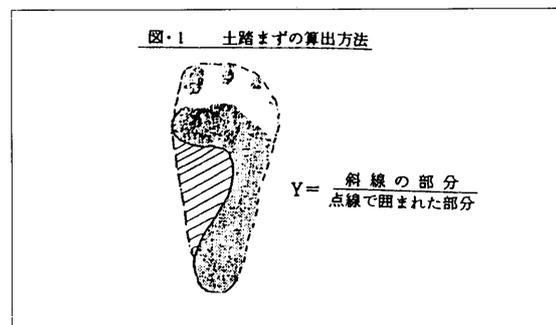
花輪民夫 甲府一高

この研究は、ユニークな研究発想と高く評価され、全国体育優秀校研究集録に紹介されたばかりでなく、日本体育学会の本大会に発表され、「体育学研究」昭和35年（1960）VOL 5. NO 1. P 261に掲載された。

研究は昭和31年から3年間にわたり、男子1311名、女子183名を対象に行われた。その研究を要約紹介すると、次のとおりである。

土踏まずの大きさと歩行距離の関係は、男子については、上諏訪（64km）より前で止めた者の場合は、土踏まずの大きさが歩行距離に影響を持つとは考えられないが、上諏訪以遠に歩行した場合には、土踏まずが大きければ大きいほど、歩行距離が増すという傾向が見られた。

女子の場合は、距離が増えるにつれて土踏まずが影響し、変化していく様子は見られなかった。



ソ連・クルプスカヤ専門学校から資料を求められる

昭和38年(1963)末にソビエト大使館で通訳をしていられる河島さんと言う女性から学校長あてに次の様な手紙が届いた。

「前略……実は私はモスクワ大学ですこし勉強したものでございますが、その時大変お世話になったロシア人——くわしく言えば教育大の体育の先生にぜひ日本の資料をいただきたいと、帰ります時くれぐれも依頼されました。10月に帰って参りましたがプレオリンピックで忙しく、その時おめにかかった体協の方々いろいろなお世話をねがいこのほどやっと貴校で私のほしい資料があるとの御連絡をいただき筆をとっている次第です……略。

エヌ・カー・クルプスカヤ教育専門学校理論科の研究資料として次の質問にお答えいただきたいのです。

1. 年令に応じてどの位の行程をくむか。
2. 1日の場合、2日3日の旅程の場合どの位のキロ数がいいと思うか。
3. その場合もっともよいと思われる時速
4. 男子と女子との負荷重量。
5. 行軍時間と休息时间。
6. 何才以上から数日間の旅行をすればよいと思うか。又その日程は何日位か。

後略」

質問の主旨と本校の強行遠足とは大部相違がある訳だが、強行遠足の目的、実施要領、現在までの状況、意見などを書いてご返事したところ、39年の4月になり礼状を頂いたので(原文はわからないので訳文のみ)紹介しておく。

「拝啓 昨年末に突然お手紙をさしあげ貴校の強歩の資料をお願いしたものでございます。入手しただいすぐに訳して送りましたら丁度著作に間に合い大変よろこばれました。モスクワからの御礼状がおそかったのは3月まで多忙だったからだと思えます。今仕事が終わらためて貴校あて御礼がまいりました。それと切手を送ってまいりました。目下切手と本以外、ソビエトから自由に送れないのです。彼の手紙を訳すと共に重ねて私からも御礼申し上げます。なお訳文中専門用語でおかしい点もあると思えますが御判読下さい。」

○ ○ 様 河 島 みどり

「拝啓、尊敬する皆様、我々の実験的な仕事は我々の前に一つの問題を提示しました。即ち、学生の徒

歩による旅行のための負荷量をどの位に決定したらよいかと言う問題です。この仕事は生活自体によって導きだされました。つまり我が国では現在大多数の学童が積極的にこの徒歩旅行(ヒッチハイク)に参加したからです。彼等のオルガニズムに負荷量、距離、行程の時間、時速などがどんな影響をあたえているかと言う点に関して我々はまだはっきりつかんでおりません。実生活でもわかるように児童の成長しつつあるオルガニズムの過労は健康上有害です。この事と関連してヒッチハイクを行う場合に彼等の健康を管理し、肉体的負荷量の厳格な標準を定めることが必要です。この問題について部分的解決はなされました。種々の研究結果と医学管理下に行われた実際の試みとによって我々は若いハイカーたち、中学生、12歳~15歳のための必要な標準をだすことが出来ました。皆様が御親切にお送り下さいました資料は我が国だけではなくもっと広範囲でのこの問題の状況について知らせてくれました。この事に対して深く感謝すると共に私どもとしましてはもし皆様が御希望なら実験の結果を御参考までにお送りしますし、何かに御発表下さっても結構です。最後にあたりましてもう一度御厚意を謝しあわせて資料を翻訳して下さった河島にも御礼申し上げます。尊敬をこめて セルゲイ・ペトラシアン
1964年4月4日 モスクワにて」

100km長距離歩行における生体の諸変動

小川新吉(東京教育大スポーツ研)他4名

昭和46年(1971)の強行遠足の際、特別に参加した健康な大学生7名(22~27才)、いずれも運動選手を被験者として、長距離・長時間の持久歩行における生体に加わる生理的負担度、および生体機能の動能について、生理的・生化学的な見地から検討を試みたものである。(東京教育大体育学部スポーツ研究報10・1972)

測定項目は、心拍数、体重、血圧、膝関節値、血液検査(乳酸、糖、FFA、トリグリセライド、およびGOT、GPT、LDH、アルドラーゼ、CPK活性値)、尿検査(蛋白、ケント体、PH)等である。

測定結果は以下にまとめる通りである。

- (1) 歩行中の心拍数は100拍前後で、aerobicな状態で持久的に歩行が継続された。
- (2) 体重は34km地点で平均4.4%(3.5kg)の減少を

示し、その後夜食等をとった関係もあって、徐々に回復傾向を示しているが、寒冷条件下でも発汗等による脱水現象はかなり著しい。

- (3) 血圧は最高、最低血圧とも34km地点では低下を示し、その後は休憩・夜食をとった関係もあってやや上昇したが、76km地点では再び低減を示し、心機能からみても疲労は極めて著しいことが予知される。
- (4) 膝閾値は、1名の例外をのぞき、34km地点では、6名が増大し明かに疲労現象が認められたが、50km地点では逆に7名中5名が低下し、その後67km地点はさらに低減して、脊髄レベルの神経系の機能は異常興奮状態に陥っていることが考えられる。
- (5) 血中代謝産物の乳酸、FFAは増加し、かなり個人的変動を示しているが、血糖は50km地点までに7名中5名が発前値以下に低減し、夜食の補給とともに上昇傾向に転じ、回復時には出発前値以上を示した。
また、トリグリセライドは漸次低下していき、運動終了時から2時間経過しても回復傾向を示さなかった。
- (6) 血清中の酵素活性値については、いずれの酵素も上昇がみられたが、比較的変動の小さい酵素はGPTで、最も変動の著しい酵素はCPKであった。特にCPKは運動終了時点で急激な上昇を示している。
またいずれの酵素も、運動終了後から2時間を経過しても活性値が殆んど安静レベルに戻らず、回復が著しく遅延し、生体にかかる負担度は極めて大きいことが考えられる。
- (7) 尿中成分に関しては、30km地点では7名中6名に蛋白が出現し、50km地点以後は蛋白、ケント体の両者が出現し、回復1時間にも5名中4名に蛋白、5名中3名にケント体の排泄が認められる。また、尿のPHは漸次低下して酸化性の傾向を示し、尿中代謝産物の面からみても生体負担度は著しく大きいことが考えられる。
- (8) 以上の生体諸機能の変動と回復経過を総合してみると、この100kmの長距離強行遠足の生体に加わる生理的負担度は極端に大きいものと考えられ、行事参加事前の健康検査と、爾後の休養に意を十分払う必要があることは論をまたない。

高校生徒の強歩大会における尿成分排泄量の変動

—日本体育学会第28回大会発表

—木昭男（都留文大）他2名

○ 昭和51年（1976）の強行遠足に2・3年男子50名が協力、本校の100kと他校33kの歩行距離差が、尿成分排泄量に与える影響を、運動前後の尿を通して比較した。

検査項目はPH（PH計）・クレアチニン（FOI in-Wu法）・カリウム（テトラフェニルボロン法）・蛋白質（ビニレット法）・ピルビン酸（FranKel法）・乳酸（BarKer-Summensan法）・比重・心拍数・アンケート。

結果と考察（甲府一高をK校、比較高をT校）

- (1) PH K校は運動後に酸性が強くなる傾向が認められる。これは長時間の運動負荷が原因していると思われる。T校のそれは運動の前後で殆んど変らない。K校>T校
- (2) クレアチニン 軽い運動では増減がなく、激しい運動では増加する傾向があると報告されている。今回は後者に当たる。相当強度の運動で、昨年報告したOLの全日本トップランナー達との類似の傾向がある。K校>T校
- (3) カリウム 短距離では減少、長距離では増加の傾向があると報告されている。今回もその傾向にある。K校>T校
- (4) 蛋白質 強い持続運動では蛋白尿が認められ、一般に筋疲労の指標ともされる。今回の数値から疲労状態にあると思われる。K校<T校
- (5) ピルビン酸 乳酸産生の際の中間代謝物であり、特に酸素の供給が不足すると著しく増加する。K校が著しく多いのは、長時間にわたる運動のため、エネルギー源が不足したことが原因と思われる。K校>T校
- (6) 乳酸 エネルギー発生の残物として筋肉に蓄積され、血液によって運ばれて尿中に排泄されてくる。乳酸量の多少は筋疲労の強弱の指標になる。T校は距離が短いにも拘らずK校より多い傾向にあるのは、距離が短いために全コース走った者が多かったためといえる。いずれにしても疲労状態にあると見ることができる。K校<T校
- (7) 比重 各成分の排泄量が増加すると比重が大となる。今回も後値に若干増加が認められる。K校≒T校

結 論

- ① 運動前後を比較すると、両校ともカリウム、蛋白質、ピルビン酸、乳酸に運動後増加の傾向が認められた。
- ② 両校を比較すると、ピルビン酸はK校に、乳酸はT校に多い。

強行遠足事前準備のための授業での取り組み

小尾裕志

1. はじめに

本年度、第70回を数え、無事終了した本校の伝統行事である強行遠足の意義については、これまで数多く述べられている。とりわけ、特徴的なのは到達時間の早さや距離について注目するばかりでなく、参加生徒が各々の体力の限界近くまで挑戦し、その過程で様々なことを体験し、貴重な財産を得ることに価値を見出しているところである。したがって、最終目的地に早く着いたからといって勝者でもなければ、途中落伍したからといって敗者と線引きをしないのである。このことは、強行遠足の基本的精神であり、これからもこの行事が続く限り、その根幹を成すところである。

しかしながら同時に、大会を運営している側からすれば、無事故でつつがなくこの行事が終了し、生徒が所期の目的を達成することとともに、その大会での参加率や最終目的地までの到達率、平均走行距離が自然と気になるのもまた事実である。

表1・2 (P89、90) は、40回大会から今年度70回大会まで最終地点到達率、平均走行距離の推移である。表1を見ると、65回大会から男女ともに到達率の低下が顕著であり、特に男子は今後一層の低下傾向が懸念される。また表2の平均走行距離からは、女子はほぼ横ばい状態であるが、男子はゆるやかな減少傾向にあることが読み取れる。その実施年の気象条件等の違いを取りのぞいたとしても、近年では、生徒の意識・基礎体力の変化とともに、徐々に「歩く」距離が減少しているという事実が浮かんできている。

2. 研究の動機・目的

かつて本校では、1万米競争、強行遠足リハーサル、駅伝大会が行われていた時期があったが、時代の流れとともに、それらの「歩く・走ること」を目的とした体育的行事は消滅していった。保健体育科としてもこれまで、強行遠足が近づくと、授業の一部をさいて注意事項やポイントを指示す

ることはあっても、そのために持久走を取り入れるなど特別な配慮は科内で共通して行われていなかった。それは、先に述べたような強行遠足の精神の理解と、生徒の自主的な取り組みに期待していたからである。しかし近年では、強行遠足が終了し、到達率の減少等の結果が出るにつれ、課題の一つとして残されてきていた。

本年度当初、教科会議で、このことがあらためて話題になり、分析・検討がなされた。そして、生徒は本当に力を出し尽くして(出し尽くせて)いるのかどうか、また、無理強いをさせるというのではなく、十分に力が発揮できる下地や事前の練習のための動機づけを積極的に行い、到達率の減少傾向に何らかの歯止めがかけられる取り組みの必要性が確認された。

3. 研究の方法

生徒には強行遠足の事前に、歩行計画を立てることを指導しており、生徒向けの強行遠足実施要覧の中にも、歩行計画立案参考図(別表P263、264)が示されている。この参考図を見ながら、生徒が自らの体力に合わせて歩行計画を立て、それに基づいて歩行出来ればよいのだが、多くの場合、実際にはこれを効果的に使いこなしていないのが現状である。それは、歩行計画を立てる際に、生徒の、距離に対する感覚と歩行速度に対する感覚が乏しいからであると考えられる。例えば、計算上、時速6kmで進もうとしても、その速度がどのくらいなのか実感としてつかんでいないから、いざ歩く段になると立てた計画が役に立たなかったり、また、自分の歩きたいスピードが頭に描かれていても、それが数値で表せないから計画が立てられないということにつながっているものと思われる。

そこで今年度は、一定の距離を、速度を意識しながら歩き、所定時間から時速を導き出すことによって、生徒が各自の歩行速度を実感して、より実質的な歩行計画を全ての生徒が立てられるようになることを目的とし、9月前半の体育の授業の中で、この取り組みを行った。

(研究の具体的実践)

- (1) 本校の敷地を周回する1kmのコースを設定する。
- (2) 歩行計画作成資料(表3)を掲示する。
- (3) 授業計画を作成する。

- ① 1時間目の生徒の取り組み。

ア 各自が設定した速さで、周回コースを1周し、所定時間を計り、表3により時速に換算する。

イ 同時に、速さを変え、計3回計測する。

ウ 体感した時速をもとに、検印所での休憩時間も加えた目標地点への到着時刻を想定し、区間における予定歩行速度を設定する。

② 2時間の生徒の取り組み。ー確認作業

ア 予定歩行速度を確認しながら、周回コースを歩く。

イ 歩行計画の調整。

疲労感、気象条件等を考慮しながら、予定歩行速度を変化させ、歩行計画立案参考図に数値を書き入れて、授業担当の生徒に提出する。

(4)授業担当者は、歩行計画をチェックし、コメントをつけて返却する。

(5)本大会では、この歩行計画を携行し、これに基づいて歩行するように指導する。

4. 結果と課題

(1)ほぼ9割を越える生徒が予定どおり実施し、歩行計画案を作成できたことは大きな成果であった。また、生徒の感想としても、自分の歩行速度がどのくらいつかめ、計画が立て易かったと好評であった。

しかし、基準になる周回コースの距離が1kmと、全体から見れば、短い距離をもとに時速を出しているため、自分の力を錯覚して、速すぎるペースを設定していた生徒も見られた。

(2)本年度の最終目的地までの最終到達率は、男子27.4%、女子62.3%であり、平均走行距離は、男子78.3km、女子41.5kmであった。この結果が今回のこの試みと直接的にどう結びつくのか検討・分析する余地があるが、少なくとも授業を通しての取り組みがマイナスにはならなかったものと考えられる。

(3)長い距離を制限時間内に、継続して、歩くことに関わる諸条件がなかなか読み切れず、計画の中に盛り込まれていないことから、計画倒れに終わっているケースが多く見られた。

①疲労度の進み具合

②コースの高低差

③気温の変化

④ 救護検印所での休憩・食事時間

特に男子では、途中検印所が16カ所あり、10

分ずつ休んだとしても、2時間40分となるので、効率的な休憩時間の取り方も指導ポイントの一つであると思われる。

(4)登下校時、および自由時間における歩行練習も、ただ漠然と歩くのではなく、速度感を意識しながら歩くことが大切であるということが確認され、これからの指導に生かしたい。

(平成9・1997 甲府一高「研究紀要」20)

《表3》 歩行計画作成資料 (男子)

1kmのタイム	km/H	小径到達時刻	小径到達時刻 制限時間 3分枠	小径到達時刻 制限時間 5分枠	小径到達時刻 制限時間 10分枠
6分00秒	10.0	10時間18分	1時36分	2時08分	3時28分
6分30秒	9.2	11時間12分	2時30分	3時02分	4時22分
7分00秒	8.6	12時間00分	3時18分	3時50分	5時10分
7分30秒	8.0	12時間54分	4時12分	4時44分	6時04分
8分00秒	7.5	13時間48分	5時06分	5時38分	6時58分
8分30秒	7.1	14時間30分	5時48分	6時20分	7時40分
9分00秒	6.7	15時間24分	6時42分	7時14分	8時34分
9分30秒	6.3	16時間24分	7時42分	8時14分	9時34分
10分00秒	6.0	17時間12分	8時30分	9時02分	10時22分
10分30秒	5.7	18時間06分	9時24分	9時56分	11時16分
11分00秒	5.5	19時間48分	10時18分	10時48分	11時58分
11分30秒	5.2	19時間54分	11時12分	11時44分	
12分00秒	5.0	20時間42分	12時00分		
12分30秒	4.8	21時間30分			

※ は昨年度のトップ到着 (4時52分) に最も近い値である。

歩行計画作成資料 (女子)

1kmのタイム	km/H	小径到達時刻	小径到達時刻 制限時間 3分枠	小径到達時刻 制限時間 5分枠	小径到達時刻 制限時間 10分枠
5分00秒	12.0	3時間48分	10時39分	10時53分	11時28分
5分30秒	11.0	4時間12分	11時03分	11時17分	11時52分
6分00秒	10.0	4時間36分	11時27分	11時41分	12時16分
6分30秒	9.2	5時間00分	11時51分	12時05分	12時40分
7分00秒	8.6	5時間18分	12時09分	12時23分	12時58分
7分30秒	8.0	5時間42分	12時33分	12時47分	13時22分
8分00秒	7.5	6時間06分	12時57分	13時11分	13時46分
8分30秒	7.1	6時間30分	13時21分	13時35分	14時10分
9分00秒	6.7	6時間48分	13時39分	13時53分	14時28分
9分30秒	6.3	7時間18分	14時09分	14時23分	14時58分
10分00秒	6.0	7時間36分	14時27分	14時41分	
10分30秒	5.7	8時間00分	14時51分	15時05分	
11分00秒	5.5	8時間18分	15時09分		
11分30秒	5.2	8時間48分			

※ は昨年度のトップ到着 (10時50分) に最も近い値である。

$$\text{歩行速度} = \frac{\text{距離}}{\text{時間}}$$

《表1、2》はP80、90、《別表》はP263、264を参照のこと。

平成8年度(1996)

第70回

強行遠足実施状況

強行遠足全行程図

職員組織及び協力者の状況

生徒参加状況

遠足道中こぼれ話

—強行遠足体験記—

『われら、かく走りき』

アンケート結果

強行遠足実施要覧《縮刷》



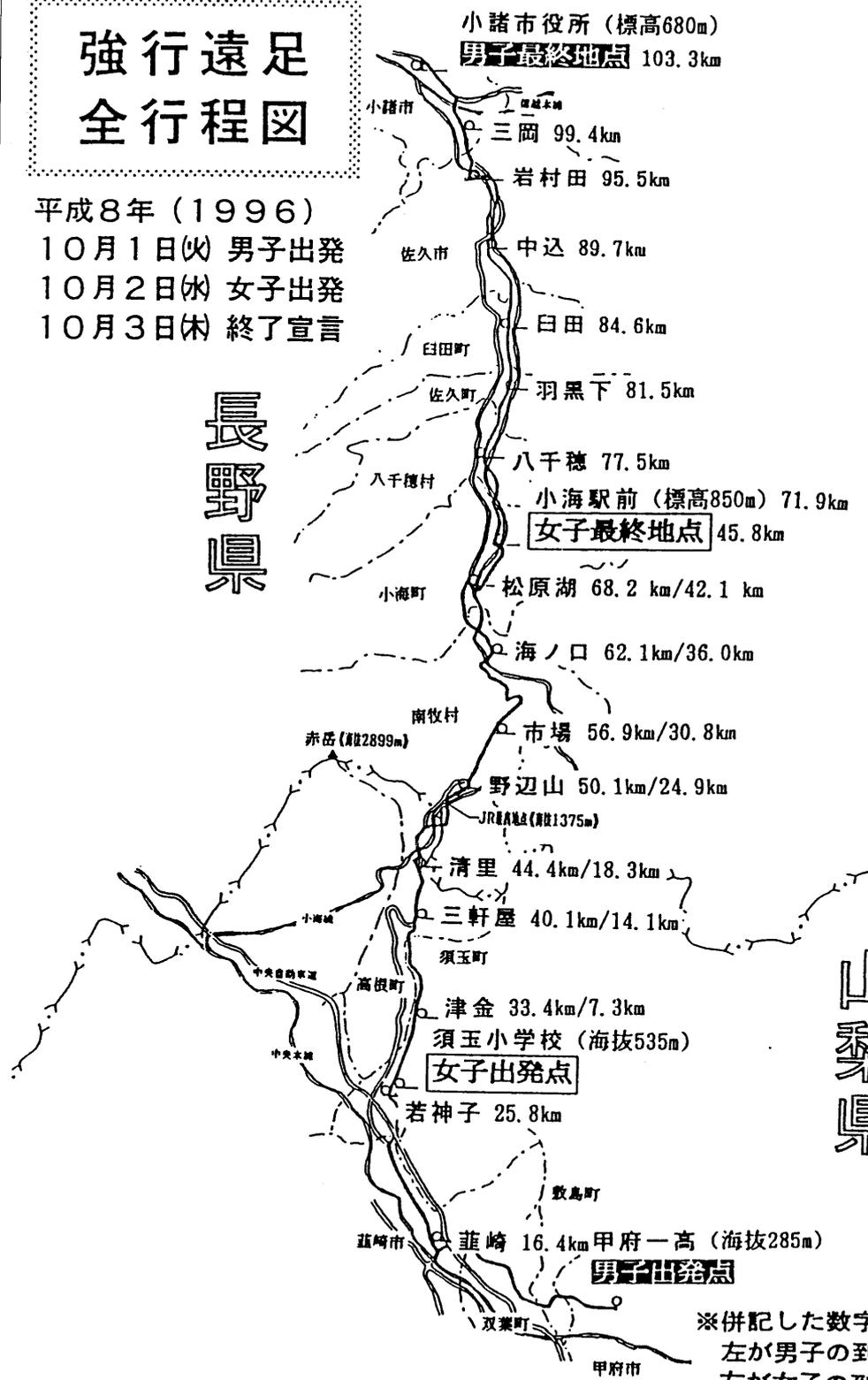
佐野智子
T. Sano

佐野智子 画

強行遠足 全行程図

平成8年(1996)
 10月1日(火) 男子出発
 10月2日(水) 女子出発
 10月3日(木) 終了宣言

長野県



山梨県

※併記した数字は、
 左が男子の到達距離、
 右が女子の到達距離。

職員組織及び協力者の状況・生徒参加状況

1. 職員組織および協力者の状況

- (1) 強行遠足委員会……………22人
- (2) 強行遠足準備係
 - 総務係……………14人
 - 庶務係……………7人
 - 会計係……………3人
 - 医療係……………3人
 - PTA係……………2人
 - 記録写真係……………3人
 - 生徒係……………8人
 - 物品係……………31人
 - 編集係……………5人

【解説】強行遠足委員会は校長以下22人で組織され、強行遠足の全般にわたる企画・立案・検討を行い、

その委員をチーフに全職員が各準備係に入り細部にわたる準備を進めた。

- (3) 協力者状況
 - 保護者協力者……………330人
 - 医師……………11人
 - 看護婦……………25人
 - 同窓生……………40人

【解説】職員を含め合計480人が各任務について強行遠足を実施した。

又、救護検印所としてお借りしているお宅をはじめ、通過地の市町村、警察、消防、医療機関、JRばかりでなく、沿道の方々の多大な御理解と御協力により強行遠足は実施することができるのである。

2. 生徒参加状況

第70回強行遠足集計

救護検印所別到着者数

《 男 子 》					《 女 子 》				
検印所 (km)	1 年	2 年	3 年	合 計	検印所 (km)	1 年	2 年	3 年	合 計
1 葦 崎 16.4	0	0	1	1	※津金未到着 3名				
2 若神子 25.8	1	1	2	4	3 津 金 7.3	3	1	0	4
3 津 金 33.4	1	1	1	3	4 三軒屋 14.1	3	1	1	5
4 三軒屋 40.1	6	1	6	13	5 清 里 18.3	7	7	0	14
5 清 里 44.4	8	8	10	26	6 野辺山 24.9	0	3	2	5
6 野辺山 50.1	18	16	17	51	7 市 場 30.8	6	9	4	19
7 市 場 56.9	5	4	3	12	8 海ノ口 36.0	41	13	16	70
8 海ノ口 62.1	7	1	2	10	9 松原湖 42.1	34	14	5	53
9 松原湖 68.2	4	5	1	10	10 小 海 45.8	63	96	132	291
10 小 海 71.9	15	16	19	50					
11 八千穂 77.5	18	12	6	36					
12 羽黒下 81.5	1	0	3	4					
13 白 田 84.8	25	22	18	65					
14 中 込 89.7	10	20	5	35					
15 岩村田 95.5	1	1	3	5					
16 三 岡 99.4	2	0	1	3					
17 小 諸 103.3	29	51	44	124					
在 籍 者 数	156	164	146	466	在 籍 者 数	164	160	170	494
参 加 者 数	151	159	142	452	参 加 者 数	157	144	163	464
不 参 加 者 数	5	5	4	14	不 参 加 者 数	7	16	7	30
参 加 率 (%)	96.8	97.0	97.3	97.0	参 加 率 (%)	95.7	90.0	95.9	93.9
完 走 率 (%)	19.2	32.0	30.9	27.4	完 走 率 (%)	40.1	66.7	80.9	62.7
平均走破距離 (km)	75.6	81.7	77.3	78.3	平均走破距離 (km)	39.3	41.4	43.1	41.3

遠足道中こぼれ話

男子集合出発係

平成8年10月1日午後2時30分、関口校長の号砲を合図に、太田同窓会長の打ち鳴らす勇ましい和太鼓の音に送られて、まず3年生の男子諸君が出発していった。服装は皆一様に、蛍光テープを貼りつけた丸い帽子、学生服に白ズボンとキリッとしているが、大いなる決意を秘めて緊張した表情で走り出す者、2、3人でにこやかに話しながら歩き出すものなどなど出発風景は様々であった。本校に10年以上勤務して初めて体験した出発場面であったが、生徒それぞれが自分のペースでスタートしていく様子に、強行遠足をここまで無事故で続けることができた秘密の一部をかいま見た思いがした。

女子集合出発係

女子出発はいつも慌ただしい。

バスが学校を出発するのが5時30分、須玉小に到着するのが6時10分頃、その20分後には3年女子のスタートとなる。

時間との戦いで“また何か起きるかも…”というスリルのある勤務だが、生徒はいたってのんびりである。

全線巡視係

全線巡視係は現在、職員の手車5台、PTAの手車2台の計7台でその任務にあっている。職員は、校長車をはじめ、先導、後尾追行係に分かれ、それぞれの任務を行っている。生徒が事故なく安全に歩行できるよう、全線にわたり巡視することが主たる任務であるが、何せ百キロにも及ぶ道のりのため容易なことではない。しかし事故なく70回継続できたことは何よりも生徒自身の自覚と協力者の方々の支援によるところが大きい。今後も事故なく強行遠足が続くことを祈念する。

葦崎救護検印所係

今年は2年目で余裕をもって救護所が開設できた。前日までの雨で設置場所が水たまりでどうしよう

か悩んでいた。たまたまPTA協力者の知人が付近の道路工事をしていて、PTA協力者がすぐ連絡をとってくれた。ダンプに砂が載せられて到着するまで、ものの10分も経たなかった。あっという間に水たまりがなくなった。ラッキーだった。

若神子救護検印所係

若神子検印所は道路の左側にある。生徒は右側通行である。若神子検印所は三叉路の左上にある。生徒は検印所に入るのに二度道路を横断し、出発するのにまた道路を横断しなければならない。

若神子検印所のピークは17時～19時となる。通勤車両のピークと重なる。交通指導係を多勢必要とする所以である。

生徒はここで夕食をとり、真暗な山道へ勇を鼓して出発していく。頼もしくもあり心配でもある。そんな思いが交錯するなか、若神子救護検印所の夜は更けていく。

津金救護検印所係

津金は、生徒にとっては全行程の中で最もきつい場所にあると言ってもいいかもしれません。道は暗い上に勾配は急で、落伍しても家に帰る交通機関がないのです。足を引きずりながら懐中電灯を頼りに三軒屋へ向かう生徒の後ろ姿を見ていると、「がんばれ」の掛け声も自然に大きくなります。落伍した生徒がいたら、家に電話し、親に来てもらうのですが、帰りの車中、親子でどんな会話を交わすのでしょうか。「また来年がんばれよ」と励ましているのでしょうか。

三軒屋救護検印所係

三軒屋は今年で3年目になる。いつも遠足の前には大雨が降り、コースづくりが大仕事である。正確に言うと、大仕事であるらしい。しかし、今年は、検印所の設営が早く終了したので手伝いに行くことができた。大門ダムから見上げる峠はさわやかであったが、道は小石や落葉でかなり荒れていた。数年このコースを担当している父親たちは、生徒が真っ暗

闇の中でも安心して歩けるように、要所をあっという間に整備してくれた。数時間後にはトップが駆け上がって来るだろう。

清里救護検印所係

今回の特徴は、男子・女子ともに1~10位で到着する生徒の時間差が少なかったことが挙げられる。男子は30分程度で、女子は15分間程度の差で次々に入ってくる。熾烈なトップ争いである。しかし、前に前にと進む姿には、胸が痛くなるような感慨を受けた。例年のことだが天候はいつも女子に見方をするらしい。今年もまた、男子には苛酷な天候であったように思われる。

野辺山救護検印所係

野辺山救護検印所は、男子の道のりのほぼ中間地点にある。この救護検印所では、例の心づくしのおいしいしじみ汁が伝統的に振る舞われる。生徒はどんなに疲労困憊しようとも、「せめて中間地点の野辺山にはたどり着いて、あの熱いしじみ汁を是非とも飲みたい。」という気持ちで救護検印所にとどり着く生徒の数は少なくない。ここでおいしいしじみ汁を飲み、それに元気づけられて更に先の検印所へと進んで行くのである。

非常に残念なことに、岡部さんとコンビを組んで長年しじみ汁を作って下さっていた丸山さんが、この1月、急逝されてしまった。今までの協力に感謝を申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

市場救護検印所係

市場救護検印所の重要な仕事に、歩道に被っている雑草や砂の除去がある。

野辺山から市場までは、直線が続き、猛スピードを上げて走り過ぎるトラックが多く、危険この上ない。歩道にはほんの少しだが段差があるし、砂が被っている、脚の上から生徒は、危険とは分かっている、つつい、広く平らな車道を歩いてしまう。そんな気を起こさせないように、毎年、保護者の方々は鎌やスコップを手に、歩道の整備に非常に協力的

である。

海ノ口救護検印所係

今年は、検印所前の歩道が工事中だったため、迂回路を利用したが、前夜の雨でひどいぬかるみとなり、修復にはてこずった。終わったら今度は、市場坂沿道の雑草や土石の除去作業が延々と6時近くまで続いた。ご父兄一人ひとりの献身ぶりにいたく感激した。

もうひとつ印象的だったのは、JAY先生の熱烈な激励ぶりだった。手を取って横並びに走ってくる彼の行動的なチアリーダーぶりには感服した。

松原湖救護検印所係

闇を抜けてきた男子は坂道の下に灯が見えると心底救われた気がするという。女子にしても海ノ口からの6km以上の道のりはきついが、着けばゴールが見えてくる。協力者の応援にも一段と力が入るといえるものである。

佐久往還ルートになって以来、救護検印所を提供してくださっている小池竜太郎氏宅。八那池の字名の示すとおり、小海の水源地となっている水が美味しい。きっぷのいい奥さんとドリフターズのリーダーに似たご主人。

今年は、その昔検印所をお借りしていた酒屋の店舗を改装し、転居のための吉日を強行遠足のためにわざわざずらしてまで協力していただいた。

眠い、寒い、筋肉痛の生徒には快適すぎて、心を鬼にして追い出すのもひと苦勞である。

小海救護検印所係

昨年の反省での「女子終点の小海では食べ物は出ないのか」という意見が、小諸その他でも食べ物提供を辞退しようという発端になった。勇氣ある決断である。反論もあったが小海は麦茶とポカリスエットに徹した。

子の到着を待つ親と、疲れて到着する息子・娘との対比は傍観者にも面白い。家庭内をのぞく観あり。

全行程の半分を借用する長野県の住民から、温か

く声をかけられるのはとてもありがたい。この行事が長く続けられるためには、今後とも良い関係を保つ努力と責任を感じず。

八千穂救護検印所係

7年前の話である。強行遠足が終わって2週間ばかりたったころ、学校あての一通の手紙が私の元に届いた。差出人は八千穂村のDさん。数年前に教員を定年退職した方とのこと。中には写真が20枚程入っており、強行遠足の生徒の姿に感動したという内容が印されていた。以後、Dさんは2日目の朝8時ごろ、きまって検印所に顔を出し写真を撮っては送ってくれる。地元がこの行事を楽しみにしてしてくれる人がいるというのがうれしい。夜は冷えるが、八千穂は暖かい村だ。すぐかたわらに奥村土牛画伯の記念館がある。

羽黒下救護検印所係

10月1日午後8時、一旦床につく。今頃生徒はどこを走っているのか。次第に目が冴えてきて眠れない。諦めて布団を抜け出した。階下に降りると、保護者の方々も同様に。田中先生も降りてきた。10時にライン引きをやらうとしたら、「先生は休んでいて下さい。」と言われた。一事が万事そんな調子で、皆さん精一杯働いてくださる。唯々感謝するしかない。さて、トップがもうそろそろ来るころだ。こっちは負けずにガンバるぞ。

臼田救護検印所係

優しい眼差しで迎えてくれる「おばあちゃん」と依田トミ子さん(86歳)。協力者のお母さん方と紅いリングを磨いて生徒を待つ。例年応援団長は到着後依田さん宅へ向かい、おばあちゃんの御主人の霊前に線香を手向け感謝と報告をする。中学時TVでおばあちゃんを見て感動し一高入学をした者。飲まずに持ち帰った牛乳瓶を食器棚に飾ってある者。勲章ともいえるリングを彼女と食べる者。おばあちゃんの一言はリングで少し重くなったリュックに人の心の温もりを感じ小諸への一歩に勇気が湧くという。

中込救護検印所係

トップの到着に備え、夜中の12時に起床した。しかし到着は遅く、結局3時間近く、宿舎のロビーで皆で起きて待つこととなった。

これとってする事もなく、自然と子供の話になった。家庭での生活・勉強・進路の事など子供についての様々な心配事が話題となり幾つか相談も受けた。日頃じっくり保護者と話す時間も少なく、また親同士も他の家庭の様子を聞く機会がないので、このトップ到着までのひとときが、思わぬ収穫になった。

やがて、午前2時45分の到着までには、気分も新たに持ち場に別れて行った。

岩村田救護検印所係

かつて何か所もの検印所を経験したが、この岩村田はフォッサマグナの構造線の名称にもなっていることもあり、以前から興味をもっていた。初めて検印所の主任となり、ここを任されて4年目になるが、6か所の拠点指導箇所には地下道2か所、横断歩道、信号のない横断、踏切と指導内容も多種にわたっている。

4年間の間にはいろいろな光景を経験した。「子供が今走っていると思うととても眠ってはいられません」と上気して話す保護者のこと、制限時間が迫っているからといって生徒と一緒に何百mも走ってきた保護者のこと、寒い中でも進んでローテーションに出かける保護者の姿などである。何ととっても、どの生徒にも我が子同様にやさしく、時には厳しく接する態度には感服し、誠に有難く思う。

三岡救護検印所係

長野県の方の全くの個人の篤志、好意によって成り立っている検印所が何か所かある。「三岡」は、柏木さんご一家の並々ならぬ義侠心・誠意によっている。先代から始まり、ご当主の宇三郎様ご夫婦の代となり、今は息子さん若夫婦がいろいろご助力くださり、時にはお孫さんまで手伝ってくれる。行事の当日は嫁ぎ先から3人の娘さんが帰省し、一家総動員の協力体制をとってくださる。検印所にと大型

倉庫、水道、照明器具、机椅子、ストーブなど一切提供して頂き、大型物品は学校から全く運ばなくて済む。前夜は心づくしの手料理をご馳走になり、帰りには季節の野菜や土地の品を土産に頂戴する。無事勤務を終え信濃路から甲斐路へと向かいながら、毎年毎年この行事を支えてくれる信州人のやさしさ、あたたかさをしみじみと思う。

小諸救護検印所係

深夜の2時30分に係職員全員で救護検印所を開設し、トップの生徒の到着を首を長くして待った。本年は、昨年よりも出発時の天候は良かったが、やっと5時に2人の生徒の姿が見えた。長かった103キロが終わった。前を走っていた1年生の体調が崩れていたが、後から来た3年生と一緒に走り、小諸まで連れてきたとのことである。甲府一高の強行遠足ならではの場面だと思う。また去年は、早朝旅行に出発する老人会の人達も、ゴールした生徒を出迎え、握手をしている姿が見られた。長い歴史の中で小諸市民の間に広く知れ渡っていたからこそ見られる情景であろう。

小淵沢駅係

キップを落としてしまった生徒が数人出たり、体調が悪い生徒が出たりで、今年は携帯電話が大活躍だった。本部や列車乗車指導の先生への連絡が、ホームでも簡単に、かつ迅速に対応できるので非常に便利だった。私も欲しい。

甲府駅係

列車が到着した。「何人乗っているかな?」「眠り込んでいる者はいないかな?」

「先生!行って来たよ!」

「おう!すごいな。よく頑張ったな!」

疲れ果てた子、足を引きずっている子…しかし、「お帰り、ご苦労さん」と声をかければ、どの子もみな、はにかみの混在した笑みを返してくれる。

「この世に“ダメな子”なんて一人もいないんだ—そんな想いを再確認させてくれる甲府駅である。

後尾追行係

男子の後尾を6年追いつけて思うのは、最後尾の生徒こそ、強行遠足の真髓だということです。前進停止時刻を常に前にして、一つまた一つと先の検印所を目指す姿。何度も立ち止まり、すわり込み、また立ち上がるひたむきさ。そして何より、3年間最後尾を共にした者はいないということ。1・2年は最後尾でも3年では遙か先を行っている。そんな気持ちで強行遠足を支えているように思います。

後尾追行係

後尾追行していて感じたことは、大抵の生徒は完走を目指すのですが、中には自分なりのペースで、自分の目標に向かって、楽しみながら努力している生徒がいるということです。男子が出発する昼間はまだまだ暑く大変ですが、夕方になると秋を感じるこの季節にゆっくり歩く後尾の生徒達は、先頭を目指す生徒達より秋の気配を感じながら、道に落ちているクリを蹴り、両脇から茂ったススキを引き抜きながら歩く。この光景は、秋を楽しんでいるかのようです。また、女子においても、小海線の線路沿いの道をゆっくりコスモスを見ながら歩く生徒もいました。強行遠足は、生徒一人一人の目標が違って自分なりに楽しめ、努力することが出来るのが魅力の一つだと感じました。



佐野智子 画

強行遠足体験記

—われらかく走りき—

夜の闇をぬけて

北川 雄 一

強行遠足当日、自分でまとめた荷物を自宅で何度も背負ったり降ろしたり、靴を履いたり脱いだりして、刻一刻と近づくその時刻を計っていた。不安が時間とともにくるのが分かる。玄関から何度かドアノブに手を伸ばしたが握れなかった。しばらく玄関に座り込んでから「行ってきます」も言わずに出発した。

外はわずかに寒い気がした。別にこの行事が嫌というわけではなかったが、知らぬ間にうつむき加減で歩いていた。蛍光テープのついた白いズボンが目に入ってくる。緊張している実感がわいてこない。学校に着いてみんなと会ったら少しリラックスできた。それからしばらくして、いよいよ出発。たぶんこの先、この行事に度肝を抜かれた1年生もいたと思う。

第一検印所にも着かぬ間に足が痛くなり始めた。でも以前ビデオを見せてもらったとき、足を引きずって歩いている人がいた。それに比べたらまだまだこんな痛みなんか…と自分を自分で励ましながらかつ先を目指していった。

夜もだんだん深くなり、懐中電灯の明かりも目立ってくる頃に、歌っている人たちがいた。たぶん苦しさまぎれにでもしていたのだと思う。でも長くは続かず、そのうち1人が立ち止まってしまった。それに続くようにまた1人立ち止まってしまった。それから歌い声も笑い声も聞こえなくなり、深く静かな山の夜が訪れる。

気温も下がり、高い木に覆われた山道をただ歩いている。車が来る心配もなかったので懐中電灯を消して歩いてみた。人と人の間隔もだいたい歩いてきているので本当に真っ暗になるかと思ったが、ほのかに辺りが見えた。最初は街の明かりが届いているのかと思っていた。まさかと思いながら見上げてみると、月が出ていた。昼間あんなに曇っていたのに…と思いつつもしばらくは月を眺めていた。それから懐中電灯をなるべく使わなかった。

順調に駒を進めていった強行遠足だったが、ある検印所を出てすぐに右足の筋のところに激痛が走り、右足を引きずるかたちになった。次の検印所まで約6km、戻れば1kmもなかったが次を目指すことにした。自分の右足を引きずって歩いているときに、ビデオで見たあの足を引きずって歩いている人のことを思い出した。「あの人はあのなりに頑張っていたな。あの人を責められる人はいないよ、頑張ろう、動ける限り先を目指そう。…」事実そう先を目指せるようなことはなかった。

一気に肩から荷が降りた。忘れられない思い出づくりにはいいと思う。いい経験じゃないのかな？でも当分は遠慮したい。(1年)

メイク・ドラマ——主役は僕

牛田 美樹

強行遠足というものを知ったのは中学時代の頃だった。甲府一高出身の先生からよく強行遠足のことを聞かされたのが、思えば僕がこの高校を選んだきっかけになったような気がする。

そして今こうしてあのドラマを文字に変換しようとしても、頭の中を様々な場面が駆け巡っていて、一体何から書けばいいのか迷ってしまうのが正直なところである。

でも、やはり僕にとってこの強行遠足で一番辛く、苦しく、忘れることのできないあのシーン——白田からの18.5kmのドラマを書こうと思う。

白田までは84.5km。スタートからもうすでに11時間が過ぎ、疲労もピークに達してきていた。「調子がおかしい」そう思い始めたのは羽黒下あたりからだった。胃がむかむかしてきて、強い吐き気に襲われたのだ。白田になんとかたどり着くと、僕はそのままシートに倒れ吐いた。それからの約20分のはあまり覚えていない。ただ横になったまま、それでも、もうだめかもしれない…という弱音が脳裏を横切ったのは確かである。

でも僕にはどうしてもそこであきらめるわけには

いかなかった。もう順位なんてどうでもよかった。とにかく小諸に着きたい一心で起き上がり歩き続けた。あの時の、いや、すべての所でいろいろ励ましてくれた先生方や父兄の皆さんには本当に感謝していますと心から言いたい。

中込まではすべて歩き続けた。途中、先導の五味先生も一緒に歩いてくれた。ZARDの「負けないで」を口ずさみながら歩いたりもした。岩村田に到着したときには予定時刻にはだいぶ遅れていたが、検印が小諸まであと少しのところまで来ていたので、少しずつ元気が戻ってきた。そこからは必死で岩村田で追いつかれた3年の佐野先輩についていった。思った以上のハイペースだったが彼についていくことで、長時間戦ってきた孤独という見えない敵から解放されたようで、精神的にも少し楽になってきたように感じた。だから僕がゴールできたのも、岩村田で彼に追いつかれ、それでも必死にくらいついていったからだと思う。もしあの時彼に追いつかれなかったら自分は今ゴールインしていなかったかもしれない。

そんなわけで臼田からの18.5kmは、マラソンで言うならば35kmからの苦しさと同じようなものであったに違いないと思う。だから、もし臼田であきらめていたら、自分に負けていたら、きっと何のドラマも、成長もなかったと思う。

最後にもう一度言うが、僕が小諸までたどり着いたのは、皆さんの温かい励ましと親切のおかげだと思う。本当に心からお礼を言いたい。

追伸…僕が臼田で吐いた原因を述べておきたい。それは空腹時にユンケルを飲んだかららしい（八千穂で）。僕にとってのユンケルは逆効果だった。だから、それを教訓にして71回大会に臨みたい。

（1年）

親子で走る

三 澤 美代子

強行遠足を追えて私を感じたこと、学んだことを格好つけずに、正直に書こうと思います。

強行遠足出発式の朝は、私の心と同じに、学校全体が緊張感に包まれていました。そんな中、いよいよ男子が小諸を目指し、103.3kmという苛酷な道の出発しました。学生服に白ズボン姿の男子は、いつになくたくましく見えました。

10月2日。私たちは、小海に向け出発しました。父と母は強行遠足の手伝いで、前日から海ノ口に行っていたので、タクシーで学校まで行きました。「いきます」が言えなかったのが残念でした。

小海までの長距離を、私は絶対に歩き続けようと、自分自身に約束しました。しかし、日常まったくと言っていいほど運動をしていない私にとって、45.8kmという距離は辛いものとなりました。野辺山の検印所を過ぎたあたりから、足は棒のようになり、一番心配していた腰にまで痛みが始めました。気持ちは小海に向いているのに体がいうことをきかず、何度もあきらめようと思いましたが、私のために走って戻ってきてくれた友人がいたので頑張れました。私はその友人に、本当に感謝しています。海ノ口の検印所に着く前、巡回している父に会いました。父は私を見てとても驚いていました。走っていたからです。今までに見たことのない顔でした。喜びと不安の混ざった複雑な表情でした。何故か私は涙が出そうになりました。海ノ口では母が待っていました。時間ぎりぎりの到着のせいか、母は私を見て泣いていました。

強行遠足を通して気付いたことは沢山あります。その中で最も感じたことは家族の大切さです。最近会話の少なかった父とも、目と目の会話ができました。やっぱり血が通っているんだと思いました。そして、強行遠足がいつまでも続けばいいと思いました。（1年）

追いつき、追い越し…

河 西 あゆみ

私は強行遠足に対して、「ユンケルを飲めば時間にゆとりを持って小海に着ける。」という少し軽い

気持ちをもっていました。その理由は、ある先生から「ユニケル（千円以上）の力はすごくて、小海に着いてもびんびんしてるらしい。」という話を聞いたからです。

当日、私はユニケルはまずいので、リポビタミンDスーパーを持って臨みました。清里付近に来て、先生のアドバイス通り疲れ切ってしまう直前に飲みました。しかし効き目があったのは野辺山から市場くらいまで、本物のユニケルを飲んだ友達などは私たち4人の中で一番早く効き目が切れてしまい最悪でした。

しかし、その効き目が切れたことが私たちの友情を強くしたのです。私たちが海ノ口に着いた時、松原湖での前進停止時刻まであと1時間しかありませんでした。私たちが歩いてきた時間をみると、1kmを10分以上かかっていたので、今まで通り歩くと間に合いません。私は海ノ口から走るなんて考えてもいませんでしたが、間に合わないのですから仕方ありません。みんな、「急がなきゃっ。」と走り出しました。ところが、走り出して300mもしないうちに走ってはいられなくなりました。私は「やっぱり歩く。」と言って走るのをやめ、友達2人も歩き始めました。でももう1人は止まらず小走りに行ってしまったのです。私は「4人で一緒にゴールしよう。」と言ったのを思い出して走り出しました。そして走っている子に追いつき、追い越し、少し行って歩きました。すると3人が私を追い越して行って少し行くと歩きました。私もまた走り出し、追いつこうと頑張るのです。誰かが走り出し、それぞれが追いつこうと走り出し、追い越し、歩いていると、誰かが自分を追い越していく。そしてまた、走り出す。誰が次に走り出すかなどと決めたわけではないのに、痛い足を持ち上げ、気力を頼りに、必ず誰かが、無口のまま走り出すのです。「もう走るなよ。」と心の中で叫びつつ、私自身もまた、走り出しました。そして、その無口の走り、追いつき、また走り出すの繰り返しの終了地点、松原湖の検印所を見たとき、本当に嬉しくて、嬉しくて、小海に着くことなんて忘れていました。その後も、手を握りあって、あと

から来た友達を含め、5人で小海に到着したのです。そのゴールの瞬間は、何とも表すことのできない、最高の気分でした。

強歩大会などは、友達と一緒に走ろうなどと約束せず、1人で走った方が良く言われますが、私は今回の強行遠足は、友達と団結したからこそ、自分自身に打ち勝ち、走り抜くことができたのだと思っています。無口のまま走り、離れ、追い越し、みんなでたどり着いた松原湖までの道のりを私は決して忘れません。そして、この友情をこれからもずっと大切にしていきたいと思います。（1年）

新しい自分に出会いたい

藤 森 久 明

今年ほど「小諸必着」を思ったことはない。昨年の八千穂リタイアのくやしきから、もうすでに1年がたち、またこの行事がやったきたのだ。リタイアといってもケガをしたわけでもない。自分に対して甘えたことによる挫折にすぎない。あとになって後悔していた昨年の自分を思い出し、ひたすら「小諸必着」への思いと、その目標に向けての努力をかさねていった。

大会前日は大雨だった。だれもが明日の雨を願う中、自分はひたすら雨がやむのを願いつづけた。それは、もし大会が中止となればもう本当の自分を見ることができないかもしれないからだ。今までどんなことにも甘えてきた自分をどうでも変えて新しい自分に出会いたかった。そのためには何か困難なことを一つでも乗り越えてそのきっかけをつかむため、自分はこの強行遠足を選び、そのために努力をかさねてきたので、大会は絶対にやりたいと思っていたからだ。

自分はひたすら歩き続けた。出発した時から一緒だった友人とお互励ましあいながら歩き続けた。昨年、若神子へ向かう途中に見た夕焼け、思わず立ち止まり見上げていた野辺山での満点の星空、すべてが今年とは違っていた。けれど足の痛みだけは昨年

とは変わらなかったが、そんなことは自分が持ち続けた思いが忘れさせてくれた気がする。

小諸到着、目標は叶った。大きな拍手の中、歓迎された自分の心は「ただつかれただけ」という思いでいっぱいだった。それに今も変わっていない。だけどこの先、どんな困難にあっても負けない心はこの「強行遠足」というすばらしい行事で少しは養われたのではないかと考えている。(2年)

経験とトレーニング

八代大輔

第70回強行遠足に備えて、まずしたことは事前のトレーニングである。去年は夏休みに少しランニングだけで、9月に入ってからは何もしなかった。その結果、清里のあたりで足の筋肉やすじが激しく痛み、一回座ると立つにも何分もかかる状態だった。しかも、荷物は重く、休みを毎回多くとったこともあり、小海でリタイアだった。しかし、あの状態でよくあそこまで行ったと思っている。

今年は去年同様、両親が羽黒下にいるのでそこまでは行こうと思い、9月に入ってから早朝ほとんど毎日ランニングをした。上旬はつらかったが、下旬になってくるとつらなくなり、自分でも何となく体力がついたかなと感じるようになった。しかし、体力よりも足の方が心配だった。

そして当日、目標は白田だったが心が重かった。去年の経験を生かし、荷物をかなり軽くした。そして、厚い靴下で参加した。最初は遅いペースで歩いたら、若神子で30番台だったので、かなりペースを上げて歩いたが足が痛くならない。しかも、去年よりもずっと時間が早い。これはもしかしたら完走できるかもしれないと野辺山の辺りで感じた。検印所では給水をして体操をするだけでほとんど休まなかった。そして、白田で50番まで順位を上げることができた。この方が有名なお婆さんかと思ひ、握手してもらった。とても温かい手だった。白田を出発してから少し足が痛み、まめができ始めた。しかも、

検印所の間が約5kmや6kmと長いと、さらに痛みが増してきた。しかし、ここまで来たのだからリタイアするわけには絶対いかないと自分に言い聞かせながら歩いた。ゴールした時の喜びを思い浮かべながら。

最後の長い1kmを歩いてゴールした時、最高だった。これこそ最高の気分だと思った。最後にやればできるということを実感した。はじめから最後までやりとげるといことはすばらしいことだ。この行事は大変多くの人たちに支えられて成り立っている。親も話していたが、どの親もみんな一生懸命協力している。本当に感謝の気持ちを忘れてはならない。そして、この行事は経験がものをいう。今年ゴールできたのは経験を生かしたからだと思う。経験していない者にとっては絶対不利だというのがよくわかった。後輩にも完走できるように頑張ってもらいたい。そして自分は来年も完走を目指す。(2年)

成長する「わたし」

奥石美保

私は昔からこういった行事が嫌いであり、また苦手でもあった。「その日」が次第に近づくにつれ、気は重く、そして極度の緊張におそわれてしまう。入学後初めて臨んだ「強行遠足」もやはりそうだった。未だ経験したことのない距離や見知らぬ土地のことを考えると、それまでの緊張感とは比較にならないものだったかもしれない。しかし今年は昨年より少しは落ち着いた気持ちで参加できたように思う。スタート地点、歩いた道、検印所の様子など様々な思い出が私の緊張をやわらげてくれた。

そして当日。私は私の思い出がひどくかたよったものだったと気づいた。そしてごく部分的なものだとも…。走り、歩き続けるうちに私は今年の私に怒鳴られたような気がした。一年間の間に私が忘れていた苦しみは、だんだんと足や肩や腰に現実のものとなってのしかかってくる。その時になって初めて、何もかも本当に思い出せた気がした。

精神的な変化も多くあった。強気な自分、弱気な自分、意地になって笑ってみせた自分、ひたすらに「休みたい」とだけ考える自分…。最後に残った私は「痛みに負けた自分」だった。

筋肉痛もやわらぎ、テレビを観て笑っている今の私が、あの痛みをかかえひたすら歩いている自分に何も言えるわけではないが、でも一つだけ確かなことは、歩き続ける私が「来年までに体力的にも精神的にも強くなりたい。」と思ったことだ。

来年、同じ道を進む私が今の自分より成長できているように。そう考えると、私には毎日が次回の強行遠足へのステップに感じられる。(2年)

「結果」に満足

飯島 貴美子

途中何度もやめたくなくなった自分を最後まで支えたのはやはり去年この行事に参加できなかった悔しさだと思う。去年の作文でも相当愚痴ったが、去年は強行遠足2週間前にして学校の階段から落ち足首を捻挫。その時点で“3年間小海到達”の目標は早くも打ち砕かれた。悔しかった。来年は絶対に頑張ろうと思った。

しかし練習の段階ですでに私の目標の一つは達成できなかった。「今日から絶対毎日走ろう」と決めたのに、結局何日もさぼってしまった。そして当日の45.8kmという道のりは、覚悟していたつもりだったが、決して安易なものではなかった。全体の4分の1も進まないうちに足が痛くなった。何度か自分に負けたと思う。“ここで歩いちゃダメだ”と思いながら、歩いてしまう自分を正当化していた。

一方で、いろいろなことを思い出して前に進むことができた。捻挫をして「強行遠足に出たい」と言った時、お医者さんに叱られて泣いたこと、大会が近づいた時、まわりの友達が「今年は頑張ってるね」と励ましてくれたこと、朝5時頃まだ暗い道を1人で走ったこと。他にもたくさん。

途中で泣きたくもなかった。泣けば許してもらえる

ような気もした。でも泣いてもきっと自分が情けなくなるだけだし、泣く余裕があるなら前に進もうと思っ直した。

限界まで力を出し切れたかどうかはわからない。まだ自分に甘かったかもしれない。でも少なくともこれまでの自分より強くなれたかと思う。結果にはとても満足している。というより信じられない。これから私にできることは、この経験を忘れずに頑張ることだと今思う。(2年)

負けてたまるか

秋山 幸一郎

「もうやめよう」と何度も思い走ったこの103.5kmは、忘れることのない強行遠足になった。1・2年の時は、野球部だったので、体力には自信があり、強行遠足の練習という練習はしなかった。

部活を引退して、何も運動をしていなかったのに、夏休みの終わり頃から強行遠足の練習を始めた。この強行遠足で、野球部の後輩たちに負けなくなかったし、自分の限界にも挑戦してみたかった。

出発した時から、速いペースだったので、葦崎には予定より40分早く着いた。野辺山からは、「何でこんなことをしているんだろう。もうやめて早く寝たい。」と、ずっと思っていた。松原湖の検印所で、先生に順番を聞いたたら、33番と言われたので、頭の中で、ずっと思っていたことをプラスに考えた。小海・八千穂・羽黒下・白田は、友達と励まし合いながら走った。白田でコーヒー牛乳・おにぎりを食べ、白田のおばあちゃんや検印所の人達が、励ましてくれたので、本当に嬉しかった。中込・岩村田・三岡では、検印所までに時間がかかり、足も痛くて、リタイアしたかった。自分で自分を、「もう少し、もう少し」と励ましながら走った。三岡の検印所を出て、小諸までは、3.9kmが、長く感じた。出発から、今までのことを振り返りながら走った。10時3分、小諸に着き103.5kmを走った実感がわいた。

この強行遠足で、様々なことを学んだ。友達の大

事さ、自分の生命は自分で守る、自分の甘さ・限界など、日常では学べないことを学べた気がする。強行遠足で、一高生としての自覚も生まれた。3年間、完走できて、本当に良かった。応援してくれた検印所の人達や父兄の人や先生に感謝したい。この伝統の行事である強行遠足は、ずっと続けていてもらいたい。この強行遠足で、少し大人になった気がする。(3年)

自分を褒めたい

平出圭太

スタート直前に、1・2年の時の強行遠足のことを思い返した。確かに1年時も2年時も自分からあきらめることなく前進停止に掛かるまで歩き通した。しかしそれは本当に自分の限界を尽くした結果だっただろうか。残念ながら答えはNOだ。ふとアトラクタでの有森さんの言葉が頭の中をかけめぐる、「メダルの色は銅だけど、今回は初めて自分で自分を褒めたいと思います。」今年目標は定まった。終わった後自分を褒められるよう、後悔しないように歩こう。

歩き出す。昨年までの経験と反省から、今回は自分に最適なペースを保ち、各検印所での休憩を必要最小限にすることを心掛けて歩き続ける。夜の帳が下りてしばらくすると、蓄積された疲労からか、幾度となく誘惑の声が聞こえる。これが何の得になるのだ。物事は合理的に考えるべきだ。その声に負けまいとして遥かなる山々の稜線を見つめる。空の色よりも山の色の方が暗かった。夜が本当は暗くないと悟った時、誘いの声は消えた。

夜明けは八千穂だった。1年の時の自分のゴールを通りすぎた時、当然身体はすでにボロボロだった。ここから先は気力で乗り切るしかない。痛いと思うから痛いのだと自分に言い聞かせて歩く。そう思って歩き続けると苦痛は弱まってきた。精神が肉体を凌駕した時、すべての肉体的苦痛は消え去った。しかし岩村田を通過したときは精神力も底をついた。

残りの8km自分を動かしていたのは何か。今考えるとそれはまだ小諸に着いたことがないという危機感だったのかもしれない。

こうして3年目にしてとうとう僕は小諸にたどり着けた。それはやはり誇りであり名誉である。今、3回目の強行遠足が終了し、僕が生徒としてこの行事に参加することは永久に不可能となってしまう、非常に寂しいとも感じる。同時に3年間で得た貴重な体験、珠玉の思い出、大きな達成感は僕の人生の中で大きな意味を持つ宝物になりそうだと感じる(3年)

ともに生き、助け合う

中谷真弓

今年の強行遠足は自分の人生と重ね合わせていたような気がする。完走できなければこれからの自分の目標や困難に打ち勝つことができないのではないかと、という気持ちを無意識のうちに感じていた。だから、絶対完走したかったし、友達にも完走してほしいかった。

歩き続けるにつれて足に痛みが積み重なってくる。苦しいながらも、すれ違う友達に「がんばれ。」と声をかけずにはいられなかった。市場辺りから足がいうことをきかなくなり、前へ出すのもやっとなってきた。ここで立ち止まるわけにはいかない、負けてたまるもんか、と自分自身に言い聞かせながら歩いた。時間との戦いだった。

そんな時、道の途中で立ってくださった方々や、検印所でお茶を配りながら励まして下さった方々、そしてわざわざ来て下さったOBの方々の応援はありがたく感じられた。最後の松原湖からゴールの小海までの間でめげそうになってしまい、それを友達が励ましながらか手を引いてくれた時には、思わず涙があふれそうになってしまった。

完走し終えた時には、達成感というよりも励ましてくれた人々への感謝の気持ちでいっぱいだった。こんな思いは3度目にして初めて感じたことだった。

今まで強行遠足というものは根性だと思っていた。根性さえあれば誰だって完走できると思っていた。しかし、それは違っていた。そこに周りの人々の助けがあったからこそ、できたことだったのだ。これから生きてゆく上でも、それは同じだと思う。

やはり人間というものは、誰かの助けがなければ生きてはゆけないのである。その事にいかに気づくことができるかどうかで、人間の価値というものが決まってくるのではないだろうか。

今年の強行遠足で、私は自分の生き方を発見することができたような気がする。自分にとって、とても大きな意味のある行事となり、今は満足の気持ちでいっぱいである。是非、いつまでもこの伝統を続けていってほしいと思う。(3年)

3年目の秋の空

飯 嶋 佳 枝

一昨年は海ノ口検印所の手前1kmあたりで泣いていた。足の痛みにたえられずに海ノ口でやめることを決めた自分が悔しくて泣いていた。

去年は松原湖検印所の手前で泣いていた。前進停止時刻が10分前に迫っていたのに「検印所まであと1km」の黄色の旗が見えてこない。それどころか前にも後ろにも誰一人見当たらない。今年もだめなのか、という悔しさとさみしさに泣いていた。泣きながら痛みをこらえ松原湖検印所を前進停止ギリギリで通過した。

今年は前2回の強行遠足で泣いていた道を空を見ながら歩いていた。余裕というには大分時間が迫っていたし、足の痛みも半端ではなかった。それでもただひたすら歩くことができた。昨年同様、2時20分の前進停止時刻ちょうどで松原湖を出ると、待っているのはやはり昨年と同様とてもきれいな秋の風景だった。西に傾いた太陽の光に薄い雲が形を変え、黄金色の稲がこんろちはおじぎをしていた。この風景が、私はとても好きで、それを今年は楽しみながら歩くことができた。道中40数km、ほとんど何も

考えていなかったが、この時頭に浮かんだのは、野辺山の県境付近で1年生が言っていた言葉だった。

「ねえ、すごいよ。自分の足で県をまたぐんだよ。普通じゃ絶対ないよねえ。」

その時は何とも思わなかったが、小海まであと2kmとなった時、その1年生の言葉が妙に実感された。自分の足でここまで来たこと。車ならほんの2・3時間の距離を8時間30分かけてひたすら歩いたこと。去年やおととしのこと。今年が最後だということ。

今年は小海の手前2kmのあたりで泣いていた。特に何か悲しいからでも、体のどこかが痛いからでも、何か悔しいからでもなく、ただただ泣いていた。そんな自分がとにかく好きになった。(3年)



佐野智子 画

アンケート結果

対象 男子428名 女子450名 合計878名

平成8年10月3日実施

設	問	解	答	男子 %	女子 %	全体 %
1	あなたは強行遠足の目的である尊 い人生体験を得ることができまし たか。	0 できた 1 できなかった 2 どちらでもない 3 その他		71.5 9.3 15.9 2.3	77.1 3.6 15.1 3.1	74.4 6.4 15.5 2.7
2	あなたは今回の強行遠足に自己の ベストを尽くすことができましたか。	0 できた 1 できなかった 2 どちらでもない 3 その他		54.9 32.2 10.0 5.6	65.6 20.7 10.2 5.1	60.4 26.3 10.1 5.4
3	あなたは強行遠足をどう思います か。	0 素晴らしい行事である 1 素晴らしいとは思わない 2 どちらでもない 3 その他		65.7 7.2 20.3 5.6	62.7 5.6 25.6 5.1	64.1 6.4 23.0 5.4
4	これからも強行遠足を実施すべき だと思えますか。	0 実施すべきである 1 廃止すべきである 2 どちらでもよい 3 その他		73.4 2.3 21.3 1.9	73.8 2.0 20.9 2.2	73.6 2.1 21.1 2.1
5	あなたは強行遠足の意義を次のう ち何に一番求めますか。	0 自己の限界（精神的・肉体的）に 挑戦すること 1 歩くことを通して自然に親しむ 2 甲府一高生としての自覚 3 友人とのふれあい 4 特にない 5 その他		76.2 2.8 4.0 4.7 5.4 3.7	73.3 4.2 6.7 8.0 4.9 2.0	74.7 3.5 5.4 7.5 5.1 2.8
6	強行遠足を通して「自分は一高生 である」という実感がわいたり、 高まりましたか。	0 はい 1 いいえ		67.3 30.8	76.7 21.3	72.1 26.0
7	友達（仲間）のよさについて感じ ましたか。	0 はい 1 いいえ 2 どちらでもない 3 その他		74.8 6.8 15.4 2.1	81.8 3.6 10.7 2.4	78.4 5.1 13.0 2.3
8	あなたは強行遠足に参加するにあ たり、事故を絶対におこさない という自覚のもとに参加しましたか。	0 はい 1 いいえ		80.6 17.8	85.8 10.9	83.3 14.2
9	歩行中に危ない場面を体験しまし たか。	0 歩道を歩いていて体験 1 車道を歩いていて体験 2 障害物とぶつかりそうに 3 道路から落ちそうに 4 その他危ない体験 5 なかった		8.4 8.6 8.4 5.1 9.3 59.1	4.9 5.3 6.0 1.3 2.4 78.4	6.6 6.9 7.2 3.2 5.8 69.0

	設 問	解 答	男子 %	女子 %	全体 %
10	あなたは競歩大会に備えてどんなトレーニングをしましたか。	0 ランニング 1 徒歩通学 2 ランニングと徒歩通学 3 その他の練習 4 何もしなかった	35.0 11.4 11.2 15.2 26.4	21.1 26.0 11.3 8.0 31.6	27.9 18.9 11.3 11.5 29.0
11	10で0か2と答えた人、(ランニング)どのくらいの期間ですか。	0 1ヶ月以上前から 1 3週間くらい前から 2 2週間くらい前から 3 1週間くらい前から 4 3日くらい前から 5 その他	11.2 12.6 13.1 9.1 1.4 3.3	3.2 8.2 11.3 6.7 2.4 2.4	7.2 10.4 12.2 7.9 1.9 2.8
12	10で0か2と答えた人、(ランニング)どのくらいの距離ですか。	0 1km未満 1 1~2km未満 2 2~3km未満 3 3km以上	2.8 7.5 15.2 20.8	2.0 12.7 8.0 8.7	2.4 10.1 11.5 14.6
13	10で1か2と答えた人、(徒歩通学)どのくらいの期間ですか。	0 1ヶ月以上前から 1 3週間くらい前から 2 2週間くらい前から 3 1週間くらい前から 4 3日くらい前から 5 その他	7.9 5.8 5.1 4.2 0.9 2.8	6.4 6.7 12.2 5.1 2.2 5.1	7.2 6.3 8.8 4.7 1.6 4.0
14	歩行計画についてはどうですか。	0 しっかり立て活用した 1 計画は立てたが活用できなかった 2 立てなかった 3 その他	17.3 38.6 37.1 4.0	25.1 48.7 18.9 4.7	21.3 43.7 27.8 4.3
15	強行遠足中の健康状態について(3つ以内回答)	0 異状なし 1 腹痛・胃痛 2 吐き気・嘔吐 3 頭痛 4 貧血 5 腰痛 6 足のけいれん・筋肉痛 7 捻挫 8 靴ずれ その他	5.1 9.3 14.0 4.4 5.1 41.4 72.2 6.5 20.8 19.6	6.7 15.3 8.4 10.9 3.8 51.3 65.8 2.0 29.3 11.8	5.9 12.4 11.2 7.7 4.4 46.5 68.9 4.2 26.2 15.6
16	15の症状に対する処置について	0 医師の処置をうけた 1 看護婦さんの処置をうけた 2 自分・友達の薬で処置した 3 途中で休養した 4 我慢して歩いた 5 その他	2.6 10.7 50.5 31.5 54.7 4.0	0.4 4.9 20.0 8.7 74.0 3.3	1.5 7.7 34.9 19.8 64.6 3.6
17	途中で断念した主な理由は何ですか。一つだけ答えなさい。	0 全身の倦怠 1 腹痛・胃痛 2 頭痛 3 貧血 4 腰痛 5 足のけいれん・筋肉痛	7.5 1.9 1.6 0.9 4.9 27.8	4.0 1.0 0.3 1.3 1.6 6.9	5.7 1.3 0.9 1.1 3.2 17.1

	設 問	解 答	男子 %	女子 %	全体 %
17	途中で断念した主な理由は何ですか。一つだけ答えなさい。	6 捻挫 7 靴ずれ 8 その他（身体の症状以外）	3.0 4.7 24.1	0.0 2.9 20.2	1.6 3.8 22.1
18	食事は何を用意しましたか。	0 おにぎり 1 パン（含サンドイッチ） 2 何も持たない 3 その他	81.3 3.7 3.0 13.6	66.4 1.8 8.4 20.4	73.7 2.7 5.8 17.1
19	途中食事が食べられましたか。（男子のみ）	0 夕食、朝食ともに食べた 1 夕食だけ食べた 2 朝食だけ食べた 3 食べなかった	38.6 51.6 1.2 6.5		
20	夕食の場所はどこでしたか。（男子のみ）	0 葦 崎救護検印所 1 若神子 〃 2 津 金 〃 3 三軒屋 〃 4 上記以外の場所	9.6 26.4 21.0 10.0 28.3		
21	朝食の場所はどこでしたか。（男子のみ）	0 八千穂救護検印所 1 羽黒下 〃 2 白 田 〃 3 中 込 〃 4 岩村田 〃 5 上記以外の場所	4.0 3.0 12.6 1.4 1.6 41.1		
22	水分の補給をどうしましたか。	0 救護所のお茶・水を飲んだ 1 自動販売機の缶ジュースなど 2 0と1の両方 3 その他	53.5 5.1 33.6 6.8	84.4 0.7 4.0 8.7	69.4 2.8 18.5 7.7
23	あなたが最も疲れを感じた所はどの検印所付近でしたか。	0 葦 崎 1 三軒屋 2 野辺山 3 海の口 4 小 海 5 八千穂 6 白 田 7 中 込 8 小 諸 9 上記以外の場所	5.1 23.8 14.5 13.3 9.8 11.4 4.7 11.4 4.2 0.7	0.8 15.7 22.4 46.0 6.9	3.0 20.2 18.6 30.1 8.3
24	帰甲のときJR小海線で座って帰れましたか。	0 座れた 1 座れたが3人掛け 2 床に腰を下ろした 3 立ちどおしだった	68.7 5.1 19.2 3.5	47.8 1.1 42.7 4.2	58.0 3.1 31.2 3.9
25	帰甲のとき車中での様子は怎么样了ですか。	0 ずっと寝てきた 1 ほとんど寝てきた 2 眠りたかったが眠れなかった 3 寝ずに帰った	19.4 48.1 14.3 14.7	4.4 31.3 28.9 29.6	11.7 39.5 21.8 22.3

平成8年度〔第70回〕

強行遠足実施要覽

H. 8. 10. 1 ~ 3



山梨県立甲府第一高等学校

学 校 0552-53-3525
野辺山本部 0267-98-2955

第70回強行遠足実施要項

- 1 目的
歩くことを通して自然に親しみ、大ききびやかな心を養うとともに、自己の体力の限界に挑むこと
によって、新しい人生経験を得ることを目的とする。したがって、綿密周到な歩行計画に基づき、各自の
体力に応じて自己のペースを保って歩行する。
- 2 期 日
平成8年10月1日(火)、2日(水)、3日(木)
1日(火)が実施不可能な場合は2日(水)、3日(木)、4日(金)に順延する。
なお、2日(水)が実施不可能な場合は中止する。
- 3 参 加
(1) 全員参加を原則とする。
参加者は、各自医師の診断を受けておくこと。なお、学校においても希望者並びに要注意者に対し
て健康診断を行なう。
(2) 不参加者は、10月1日(火)は出発式に参加する。2日(水)は定期的に登校して係の教師の指示を
受ける。
- 4 実施方法
(1) 出発地点・コース・最終地点及び総距離
① 男子 -- 学校から並崎、若神子、清里、野辺山、小海、中込、を経て、小諸市小諸市民会館まで
の103.3km
② 女子 -- 須玉小学校から男子と同じコースをたどりJR小海線小海駅前広場までの45.8km
(2) 出発時刻及び制限時間
① 男子 -- 1日(火) 14時30分に出発して2日(水)の12時00分に終わる。
制限時間21時間30分
② 女子 -- 2日(水) 6時30分に出発して15時10分に終わる。
制限時間 9時間40分
(3) 集 合
① 男子は10月1日(火) 13時00分までに登校し、13時30分に運動場の所定の位置に集合。係員の入
員点呼、服装、携行品の点検を受け、出発式に参加する。
② 女子は10月1日(火) 13時30分までに運動場の所定の位置に制限で集合し、出発式に参加する。
翌日10月2日(水) 5時15分までに登校。指定のバスに乗車し、係員の点呼を受ける。
5時30分須玉小学校に向け出発する。
(4) 出発式
10月1日(火) 男子出発に先立って、次の行事を行う。
① 校長あいさつ ② 激励のことば (PTA会長・同窓会長)
③ 生徒代表宣誓 ④ 係からの諸注意
(5) 出 発
① 男子は1日、14時30分号砲を合図に、所定の順序で出発する。
② 女子は2日、6時30分須玉小学校にて号砲を合図に、所定の順序で出発する。
(6) 教員検印所
別表のとおり17箇所(の教員検印所)が設けられており検印・集票・教員検印所
要教員者は速やかに連絡して処置を受けること。また、休憩、食事、給水をとることができる。

集合及び出発に関する事項

- 【男子の部】
- 1 集合
 - 10月1日 (火) 13時00分までに登校し、13時30分に校庭の所定の場所に集合する。
 - 2 集合場所
 - 校庭指揮台前に、南向きに西から、3年、2年、1年の順に各クラス一列縦隊で出席番号順に整列。整列したところで係員の人員点呼、服装・帯行品の点検を受ける。
 - 3 出発式
 - 14時00分に出発式を挙行する。(実施要項、4の(4)を参照)
 - 4 出発
 - 出発は次の要項による。
 - (1) 出発時刻 3年＝14時30分 2年＝14時35分 1年＝14時40分
 - (2) 出発 校長の出席の号砲とともに、各クラスの係員から一人一人出席番号順に検印カードを受け取り、逐次出発する。

- 【女子の部】
- 1 集合時間
 - 10月1日 (火) 13時30分に所定の位置に制服で集合し出発式に参加する。
 - 2 集合場所
 - 1年男子の東側に、3年、2年、1年の順に、各クラス一列縦隊、出席番号順に整列。副理事は出入を確認をする。
 - 3 出発当日の集合
 - 10月2日 (水) 5時15分までに別紙のバス乗車要項に則り、指定バスに乗車し係員の点呼を受ける。
 - 4 出発
 - 5時30分に発車し須玉小学校に向かう。所要時間は約40分。
 - 5 須玉小学校集合場所
 - 須玉小学校運動場に向き、西より、3年、2年、1年の順に各クラス1列縦隊、出席番号順に整列する。
 - 6 出発
 - 出発は次の要項による。
 - (1) 出発時刻 3年＝6時30分 2年＝6時35分 1年＝6時40分
 - (2) 出発 教頭の出発の号砲とともに、各クラスの係員から一人一人出席番号順に検印カードを受け取り、逐次出発する。
 - 7 注意
 - (1) 早朝なので遅刻しないように、特に家庭の協力を得ておく。
 - (2) バス出発までに間に合わない場合、特に参加の参加は認めない。
 - * スタート地点に直接来てもらっても参加させない。
 - * 須玉以北に在住者で事前申し出をした者は、6時10分までに須玉小学校に集合する。
 - (3) 須玉小学校では原則としてトイレを使用しない。本校を4時30分に開放するのでバス乗車までに必ず用をすませておく。

- (7) 通過地の証明
 - 検印カードの検印により通過地は証明される。
- (8) 前歯停止時刻
 - 各検印所には前歯停止時刻が設けられている。これは、この時刻以後に当所を前進しても、次の検印所の到着時刻までに到着することは不可能であると想定した時刻である。したがって、この時刻以後の到着者は前進できない。
- (9) 到着時刻
 - 各検印所に到着時刻が設けられている。これは、後者の者でも特別の事情がない限り、乗に到着し得ることを想定した時刻である。したがって、この時刻までに到着できない者は、一つ手前の検印所に最終到達地点となる。
- (10) 運 視
 - 運視係を設けコースを常に運視している。異常が起きた場合には速やかに連絡し処置を受けること。また、交通整理、道路標示には必ず従うこと。
- 5 備 考
 - 最終到達地点からの帰中は、JRを利用する。なお、(案) 乗車を発行し、団体乗車方式で行う。
- 6 医療救護対策
 - (1) 事前の健康診断・安全対策（薬生法講習会等）を行う。
 - (2) 検印所に可能な限り医師・保健婦・看護婦を配置する。
 - (3) コース沿線に、医療機関を確保する。
- 7 注意事項
 - 次の事項を十分確認し行動すること。
 - (1) 所定のコースを必ず通過すること。
 - (2) 服装は指定されたものを着用すること。違反者の参加は認めない。
 - (3) 学校での人員点呼時刻（女子はバス出発時刻）に遅れた者の参加は認めない。
 - (4) 検印所においては、氏名票を提出し、検印カードには検印を受ける。
 - (5) いずれの地点においても、前歯を中止した者、又は、前歯を停止させられた者は、検印カードをその検印所に提出する。（途中落伍は、最後に検印を受けた所が最終到達地点である。）
 - (6) 乗り降等で前進することを厳禁する。
 - (7) 検印カードを紛失した場合には、直ちに係員に届けること。
 - (8) 各自の体力に応じた歩行計画を立て、自己のペースを保って歩行すること。
 - (9) 安全歩行のために、必ず右側通行を遵守すること。（指定された場所を除く）
- 8 終了宣言
 - 10月3日 (木) 10時までに登校し、HRで出入・最終到着地点の確認その他の調査を受ける。
 - 10時15分に校長より「終了宣言」があり第70回強行遠足が終了する。
 - 帰送して支障した場合は4日（金）。

勤務概要要

【教頭検印所の任務】

- 1 学校集合時刻、配車、出発時刻、現地集合時刻を事前に確認しておく。
- 2 主任は、P留力者の役割分担、配置箇所、ローテーション等を事前に決めておく。
- 3 現地到着後、関係箇所にあいさつ、打合せを行い準備にかかると。
- 4 主任は、P区間指導係と担当区間を一週し、道路の状況を確認する。拠点指導箇所、安全指導重点区間、指導方法を設定する。(生徒の夜れを考慮して警告する。)
- 5 教頭検印所を設営する。(生徒の夜れを考慮して警告する。)
- 6 検印、氏名票回収、チャェック等の場所。
- 7 生徒通過の際の任務
- 8 検印カードへ検印。
- 9 氏名票回収、氏名一覧表で通過者の子エック。
- 10 生徒の救護、休憩、給水の補助。
- 11 後尾追行係到着後、前所出発人数、途中着人数、途中着人数、前所中止者数(氏名)、前所中止者数、前所中止者数(氏名)、到着者数、当所中止者数(氏名)の備忘録を作成。
- 12 報告書、中止者一覧表の作成。
- 13 当所残留者(中止者、区間着後者)の備忘録。
- 14 検印カードを提出させる場合

- (1) 当所での中止者及び前通停止時刻以後の到着者は、検印カードに検印し、検印所名を記入して回収する。
- (2) 到着制限時刻以後の到着者及び途中着人数で輸送された場合は、検印カードを提出させ、カードの最後の検印の次の矢印の上に「途中着人数」と書き添える。
- (3) 後尾追行係(八千種以遠)
- (4) 前所前通停止時刻までに前所待機し、前通停止時刻を待って後尾を次所まで運行する。
- (5) 出発の際は前通者数を確認し、途中運指係等に連絡して安全歩行に注意する。
- (6) 運行にあたっては、安全歩行に注意する。
- (7) 教頭検印所は、後尾追行係到着後、人員確認、報告、残留者の備忘録完了後、残務整理をして撤収する。*運搬依頼する物品は、荷運びやすいように梱包すること。運搬依頼リストに変更のある場合は関係箇所にあいさつ、本部への最終連絡後撤収、備申する。
- (8) その他
- (9) 先頭到着後ただちに、その旨を次所、次々所、本部に連絡する。
- (10) *連絡先は事前に主任同士で確認しておく。
- (11) 本部への連絡は次の通り

- ア 教頭検印所関係準備完了
 - イ 先頭到着
 - ウ 後尾係到着後人員確定
 - エ その他必要に応じて
 - オ 撤収完了後備申
- (3) 指定最終到着までに残留生徒全員が乗車できるように指導する。
 - (4) 原則として、J Rを利用して自力で備申させるが、それができない場合は、主任の判断でP車をお願いする。主任は、その旨を必ず本部に連絡する。

- (5) 何らかの理由で最終列車に乗車できない者がいた場合は、その旨を本部、甲府駅勤務者、学校、並びに家庭に連絡し、その者の所在を明確にし、1名は残留して対応する。
- (6) 各検印所の主任(重岡・若神子・津金・三軒屋・市場・を除く)は、(突)乗車票を生徒、付添教員に確実に手渡し、全員の生徒が乗車した後、乗車人数を確認し、人数を「びゅうプラザ申込」に報告する。

【区間指導係(監督・拠点指導)】

担当区間を主任と一週し、道路状況を把握する。拠点指導箇所、安全指導重点区間、指導方法を確認し、安全歩行のための道路標示を適切に行なう。

- 1 主な任務は次のとおりとする。
- 2 各設置検印所を本拠とし、所定の区間の巡回を行い、歩行状況の監視と指導、事故発生防止と処置、救護連絡、道路標示の確認、維持等を行なう。車には車票等を付け、巡回車であることを明確にする。
- 3 道路標示を必要とする箇所には、道路標示方法を参考に適切な表示を行ない、消えた箇所がなければだちに補修する。
- 4 途中中止の生徒を本拠の新設検印所へ輸送し、主任に引き渡す。
- 5 前所の前通停止時刻には前所待機し、後尾追行係が前所前通停止時刻までに到着しない場合は、前所から自所又は後尾追行係に連れられるまで後尾を運行する。(小海以前)
- 6 拠点指導係は、交通量の多い交差点・踏切・危険箇所・狭いやすり交差点等に駐在し、生徒通過の際の安全歩行の指導をする。夜間はライトを使用して所任を明確にする。
- 7 番号機のある交差点では番号機に従い、番号機の無い交差点では、車を留めさせ安全歩行を第一に指導する。
- 8 J R踏切のある区間では、あらかじめ最寄りの駅で列車通過時刻を調べておき、通過時刻には踏切へ駐在し指導する。上下線の貨物・客車とも調べる。
- 9 危険な行為を発見した場合には、嚴重に注意し、氏名・内容を主任に報告する。
- 10 後尾追行係に提出した際に任務を打切り本部に戻る。残務整理・撤収作業を依頼し、主任の解散宣言後備申する。
- 11 勤務終了後であつても他地域への移動状態は厳に慎むこと。

【全線巡回係】

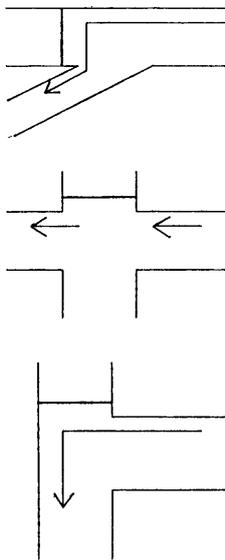
- 1 各設置検印所間の連絡を行ない、歩行指導等全線にわたって巡回する。
- 2 別に巡回計画を立てる。
- 3 各車には準備を付け、巡回遠足用車両であることが明確となるようにする。
- 4 各車には必要な備品(薬品類、ライト、石灰等)を携行していく。

【その他の係】

- A: 男子集合係
 - B: 女子集合係
 - C: 女子出発係
 - D: 全線巡回係
 - E: 小海駅勤務
 - F: 甲府駅勤務
 - G: 学校勤務
 - H: 運搬班
- 1 運送日に各検印所主任は、回収した検印カードをクラス係に分け、職員室の所定の机の上に置く。H R Tはこれを持ってH Rへ行き、一人一人の到達地点を確認し、出席簿に到達地点名を記入する。その後、検印カードは生徒に返却する。
 - 2 報告書は必要事項を記入して、担当に、氏名票、氏名一覧表は係の指示した場所に返却する。
 - 3 薬品は保鮮室に、その他の物品は物品係が指定した場所に返却する。

道路標示等の方法

1 石灰の場合

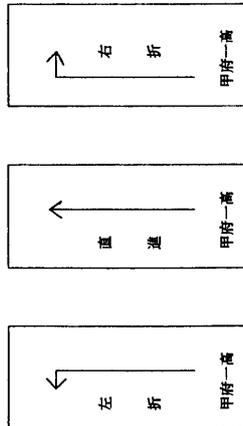


- ◇ 道路脇の崖崩れ
- ◇ 水溜まり又は穴

【備考】

- (1) 閉止線は、 \times を用いない。
- (2) 矢印は道路幅員の窄みにくい場所に書く。
- (3) 駐在指導員がいけない場所では特にわかりやすく書く。

2 標示板の場合



【備考】

- (1) 石灰で標示できない場所では立ち水、電柱、壁等を利用して標示板を掲げる。
- (2) 歩行してくる生徒から見えやすい位置に掲げる。
- (3) 終了後は取り外し持ち帰る。

参加生徒に対する注意事項

* 交通事情が年々悪化し、工事箇所も多い、「自分の生命は、自分で守る」という心構えで参加するよう指導する。

1 用 装

- 男子：(1) 制履上着 (脱いだ時は、体育着又は白の運動着)
 (2) 強行遠足用白ズボン (膝の下の前後に、蛍光テープを縫い付ける)
 (3) 指定の帽子 (表裏は必ず着用) (前後に、蛍光テープを縫い付ける)
 (4) 蛍光タスキ (夜間は上着の上上に必ず着用)

- 女子：(1) 上下とも体育着 (ハーフパンツの着用は禁止)
 (2) 運動靴 (履き慣れた物)

2 持 行 品

- (1) 検印カード (出発時に渡してもらい、返を通す。濡れない工夫をする。)
- (2) 氏名票 (男子17枚、女子8枚) (しわにならないように、なくさない。落書きをしない。)
- (3) 食料 (弁当 (2~3食)、塩飴、飲み物) (必ず持参する)
- (4) 防寒具・雨具 (必ず持参)
- (5) 着替え (ビニール袋に入れ濡れない工夫を。濡れたものは別のビニール袋に入れる。)
- (6) ティンバック、ナップザック等バッグ類。(男子は脱いだ学生服が入る大きさ。)
- (7) 懐中電灯 (男子) (必ず持参)
- (8) 地図、歩行計画表
- (9) 薬品 (絆創膏、テーピングテープ、塗り薬等)

【注意】

- (1) ①~⑦まで点検時になければスタートさせない。(女子は⑥まで)
- (2) 距離差1000m以上、1000m余りの行程は、途中で天候の急変が起こり得る。天候の急変にも対応できる万全の準備をしておく。
 特に、男女とも寒さ対策としてウインドブレーカー・ジャンパー・手袋等を、雨対策としてポンチョ・カッパ等を必ず持参する。

3 歩 行 に つ い て

- (1) 決められたコースを通過する。コースの事前研究をしておく。(距離表・コース略図参照)
- (2) 歩行計画を作成し、計画的に歩行する。(歩行計画立案図・通過時刻表参照)
- (3) 右側歩行 (指定区間を除く)、一列歩行を厳守する。
- (4) 歩道がある区間は、必ず歩道を歩行する。
- (5) 信号等交通法規に従う。車優先に歩行する。
- (6) 交差点、踏切、見通しの悪い箇所では、安全を確認して歩行する。
 *後半は体が思うように動かない。余裕を持って横断しなさい。
- (7) 思いそつな場所には係員がいるので、その指示に従う。また、係員がいけない場所には道路標示がある。それに従う。
- (8) 途中で集合の悪くなった時は、道路脇の目印に付く所で休み、他の生徒や区間連絡の方、また、通行人に連絡してもらい救護を受ける。
- (9) 男子は夜間歩行になるので、懐中電灯を使用する。
- (10) 夜間は、帽子、蛍光タスキを必ず着用する。
 *相手から見えないことが安全につながる。
- (11) 途中で雨になっても、本部の指示があるまで歩行する。
- (12) コースを間違えたり、検印票れや不正があると失格となる。
- (13) 履き慣れた運動靴を使用する。

4. 1階甲乗車について

乗印カードと引き替えに、「(既)乗車券」を到着教養検印所主任より発行してもらい、下車駅の新札係に出す。甲府駅以降の者は、それ以降は定期券を購入しておく。紛失した場合は普通運賃を各自支払う。 *駅到着後ただちに帰宅する。

5. 実行団の有志について (次頁、実行遠足に関するラジオ放送参照)

実行遠足に関するラジオ放送を聞いて行動する。
*学校、放送局に問い合わせをしてはならない。

6. その他

(1) 実行遠足の意義は、「自分の力で」「自分の責任で」参加することにある。便利な世の中であるが、あえて便利なものを利用しないで「自分だけの力」でどこまでできるか挑戦する。

また、「安全第一」を考慮して参加する。

① スタートからゴール、帰宅まで想定し、必要なものはすべて自分で背負っていく。

② お金に頼らない。教養検印所は、給水のみ、他を期待しない。

③ ただし、具合の悪いものは速断せず申し出て処置を受ける。

*各教養検印所には医師か看護婦が待機している。

(2) 気運の変化に応じた適切な服装で歩行する。

① 男子は、基本的には学生服(上着)・白スポンであるが、屋間は上着を脱いで大丈夫でない。

*上着は腰に巻かずバッグにしまう。

② 屋間は、体育着、白のTシャツ等薄着で歩行し、気運の変化に応じて変えていく。

③ 気温が下がってきたら学生服を着る、さらに冷えてきたら防寒着を着る。

④ 汗をかいたらその湿度下着を着替える。

*汗をかいたまま夜が来ると体調を崩す原因になる。

⑤ ゴールしたら最後の清拭えをして帰路に着く。

⑥ 天候の急変にも対応できる準備をしておく。

(3) 力を出し切るために

① オープンコースを守る。歩行計画作成資料を参考に目標到達地点(時刻)から割り出した自己のペースを守る。

② エネルギーの補給を計画的に行なう。

*歩行計画に食事場所(時間)を組み入れ、計画的にエネルギーを補給する。

③ 休みすぎない。

*「一眠りして」では力を出し切れぬ。

(4) 甲府一高実行遠足に参加する上での「自分の責任」を果たす。

*ゴミの投げ捨て、食べ歩き、落着、だらしない服装等強いている中であつても、行動には十分注意する。

(5) 集合時刻に遅れない。

*人員点呼時刻(男子)・バス出発時刻(女子)に遅刻した者の参加は認めない。

(6) 10月3日(木)10時00分までに登校する。

*10時15分からの「終了宣言」により第70回実行遠足は終了する。

実行遠足に関するラジオ放送(YBSラジオ)

【10月1日(火)】
朝 6:50~6:59

(A) 甲府一高の遠行遠足は、本日計画通り実施する予定です。

(B) 甲府一高の遠行遠足は、本日は中止し、普通授業を行いません。→ 8:40から普通授業

昼 11:50~11:59 (Bの場合はなし)

(C) 甲府一高の遠行遠足は、計画通り実施します。

(D) 甲府一高の遠行遠足は、明日に延期します。→ 14:30から体育館で全校集会

夜 22:00~22:10 (男子が出発した場合)

(E) 甲府一高の女子生徒の遠行遠足は、計画通り実施します。

(F) 甲府一高の女子生徒の遠行遠足は、中止します。→ 2日 家庭学習
3日 9:40から普通授業

*顺延になった場合

【10月2日(水)】

朝 6:50~6:59

(イ) 甲府一高の遠行遠足は、本日計画通り実施する予定です。

(ロ) 甲府一高の遠行遠足は、本年は中止します。→ 8:40から普通授業

昼 11:50~11:59 (ロの場合はなし)

(ハ) 甲府一高の遠行遠足は、計画通り実施します。

(ニ) 甲府一高の遠行遠足は、本年は中止します。→ 14:30から体育館で全校集会

夜 22:00~22:10 (男子が出発した場合)

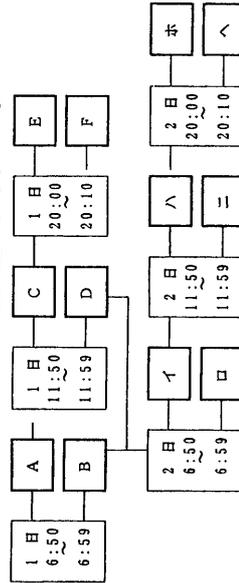
(ホ) 甲府一高の女子生徒の遠行遠足は、計画通り実施します

(ヘ) 甲府一高の女子生徒の遠行遠足は、本年は中止します。→ 3日 家庭学習

注意事項

- 上記以外の指示はない。YBSラジオ放送通りに行動すること。
- 夜の間には天候が急変することもあるので、必ず朝の放送を聞くこと。
- 放送局や学校に問い合わせの電話をしてはならない。
- 出発してからの天候の急変時における行動は、最寄りの教養検印所の指示に従うこと。

◇ラジオ放送の流れ◇



運動場		時刻		人員		要覧		9月開催	
記号	運動場名	開始時刻	終了時刻	人数	性別	要覧	備考	人数	性別
001	美和田旗西(左折)	14:20	2	0016	豊島総合文化会館東(左折)	14:45	2	14:45	2
002	緑が丘接骨院東(横断)	14:20	2	0017	溝口峠工北(直進)	14:45	2	14:45	2
003	緑が丘運動公園緑(横断)	14:20	4	0018	信号事業団住宅北(右折)	14:45	2	14:45	2
004	甲府北北(横断)	14:20	2	0019	先四つ角(横断)	14:45	2	14:45	2
005	武蔵野入口(横断)	14:30	2	0020	新島バス停東(直進)	14:45	2	14:45	2
006	湯村通り(横断)	14:30	2	0021	登美の坂田出入口(直進)	14:45	2	14:45	2
007	豊久川旅館北(左折)	14:30	2	0022	サトウ川-川野付川-清川三叉路(右折)	14:50	2	14:50	2
008	水道養生院入口(横断)	14:35	2	0023	団子新居三叉路(左折)	14:50	2	14:50	2
009	水道千尋5丁目(横断)	14:35	2	0024	鷹沼入口(直進)	14:50	2	14:50	2
0010	水道新商店南(横断)	14:35	2	0025	笠石地内(直進)	15:00	2	15:00	2
0011	山宮上町バス停(横断)	14:35	4	0026	東目久野町センター入口(直進)	15:10	2	15:10	2
0012	国道甲府界山峠緑(横断)	14:35	2	0027	原口一タリ一(左折)	15:20	2	15:20	2
0013	甲府北西中手前(左折)	14:35	2	0028	広域鉄道交差点(横断)	15:30	2	15:30	2
0014	豊島金風北(左折)	14:40	2	0029	上ノ山交差点(直進)	15:35	2	15:35	2
0015	豊島金風西(右折)	14:40	2	0030	国道(141)南出口(右折)	15:40	2	15:40	2

記号	係	係名	所属	係員氏名() : 兼務	主任者	教P	医	審	備
A	男子集合出発係			関口(D)、横田(特+C)、五味(D)、保坂(特+D) 村上(B+C)、田中(F)、葉袋(B+C+D+C)、須藤(D) 岩野(D)、吉成(特+C)、安達(B+C)、夏川(C+D) 岩松(C+D)	○主任	13	7	1	
B	女子集合			村上(A+C)、葉袋(A+C+D+C)、若尾(1+H) 庄司(1+C+H)、A-1(1+H)、安達(A+C)		6		4	
C	女子出発			横田(A+特+C)、葉袋(A+B+D+C)、吉成(特+A) 庄司(1+B+H)、石原(2+H)、今村(2+H)、夏川(A+H) 岩松(A+H)、中込(2+B+H)、武井(2+B+H)		10	12	4	
D	全線応援			関口-保坂(A)、五味-須藤(A)、葉袋(A+B+C+G) 夏川-岩松(A-B)、里野(A)一團2名		8	7	3	
E	準備教護係印刷所			○春日(E)、山名(E)、若尾(B+H)、任司(B+C+H) A-1(1+H)		5	13	1	2
F	準備教護係印刷所			若神子					
G	準備教護係印刷所			○石原(F)、市川(F)、今村、中込、武井(C+H)		5	1	1	2
H	準備教護係印刷所			津金					
I	準備教護係印刷所			○保坂、山田、清水		3	1	1	
J	準備教護係印刷所								
K	準備教護係印刷所								
L	準備教護係印刷所			○若杉、曾根、千野		3	1	1	

記号	係	係名	所属	係員氏名() : 兼務	主任者	教P	医	審	備
501	三軒屋	清里西門指簿	清里	清里東国産出口まで			14		
5	清里	教護係印刷所		○功刀、小沢		2	1	1	1
601	清里	野辺山西門指簿	野辺山				22		
6	野辺山	教護係印刷所		○赤池(特)、武坂(特)、矢嶋(特)、田代(特) *丸山、岡部		7	1	2	3
		本部		○横田(A+C)○藤巻、吉成(A+C)		3			
701	野辺山	市場西門指簿	市場				10		
7	市場	教護係印刷所		○山本、戸澤		2	1	1	1
801	市場	海ノ口西門指簿	海ノ口				18		
8	海ノ口	教護係印刷所		○高瀬、奥水、Jay		3	1	1	2
901	海ノ口	松原湖教護係印刷所	松原湖				16		
9	松原湖	教護係印刷所		○福岡、花形		2	1	1	2
1001	松原湖	小海西門指簿	小海				16		
10	小海	教護係印刷所		○依田、雨宮、土屋、依田、岩下、中島、矢嶋		7	1	3	4
101	小海	八千穂教護係印刷所	八千穂				8		
11	八千穂	教護係印刷所		○渡辺、伊神		2		1	
1201	八千穂	羽黒下教護係印刷所	羽黒下	羽黒下駅出口まで			9		
12	羽黒下	教護係印刷所		○辻、田中		2		1	1
1301	羽黒下	白田西門指簿	白田	白田駅北交差点まで			12		
13	白田	教護係印刷所		○金子、保坂、飯沼		3	1	1	
1401	白田	中込西門指簿	中込	精神科北門切まで			17		
14	中込	教護係印刷所		○中込、浅川		2		1	2
1501	中込	岩村田西門指簿	岩村田	長土呂東交差点まで			21		
15	岩村田	教護係印刷所		○藤巻、中島		2	1	1	1
1601	岩村田	三岡西門指簿	三岡	三岡駅前信号橋南まで			10		
16	三岡	教護係印刷所		○大西、加藤		2		1	
1701	三岡	小海西門指簿	小海				21		
17	小海	教護係印刷所		○久神川、市川、小尾(特)、野中、日高、佐藤(特)		7	1	5	3
E	小海	沢家運動場		○春日(1)、山名(1)、今村、中込、武井(2+C)		4	6	1	4
F	甲府	家運動場		○石原(2)、田中(F)(A)、庄司(C)、若尾、A-1(1+H)		5	6		
G	学校	運動場		○村上(A+B)、葉袋(A+B+C+D)、安達(A+B)		4			
H	三軒屋	運動場		○小尾(17)、赤池(6)、長坂(6)、矢嶋(6)、神澤(6) ○佐藤(17)、田代(6)(丸山、岡部)		9		3	

子出発主任より参加者数の連絡を受け、女子の後援を小海まで実行する。
 (4号車) 校長車として、全額にわたり運送を行なう。小旗で休養する。
 (5号車) 女子出発後、小海まで先導・運送を行なう。
 (6・7号車) 全額にわたり運送を行なう。野辺山で休養する。
 その他

- (1) 各号車は適宜休養を休養する。食事は適当な場所とする。
- (2) 後援連絡は、交通指導致している方の係に属後援であることを伝える。
- (3) 2・3号車の後援連絡は夜間ヘルメット・蛍光チョッキを準備する。

0の1～30 学校～国道141号出口手前までの交通指導 P: 6.4名

◆コース概図：①の参照

- 1 コース概図：業務別に人員一覽表を参考に、所定の場所の所定の時刻に勤務につく。
- 2 生徒通過にあたっての交通指導を行なう。
- 3 特に、交差点での勤務なので、横断、左折の際は十分注意する。
- 4 狭い道路が多いので一列歩行、右側歩行を遵守させる。
- 5 男子後援隊に全しして勤務を終了する。
- 6 調子を付け、横断旗を持って指導をする。

1 津金教護検印所

員：5名 ○春日一山名(E) 庄司(C+B+F) 若尾(B+F) ハーガー(B+F)
 P: 1.3名 区：1名 同：2
 ◇所在地：白百合幼稚園 (0551-22-2455) (専0551-22-2908)
 ◇緊急区：美袋整形外科医院 (0551-22-0203)
 ○先着予想時刻=15時50分 (昨年16時08分)
 ○前送停止時刻=19時45分
 ○到着制限時刻=20時00分

- 1 1日14時00分までに白百合幼稚園に行き、幼稚園関係者と打ち合せ後、当所に教護検印所を設営し、付近の道路標示等を行い、生徒の到着を待つ。
- 2 生徒の通過に際しての任務は勤務概況参照。
- 3 後援隊の到着・集計・報告をもって任務終了。業務整理、教護検印所を撤収する。
- 4 教護検印所撤収後、(春日・山名)は、小海沢駅に行き、駅と打合せの後、高麗旅館で休養する。翌朝8時30分から小瀬沢駅勤務につく。(庄司・若尾・ハーガー)は、帰宅、翌朝女子出発の任務につく。

2の1 通崎～若神子間指導

員：8名 所属=若神子教護検印所
 P: 5.5名 区：1名 署：1名
 ◆重点箇所：三村橋入口信号機所
 ・朝の木橋信号右折
 ・若神子下交差点右折
 ・百瀬信号左折横断
 ・津金検印所道路横断(出入口)

◆コース概図：②の参照

- 1 1日14時30分までに若神子教護検印所に行き、主任と打ち合せの上、区内の道路標示、拠点指導箇所を確認を行い、若神子教護検印所で生徒の到着を待つ。
- 2 通崎からの先頭到着の報告を待つ。配置につき、任務を開始する。以後、通崎～若神子間の拠点指導及び返視を繰り返す。
- 3 男子後援隊に全しして任務を終了し、若神子教護検印所を設営、撤収後宿舎で休養する。翌朝の女子出発隊を指導する。

2 若神子教護検印所

員：5名 ○石原(C+B) 市川 今村(E) 中込(H+E) 武井(E)
 P: 4.4名 区：1.1名 同：2名
 ◇所在地：須玉町役場 (0551-42-2111) (専0551-42-2931)
 ◆重点箇所：若神橋 (0551-42-3378)
 ◆緊急区：須川病院 (0551-42-2221)
 ○先着予想時刻=17時10分 (昨年17時31分)
 ○前送停止時刻=22時45分
 ○到着制限時刻=23時00分

- 1 1日14時30分までに須玉町役場に行き、役場・教育委員会職員と打合せの上、教護検印所を設営し、生徒の到着を待つ。
- 2 生徒の通過に際しての任務は勤務概況参照。
- 3 後援隊の到着・集計・報告をもって任務終了。業務整理、教護検印所の撤収後、宿舎で休養する。
- 4 2日6時00分までに須玉小学校に行き、女子出発の任務につく。(実業要項女子出発参照)
- 5 その他

- (1) 第2号車(星野・同部)は若神橋で休養。第3号車(須川・岩松)は若神橋で宿泊する。
- (2) 主任は、3日16時00分までに須玉小学校に出向き、あいさつと準備を済ませる。
- (3) 中止した生徒は、宿舎で休養させ、2日6時10分までに須玉小学校に輸送し、女子輸送の折り返しバスで帰甲させる。

3の1 若神子～津金間指導

員：1.0名 所属=津金教護検印所
 ◆重点箇所：津金入口(右折)
 ・六平地区内
 ・検印所方面入口(右折)
 ◆コース概図：⑤⑥の参照
 1 1日14時30分までに津金教護検印所に行き、主任と打ち合せの上、区内の道路標示、拠点指導箇所を確認を行い、津金教護検印所で生徒の到着を待つ。
- 2 若神子からの先頭到着の報告を待つ。配置につき、任務を開始する。以後、若神子～津金の拠点指導及び返視を繰り返す。
- 3 男子後援隊に全しした際に任務を打ち切り、宿舎で休養する。
- 4 翌朝、女子出発時刻(8時30分)までに配置につき、任務を再開する。女子後援隊に係合した際に任務を打ち切り、津金教護検印所を応援し、撤収後帰甲する。

3 津金教護検印所

員：3名 ○保坂博 山田 清水
 P: 5.5名 区：1名 署：1名
 ◇所在地：津金公民館 (0551-46-2012) (専0551-46-2674)
 ◆重点箇所：フアニーボケット (0551-47-4325)
 ◆緊急区：須川病院 (0551-42-2221)
 ○先着予想時刻=(男子)18時10分 (昨年18時40分) (女子)7時10分 (昨年7時13分)
 ○前送停止時刻=(男子)1時00分 (女子)8時25分
 ○到着制限時刻=(男子)1時30分 (女子)8時30分
 1 1日14時30分までに津金公民館に行き、公民館職員と打合せの上、教護検印所を設営し、宿舎で休養。生徒の到着を待つ。
- 2 生徒の通過に際しての任務は勤務概況参照。
 なお、女子については就業のみで検印は行はなわない。
- 3 男子後援隊の到着・集計・報告をもって男子の任務終了、宿舎で休養する。
- 4 中止した生徒は、宿舎で休養させ、2日6時10分までに須玉小学校に輸送し、若神子主任に引継ぎ、女子輸送の折り返しバスで帰甲させる。

- 5 2日、7時00分には女子到着準備を完了させ、女子到着を待つ。
- 6 生徒の通過に際しての任務は勤務概況参照。
- 7 女子後尾尾道行係の到着・集計・報告をもって女子の任務を終了する。
- 8 残務整理、教護検印所の撤収をして帰申する。

4の1 津金～三軒屋間指導 P: 8名 所属＝三軒屋教護検印所

- ◆重点箇所 津金大和地内道
- ・林道手前三叉路左折
- ・大門ダム上道路
- ・旧弘法三叉路(右折)

◆コース略図(◎参照)

- 1 1日15時00分までに三軒屋教護検印所に行き、区内内の道路標示、拠点指導備所の確認を行い、三軒屋教護検印所で生徒の到着を待つ。なお、「安全運転協力依頼」標識1本を適当な場所に設置し、終了後持ちかえる。
- 2 津金からの先頭到着の報告を待って、配置につき、任務を開始する。以後、津金～三軒屋間の拠点指導及び巡視を繰り返す。特に津金教護検印所から先は林道になり、夜間は非常に暗く寂しい所なので、点滅燈や懐中電灯等利用する。
- 3 大門ダム上道路を通行するので、生徒に安全歩行を励行するよう指導する。
- 4 男子後尾尾道行係に会した際に任務を打ち切り、宿舎で休養する。
- 5 2日、津金からの女子先頭到着の報告を待って配置につき、任務を再開する。女子後尾尾道行係に会した際に任務を打ち切り、三軒屋教護検印所を応援し、撤収後帰申する。

4 三軒屋教護検印所

員: 3名 岩杉 千野 曹 員

P: 3名 署: 1名

△所在地: 小清水林蔵氏宅(0551-48-2501)(車0551-48-2362)

◇役員: ベンションかくれんぼ(0551-48-3020)

◆教習区: 堀川病院 (0551-42-2221)

○先着予想時刻(男子) 19時10分 (昨年19時41分) (女子) 8時00分 (昨年7時50分)

○前送停止時刻(男子) 9時30分 (女子) 10時00分

○到着制限時刻(男子) 9時30分 (女子) 10時15分

- 1 1日15時00分までに小清水氏宅に行き、小清水氏と打合せの上、教護検印所を設置し、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
- 2 生徒の通過に際しての任務は勤務概況参照。
- 3 男子後尾尾道行係の到着・集計・報告をもって男子の任務を終了、宿舎で休養する。
- 4 主任は、中止した生徒を清里「峰の茶屋」に輸送し休養させる。なお、清里主任に輸送生徒名(数)を報告する。
- 5 2日、7時30分には女子到着準備を完了させ、女子到着を待つ。
- 6 生徒の通過に際しての任務は勤務概況参照。
- 7 女子後尾尾道行係の到着・集計・報告をもって女子の任務を終了する。
- 8 主任は、当所で中止した生徒を清里に輸送し、清里主任に引き継ぎ帰申させる。
- 9 残務整理、教護検印所の撤収をして帰申する。

5の1 三軒屋～清里間指導 P: 9名 所属＝清里教護検印所

- ◆重点箇所 清里方面入口交差点(横断左折) 清里東国道出口(左折・左側歩道通行指導)
- ◆コース略図(◎参照)

◆コース略図(◎参照)

- 1 1日15時00分までに清里教護検印所に行き、区内内の道路標示、拠点指導備所の確認を行い、清里教護検印所で生徒の到着を待つ。なお、「安全運転協力依頼標識」4本を適当な場所に設置し、終了後持ちかえる。

厘し、終了後持ちかえる。

- 2 三軒屋からの先頭到着の報告を待って、配置につき、任務を開始する。以後、三軒屋～清里間の拠点指導及び巡視を繰り返す。
- 3 男子後尾尾道行係に会した際に任務を打ち切り、宿舎で休養する。
- 4 2日、三軒屋からの女子先頭到着の報告を待って配置につき、任務を再開する。女子後尾尾道行係に会した際に任務を打ち切り、清里教護検印所を応援し、撤収後帰申する。

5 清里教護検印所

員: 2名 ○功刀 小沢

P: 5名 署: 1名 間: 1

△所在地(宿舎): ホテルカナルム(0551-48-3511)(車0551-48-2362)

◇休養所(生徒): 峰の茶屋(0551-48-2028)

◆教習区: 堀川病院 (0551-42-2221)

○先着予想時刻(男子) 19時50分 (昨年20時24分) (女子) 8時30分 (昨年8時17分)

○前送停止時刻(男子) 4時15分 (女子) 11時00分

○到着制限時刻(男子) 4時50分 (女子) 11時20分

- 1 2日15時00分までにホテルカナルムに行き、関係者と打合せの上、教護検印所を設置し、宿舎休養、生徒の到着を待つ。
- 2 生徒の通過に際しての任務は勤務概況参照。
- 3 男子後尾尾道行係の到着・集計・報告をもって男子の任務を打ち切り、宿舎で休養する。
- 4 主任は、中止した生徒を清里駅前「峰の茶屋」で休養させ、2日6時10分発の列車に乗車させる。なお、三軒屋で中止した生徒が輸送されてくるので、「峰の茶屋」で休養させ、清里中止の生徒と共に備用指導をする。
- 5 2日、8時00分までに女子到着準備を完了させ、女子到着を待つ。
- 6 生徒の通過に際しての任務は勤務概況参照。
- 7 女子後尾尾道行係の到着・集計・報告をもって女子の任務を終了する。
- 8 主任は、生徒・市道員が全て列車に乗車した後、(びゅうプラザ中又は0267-62-0203)に乗車生徒・付添教員の人数を報告する。
- 9 残務整理、教護検印所の撤収をして帰申する。
- 10 当所で中止した女子及び三軒屋で中止し輸送されてくる生徒の最終乗車列車は12時15分発である。

6の1 清里～野辺山間指導 P: 10名 所属＝野辺山教護検印所

- ◆重点箇所 清里駅前 学校入口信号横断(左→右へ)
- ・左側歩道通行区間
- ・旧道入口・踏切
- ・JR最富地点踏切
- ・旧国道

◆コース略図(◎参照)

- 1 1日15時00分までに野辺山教護検印所に行き、主任と打合せの上、区内内の道路標示、拠点指導備所の確認を行い、野辺山教護検印所で生徒の到着を待つ。なお、「安全運転協力依頼標識」3本を適当な場所に設置し、終了後持ちかえる。
- 2 清里からの先頭到着の報告を待って、配置につき、任務を開始する。以後、清里～野辺山間の拠点指導及び巡視を繰り返す。
- 3 男子後尾尾道行係に会した際に任務を打ち切り、宿舎で休養する。
- 4 2日、清里からの女子先頭到着の報告を待って配置につき、任務を再開する。女子後尾尾道行係に会した際に任務を打ち切り、野辺山教護検印所を応援し、撤収後帰申する。
- 5 男児が3箇所あるので、列車通過時刻を確認し、通過時刻には駐在し歩行指導にあたる。
- 6 男女とも清里の前送停止時刻までに後尾尾道行係が清里に到着しない場合、清里の前送停止時刻を待って後尾尾道行係に追付かれるまで運行する。

6 野辺山教護検印所 職：7名 ○赤池一長坂一夫嶋一神澤一田代一丸山一岡登(印)
P：12名 区：1名 番：2名 同：3名

- ◇所在地：野辺山観光案内所(0267-98-2091)(専0267-98-2955)
◇宿舍：野辺山荘(0267-98-2027)
◇先着予約時刻=(男子)20時30分(昨年21時22分) (女子)9時20分(昨年8時57分)
○前送停止時刻=(男子)6時10分 (女子)12時30分
○到着制限時刻=(男子)6時45分 (女子)13時00分
- 1日学校から市場までの物品を運搬、配布し、13時30分までに野辺山観光案内所に行き、関係者と打ち合せの上、教護検印所を設営し、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
 - 生徒の通過に際しての任務は勤務状況参照。
 - 男子後尾尾行係の到着・集計・報告をもって男子の任務を終了し、当所で中止した女子生徒の列車乗車措置をする。
 - 男子に引き継ぎ、8時50分までに女子到着準備を完了し、女子到着を待つ。
 - 生徒の通過に際しての任務は勤務状況参照。
 - 女子後尾尾行係の到着・集計・報告をもって女子の任務を終了し、当所で中止した女子を列車乗車措置をする。
 - 勤務整理、教護検印所の撤収をして帰甲する。
 - 途中の教護検印所での使用物品を回収し撤収する。
 - 主任は、当所で中止及び市場教護検印所から輸送されて来た生徒を、男子は8時36分宛、女子は13時53分宛までの列車に乗車させ帰甲させる。
 - 主任は、生徒・付添職員が全て列車に乗車した後、(びゅうプラザ中込0267-62-0203)に乗車生徒・付添職員の人数を報告する。

野辺山本部 職：3名 ○横田(A+C) ○藤巻 吉政(A+C)

- ◇所在地：野辺山観光案内所(0267-67-2091)(専0267-98-2955)
1日13時00分までに野辺山観光案内所に行き、打ち合せの上、本部を設営する。
2本部は、各検印所との連絡調整にあたり、緊急事態が生じた場合には、必要に応じて対話し指示を出す
3(横田)は、(吉成)の車で2日6時00分に須玉小学校に行き、女子出発を業務する。
4本部は、各教護検印所及び各選送車との最終連絡を待つ帰甲する。

7-1 野辺山～市場間指導 P5名 所属＝市場教護検印所

- ◆重点箇所：市場信号機横断
◆コース地図：④参照
1日15時30分までに市場教護検印所に行き、主任と打ち合せの上、区内内の道路標示、拠点指導箇所を確認を行い、市場教護検印所で生徒の到着を待つ。
2野辺山からの先頭到着の報告を待つ。配置につき、任務を開始する。以後、野辺山～市場間の拠点指導及び巡回を繰り返す。
3男子後尾尾行係に全した順に任務を打ち切り、教護検印所等で休養する。
42日野辺山からの女子先頭到着の報告を待つ。配置につき、任務を再開する。女子後尾尾行係に全した順に任務を打ち切り、市場教護検印所を応援し、撤収後帰甲する。
5男女とも野辺山の前進停止時刻までに歩道通行係が野辺山に到着しない場合、野辺山の前進停止時刻を待つ。後尾尾行係に連付されるまで通行する。

7 市場教護検印所 職：2名 ○山本、安達
P：5名 番：1名 同：1

- ◇所在地(宿舍)八ヶ岳荘(0267-98-2813)(専0267-98-2452)
○先着予約時刻=(男子)21時20分(昨年22時11分) (女子)10時10分(昨年9時31分)
○前進停止時刻=(男子)7時55分 (女子)13時45分
○到着制限時刻=(男子)8時15分 (女子)14時00分

- 1日15時30分までに八ヶ岳荘に行き、関係者と打ち合せの上、教護検印所を設営し、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
- 生徒の通過に際しての任務は勤務状況参照。
- 男子後尾尾行係の到着・集計・報告をもって男子の任務を打ち切り、当所で中止した男子生徒を野辺山に輸送し、野辺山主任に引き継ぎ帰甲させる。
- 男子に引き継ぎ、9時40分までに女子到着準備を完了させ、女子到着を待つ。
- 生徒の通過に際しての任務は勤務状況参照。
- 女子後尾尾行係の到着・集計・報告をもって女子の任務を終了し、当所で中止した女子を野辺山に輸送し、野辺山主任に引き継ぎ帰甲させる。
- 勤務整理、教護検印所の撤収をして帰甲する。
- 主任は、当所で中止した生徒を野辺山へ輸送し、野辺山主任へ引き継ぎ、男子は10時21分宛、女子は14時56分までの列車に乗車させ帰甲させる。

8の1 市場～海ノ口間指導 P:13名 所属=海ノ口教護検印所

- ◆重点箇所・市場坂
 - ・市場坂電話ボックス右折
 - ・相模瀬南国道出口右折
- ◆コース概図：①参照

- 1 1日15時00分までに海ノ口教護検印所に行き、主任と打合せの上、区間内の道路標示、拠点指導箇所の確認を行い、宿舎で休養、先頭を待つ。
- 2 市場からの男子先頭到着の報告を受け、配置につき、任務を開始する。以後、市場～海ノ口間の拠点指導及び送迎を繰り返す。
- 3 男子後尾退行係に会した順に任務を打ち切り、教護検印所等で休養する。
- 4 市場からの女子先頭到着の報告を受け、配置につき、任務を再開する。
- 5 女子後尾退行係に会した順に任務を打ち切り、海ノ口教護検印所を応援し、撤収後帰申す。
- 6 男女とも市場の前進停止時刻までに後尾退行係に到着しない場合、市場の前進停止時刻を待つ。後尾退行係に遅付されるまで運行する。
- 7 勤務が長時間になるので、交替で休養をとる。

8 海ノ口教護検印所

職：3名 ○高瀬 興水 Jay
P:5名 区:1名 署:1名 同:2名

- ◇所在地：南牧村役場(0267-96-2211)(車0267-96-2803)
- ◇宿舎：和泉館(0267-96-2106)
- ◇救急医：海ノ口診療所(0267-96-2112)
- 先着子退時刻=(男子)21時50分(昨年22時55分)(女子)10時50分(昨年9時58分)
- 前送停止時刻=(男子)9時10分(女子)13時45分
- 到着制限時刻=(男子)9時45分(女子)15時10分

- 1 1日15時00分までに南牧村役場に行き、役場職員と打合せの上、教護検印所を報告し、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
- 2 生徒の通過に際しての任務は勤務概況参照。
- 3 男子後尾退行係の到着・集計・報告をもって男子の任務を打ち切り、当所で中止した生徒の列車乗車指導を行なう。
- 4 男子に引き継ぎ、2日10時10分までに女子到着準備を完了させ、女子到着を待つ。
- 5 女子生徒の通過に際しての任務は勤務概況参照。
- 6 女子後尾退行係の到着・集計・報告をもって女子の任務を終了する。
- 7 当所で中止した生徒の列車乗車指導をし、残務整理、教護検印所の撤収をして帰申す。
- 8 主任は、南牧村診療所・佐久海ノ口駅にあいさつに行く。
- 9 当所からの最終乗車列車は、男子11時44分発、女子6時27分発である。
- 10 主任は、生徒・付添教員が全て列車に乗車した後、生徒・付添教員の乗車人数を(びゅうプラザ中込)に連絡する。(0267-62-0203)

9の1 海ノ口～松原湖間指導

P:10名 所属=松原湖教護検印所

- ◆重点箇所・レストランななかまど南右折
 - ・ななかまど先頭切横断
 - ・海浜南門
 - ・松原湖駅前
- ◆コース概図：①参照

- 1 1日15時00分までに松原湖教護検印所に行き、主任と打合せの上、区間内の道路標示、拠点指導箇所の確認を行い、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
- 2 海ノ口からの男子先頭到着の報告を受け、配置につき、任務を開始する。以後、海ノ口～松原湖間の

拠点指導及び送迎を繰り返す。

- 3 男子後尾退行係に会した順に任務を打ち切り、教護検印所等で休養する。
- 4 海ノ口からの女子先頭到着の報告を受け、配置につき、任務を再開する。
- 5 女子後尾退行係に会した順に任務を打ち切り、松原湖教護検印所を応援し、撤収後帰申す。
- 6 男女とも海ノ口の前進停止時刻までに後尾退行係に到着しない場合、海ノ口の前進停止時刻を待つ。後尾退行係に遅付されるまで運行する。
- 7 勤務が長時間になるので、交替で休養をとる。

9 松原湖教護検印所

職：2名 ○福岡 花形
P:6名 区:1名 署:1名 同:2名

- ◇所在地(宿舎)：小瀬兼太郎氏宅(0267-92-2235)
- ◆救急医：小瀬赤十字病院(0267-92-2077)
- 先着子退時刻=(男子)22時40分(昨年23時52分)(女子)11時40分(昨年10時33分)
- 前送停止時刻=(男子)10時45分(女子)14時20分
- 到着制限時刻=(男子)11時15分(女子)15時10分

- 1 3日15時00分までに松原湖駅前小瀬氏宅に行き、小瀬氏と打合せの上、教護検印所を報告し、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
- 2 生徒の通過に際しての任務は勤務概況参照。
- 3 男子後尾退行係の到着・集計・報告をもって男子の任務を打ち切り、当所で中止した生徒の列車乗車指導を行なう。
- 4 男子と並行して、11時00分頃までに女子到着準備を完了させ、女子到着を待つ。
- 5 女子後尾退行係の到着・集計・報告をもって女子の任務を終了し、当所で中止した生徒の列車乗車指導をし、残務整理、教護検印所の撤収をして帰申す。
- 6 当所からの最終乗車列車は、男子11時35分発、女子16時15分発である。
- 7 主任は、生徒・付添教員が全て列車に乗車した後、生徒・付添教員の乗車人数を(びゅうプラザ中込)に連絡する。(0267-62-0203)

10の1 松原湖～小瀬間指導

P:8名 所属=小瀬教護検印所

- ◆重点箇所・小瀬トンネル西交差点信号横断
 - ・小瀬駅方面左折
 - ◆コース概図：①参照
- 1 1日15時00分までに小瀬教護検印所に行き、主任と打合せの上、区間内の道路標示、拠点指導箇所の確認を行い、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
 - 2 松原湖からの男子先頭到着の報告を受け、配置につき、任務を開始する。以後、松原湖～小瀬間の拠点指導及び送迎を繰り返す。
 - 3 男子後尾退行係に会した順に任務を打ち切り、教護検印所等で休養する。
 - 4 松原湖からの女子先頭到着の報告を受け、配置につき、任務を再開する。
 - 5 女子後尾退行係に会した順に任務を打ち切り、小瀬教護検印所を応援し、撤収後帰申す。
 - 6 男女とも松原湖の前進停止時刻までに後尾退行係に到着しない場合、松原湖の前進停止時刻を待つ。後尾退行係に遅付されるまで運行する。
 - 7 勤務が長時間になるので、交替で休養をとる。

10 小海救護検印所

場所：7名 ○依田道 雨宮 土屋 依田源 岩下 中島 権
P：8名 区：1名 署：2名 同：4名
◇所在地：小海駅前広場(0267-92-4772)
◇宿舎：小海赤十字病院 (0267-92-2101)

- ◇救急医：小海赤十字病院 (0267-92-2077)
- ◇先着予想時刻＝(男子)23時10分 (昨年 0時17分) (女子)12時00分(昨年10時50分)
- ◇前進停止時刻＝(男子)10時15分 (女子)15時10分
- ◇到着制限時刻＝(男子)12時00分
- 到着制限時刻までに小海駅に行き、小海駅・J.A.小海駅係者と打合せの上、駅前広場に救護検印所を設け、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
- 2 主任(依田道)は、J.A.駅・警察・病院・地区自治会長にあいさつに行く。
- 3 生徒の通過に際しての任務は勤務概況参照。
- 4 男子後戻り行係の到着・集計・報告をもって男子の任務を打ち切り、当所で中止した生徒の列車乗車指導を行なう。
- 5 男子と並行して11時30分頃までに女子到着準備を完了させ、女子到着を待つ。
- 6 主任は、男子の前進停止時刻10時15分に、八千穂からの後戻り行係(伊神)に、後戻りの生徒の進行を指示する。
- 7 女子後戻り行係の到着・集計・報告をもって女子の任務を終了する。到着した生徒の列車乗車指導をし、残務整理、救護検印所の撤収をして帰る。
- 8 当所からの最終乗車列車は、男子13時14分発、女子16時10分発である。
- 9 女子到着者一覧表を作成する。
- 10 主任は女子の最終乗車列車発車後、小海駅主任にその旨連絡する。
- 11 主任は、生徒・付添教員が全て列車に乗車した後、生徒・付添教員の乗車人数を(びゅうプラザ中込)に連絡する。(0267-62-0203)
- 12 (女少嶋)・5269号小海駅の団体乗車責任者となる。
- 13 (若下)・番1・P.1は、15時13分小海駅発の団体乗車責任者となる。
- 14 (中島)・番1・P.1は、16時10分小海駅発の団体乗車責任者となる。

11の1 小海～八千穂回指簿

場所：2名 ○渡辺 伊神
P：3名 署：1名
◇所在地：黒沢商店(0267-88-2034)(車0267-88-2470)
◇宿舎：若広病院 (0267-92-2139)
◇救急医：千曲病院 (0267-86-2360)

- 先着予想時刻＝23時50分 (昨年 1時07分)
- 前進停止時刻＝10時50分
- 到着制限時刻＝12時00分
- ◆重点箇所・高岩駅北階切通所
◆コース概図：⑨参照
- 1 1日15時00分までに八千穂駅前黒沢商店に行き、主任と打合せの上、区間内の連絡標示、拠点指簿箇所を確認を行い、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
- 2 小海からの男子先頭到着の報告を待つ、配置につき、任務を開始する。以後、小海～八千穂間の拠点指簿及び返指を繰り返す。
- 3 小海からの後戻り行係(伊神)に会いし順に任務を打ち切り、八千穂救護検印所の応接をし、撤収後帰る。

11 八千穂救護検印所

場所：2名 ○渡辺 伊神
P：3名 署：1名
◇所在地：黒沢商店(0267-88-2034)(車0267-88-2470)
◇宿舎：若広病院 (0267-92-2139)
◇救急医：千曲病院 (0267-86-2360)

- 先着予想時刻＝23時50分 (昨年 1時07分)
- 前進停止時刻＝10時50分
- 到着制限時刻＝12時00分
- ◆重点箇所・四谷差点橋所
◆コース概図：⑨参照
- 1 1日15時00分までに八千穂救護検印所に行き、主任と打合せの上、区間内の連絡標示、拠点指簿箇所を確認を行い、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
- 2 八千穂からの男子先頭到着の報告を待つ、配置につき、任務を開始する。以後、八千穂～羽黒下間の拠点指簿及び返指を繰り返す。
- 3 八千穂からの後戻り行係(田中初)に会いし順に任務を打ち切り、羽黒下救護検印所の応接をし、撤収後帰る。

- 1 1日15時00分までに八千穂駅前黒沢商店に行き、黒沢氏と打合せの上、救護検印所を設け、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
- 2 生徒の通過に際しての任務は勤務概況参照。
- 3 主任は、小海の前進停止時刻10時15分を見越し、(伊神)を小海救護検印所に待機させ、小海からの後戻り行係を指示する。
- 4 主任は、前進停止時刻10時50分に、羽黒下からの後戻り行係(注)に前進者数を集計・報告し、後戻りの生徒の進行を指示する。
- 5 小海から(伊神)の到着・集計・報告をもって任務を終了する。
- 6 中止した生徒の列車乗車指導をし、残務整理、救護検印所の撤収をして帰る。
- 7 主任は、生徒・付添教員が全て列車に乗車した後、生徒・付添教員の乗車人数を(びゅうプラザ中込)に連絡する。(0267-62-0203)
- 8 その他
- (1) 八千穂駅長にあいさつし、ストップ使用、駅待合室使用等依頼しておく。
- (2) 当駅最終乗車列車は、12時55分発であるので、それまでに全員乗車をさせる。
- (3) 黒沢商店は、夜間は不在になるので、臨時電話の連絡しておく。

1.2の1 八千穂～羽黒下回指簿

場所：5名 所属＝羽黒下救護検印所
◆重点箇所・四谷差点橋所
◆コース概図：⑨参照

- 1 1日15時00分までに八千穂救護検印所に行き、主任と打合せの上、区間内の連絡標示、拠点指簿箇所を確認を行い、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
- 2 八千穂からの男子先頭到着の報告を待つ、配置につき、任務を開始する。以後、八千穂～羽黒下間の拠点指簿及び返指を繰り返す。
- 3 八千穂からの後戻り行係(田中初)に会いし順に任務を打ち切り、羽黒下救護検印所の応接をし、撤収後帰る。

1.2 羽黒下救護検印所

場所：2名 ○辻 田中宏
P：4名 署：1名 同：1名
◇所在地(宿舎)：羽黒館 (0267-86-2300)
◇救急医：千曲病院 (0267-86-2360)

- 先着予想時刻＝0時20分 (昨年 1時39分)
- 前進停止時刻＝11時00分
- 到着制限時刻＝12時00分
- 1 1日15時00分までに羽黒館に行き、関係者と打合せの上、救護検印所を設け、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
- 2 生徒の通過に際しての任務は勤務概況参照。
- 3 主任は、八千穂の前進停止時刻10時50分を見越し、(石原)を八千穂救護検印所に待機させ八千穂からの後戻り行係を指示する。
- 4 主任は、前進停止時刻11時00分に、田田からの後戻り行係(飯沼)に前進者数を集計報告し、後戻りの生徒の進行を指示する。
- 5 八千穂から(田中初)の到着・集計・報告をもって任務を終了する。
- 6 中止した生徒の列車乗車指導をし、残務整理、救護検印所の撤収をして帰る。
- 7 主任は、生徒・付添教員が全て列車に乗車した後、生徒・付添教員の乗車人数を(びゅうプラザ中込)に連絡する。(0267-62-0203)
- 8 その他
- (1) 当駅最終乗車列車は、12時49分発であるので、それまでに全員乗車をさせる。
- (2) 主任は、羽黒下駅、与志本林業にあいさつしておく。

13の1 羽黒下～白田間指導 P:7名 所属=白田教護検印所

◆重点箇所・下水道工事区画

◆コース略図:④参照

- 1 1日15時00分までに下瀬公会堂に行き、主任と打合せの上、区内の道路標示、拠点指導箇所の確認を行い、当所準備を完了して宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
2 羽黒下からの男子先頭到着の報告を待って、配置につき、任務を開始する。以後、羽黒下～白田間の拠点指導及び遠征を繰り返す。
3 羽黒下からの後戻り行係(飯沼)に会した順に任務を打ち切り、白田教護検印所の応援をし、撤収後帰ります。

13 白田教護検印所

員:3名 〇金子 保彦 飯沼

P:5名 区:1名 署:1名 同:1名

◆所在地(宿舎):下瀬公会堂(0267-82-2140)(車0267-82-0347)

◆休職所:飯沼トミ子氏宅(0267-82-2839)(車0267-82-2064)

◆緊急区:雨宮外科病院(0267-82-5311)

〇先着予想時刻=0時45分(昨年2時04分)

〇到着制限時刻=10時40分

〇前進停止時刻=12時00分

- 1 1日15時00分までに飯沼トミ子氏宅に行き、飯沼氏と打合せの上、教護検印所を設営し、下瀬公会堂で休養、生徒の到着を待つ。
2 主任は、白田警察署にあいさつに行く。
3 生徒の通過に際しての任務は勤務状況参照。
4 主任は、羽黒下の前進停止時刻11時00分を見越し、(飯沼)を羽黒下教護検印所に待機させ、羽黒下からの後戻り行係を指示する。
5 主任は、前進停止時刻10時40分に、中込からの後戻り行係(浅川)に前進者数を集計報告し、後戻りの進行を指示する。
6 羽黒下から(飯沼)の到着・集計・報告をもって任務を終了する。
7 中止した生徒の列車乗車指導をし、須磨整理、教護検印所の撤収をして帰甲する。
8 当駅の最終乗車列車は、12時43分発であるので、それまでに全員乗車をさせる。
9 主任は、生徒・付添教員が全て列車に乗車した後、生徒・付添教員の乗車人数を(びゅうプラザ中込)に連絡する。(0267-62-0203)

- 10 Pの係の宿舎は下瀬公会堂である。器具については、学校から必要数毛布を待参する。
11 主任は、雨宮外科病院にあいさつのおく。

14の1 白田～中込間指導 P:12名 所属=中込教護検印所

◆重点箇所・住吉橋車交差点横断(射手道通り)・中込市内信号横断

◆コース略図:④参照

◆緊急区:国道地下道誘導

◆到着制限時刻=12時00分

◆前進停止時刻=11時00分

- 1 1日15時00分までに中込教護検印所に行き、主任と打合せの上、区内の道路標示、拠点指導箇所の確認を行い、当所準備を完了して宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
2 白田からの男子先頭到着の報告を待って、配置につき、任務を開始する。以後、白田～中込間の拠点指導及び遠征を繰り返す。
3 白田からの後戻り行係(浅川)に会した順に任務を打ち切り、白田教護検印所の応援をし、撤収後帰ります。

14 中込教護検印所

員:2名 〇中込勝 浅川

P:5名 区:1名 同:2名

◆所在地(宿舎):清水屋(0267-63-1133)

◆緊急区:高野病院(0267-62-2022)

〇先着予想時刻=1時30分(昨年2時46分)

〇前進停止時刻=10時30分

〇到着制限時刻=12時00分

- 1 1日15時00分までに中込駅前清水屋に行き、関係者と打合せの上、教護検印所を設営し、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
2 生徒の通過に際しての任務は勤務状況参照。
3 主任は、白田の前進停止時刻10時40分を見越し、(浅川)を白田教護検印所に待機させ、白田からの後戻り行係を指示する。
4 主任は、前進停止時刻10時30分に、岩村田からの後戻り行係(中島雄)に前進者数を集計報告し、後戻りの進行を指示する。
5 白田から(浅川)の到着・集計・報告をもって任務を終了する。
6 中止した生徒の列車乗車指導をし、須磨整理、教護検印所の撤収をして帰甲する。
7 当駅の最終乗車列車は、12時33分発であるので、それまでに全員乗車をさせる。
8 主任は、生徒・付添教員が全て列車に乗車した後、生徒・付添教員の乗車人数を(びゅうプラザ中込)に連絡する。(0267-62-0203)

15の1 中込～岩村田間指導 P:13名 所属=岩村田教護検印所

◆重点箇所・中込町西交差点地下道誘導

◆コース略図:④参照

◆緊急区:相生町西交差点折戻り

◆到着制限時刻=12時00分

◆前進停止時刻=11時00分

- 1 1日15時00分までに岩村田教護検印所に行き、主任と打合せの上、区内の道路標示、拠点指導箇所の確認を行い、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
2 中込からの男子先頭到着の報告を待って、配置につき、任務を開始する。以後、中込～岩村田間の拠点指導及び遠征を繰り返す。
3 中込からの後戻り行係(中島雄)に会した順に任務を打ち切り、岩村田教護検印所の応援をし、撤収後帰ります。

15 岩村田教護検印所

員:2名 〇梅森 中島雄

P:8名 区:1名 署:1名 同:1名

◆所在地(宿舎):佐久グリーンホテル東館(0267-68-0235)(車0267-67-4236)

◆緊急区:浅野病院(0267-67-2295)

〇先着予想時刻=2時30分(昨年3時46分)

〇前進停止時刻=11時00分

〇到着制限時刻=12時00分

- 1 1日15時00分までに佐久グリーンホテル東館に行き、関係者と打合せの上、教護検印所を設営し、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
2 生徒の通過に際しての任務は勤務状況参照。
3 主任は、中込の前進停止時刻10時30分を見越し、(中島雄)を中込教護検印所に待機させ、中込からの後戻り行係を指示する。

- 後尾迫行を指示する。
 4 主任は、前送停止時刻11時00分に、三岡からの後尾迫行係(加藤)に前送者数を集計報告し、後尾の生徒の退行を指示する。
 5 中込から(中島健)の到着・集計・報告をもって任務を終了する。
 6 中止した生徒の列車乗車指導をし、残務整理、撤収をして帰甲する。
 7 当校印担当区間は左側箇所が多いため安全押時の確保を図るように配慮する。
 8 主任は、生徒・付添教員が全て列車に乗車した後、生徒・付添教員の乗車人数を(びゅうプラザ)中込に連絡する。(0267-62-0203)
 9 当家の最終乗車列車は、12時22分発であるので、それまでに全員乗車をさせる。

16 1 岩村田～三岡間指導 P: 6名 所属=三岡教護検印所

- ◆重点箇所・三岡駅信号機指示係(右一左)
 ◆緊急係: ①参照
 1 1日16時00分までに柏木氏宅に行き、主任と打合せの上、区間内の道路標示、拠点指導箇所の確認を行う。宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
 2 岩村田からの男子先頭到着の報告を待つ。配置につき任務を開始する。以後、岩村田～三岡間の拠点指導及び退行を繰り返す。
 3 岩村田からの後尾迫行係(加藤)に念した際に任務を打切り、三岡教護検印所の松渡をし、撤収後帰甲する。

16 三岡教護検印所 職: 2名 〇大西 加藤
 P: 4名 碧: 1名

- ◆所在地(宿舎): 柏木宇三郎氏宅(0267-22-2208)(専0267-22-2998)
 ◆緊急係: 須岡病院 (0267-67-2295)
 ○先着予定時刻=3時00分(昨年4時13分)
 ○前送停止時刻=11時00分
 ○到着準備時刻=12時00分
 1 3日16時00分までに柏木氏宅に行き、柏木氏と打合せの上、教護検印所を設営し、柏木氏宅で休養、生徒の到着を待つ。
 2 生徒の通過に際しての任務は勤務状況参照。
 3 主任は、岩村田の前送停止時刻11時00分を見越し、(加藤)を岩村田教護検印所に待機させ、岩村田からの後尾迫行を指示する。
 4 主任は、前送停止時刻11時00分に、小楢からの後尾迫行係(佐藤)に前送者数を集計報告し、後尾の生徒の退行を指示する。
 5 岩村田から(加藤)の到着・集計・報告をもって任務を終了する。
 6 中止した生徒の列車乗車指導をし、残務整理、撤収をして帰甲する。
 7 当家の最終乗車列車は、13時29発であるが、12時14発までの列車にできるだけ全員乗車をさせる。
 8 主任は、生徒・付添教員が全て列車に乗車した後、生徒・付添教員の乗車人数を(びゅうプラザ)中込に連絡する。(0267-62-0203)

17 1 三岡～小楢間指導 P: 10名 所属=小楢教護検印所

- ◆重点箇所・四谷交差点横断左折
 ・唐松(ツルヤ前)交差点右折
 ・荒町交差点左折横断
 ・市民会館入口右折
 ◆コース案内: ①参照
 1 1日16時00分までに小楢市民会館に行き、主任と打合せの上、区間内の道路標示、拠点指導箇所の確認

- を行い、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
 2 三岡からの男子先頭到着の報告を待つ。配置につき、任務を開始する。以後、三岡～小楢間の拠点指導及び退行を繰り返す。
 3 三岡からの後尾迫行係(佐藤)に念した際に任務を打切り、小楢教護検印所の松渡をし、撤収後帰甲する。

17 小楢教護検印所

- ◆所在地: 小楢市民会館(0267-22-1700)(専0267-24-0416)
 P: 11名 区: 1名 碧: 5名 同3名
 ◆宿舎: ホテル小楢(0267-22-0950)
 ◆緊急係: 小楢厚生総合病院(0267-22-1070)
 ○先着予定時刻=3時00分(昨年4時52分)
 ○到着準備時刻=12時00分
 1 1日16時00分までにホテル小楢に行き、小楢市民会館と打合せの上、教護検印所を設営し、市長、小楢駅長、小楢警察署にも連絡をとり、宿舎で休養、生徒の到着を待つ。
 2 生徒の通過に際しての任務は勤務状況参照。
 3 主任は、三岡の前送停止時刻11時00分を見越し、(佐藤)を三岡教護検印所に待機させ、三岡からの後尾迫行を指示する。
 4 三岡から(佐藤)の到着・集計・報告をもって任務を終了する。
 5 到着した生徒の休養、列車乗車指導をし、残務整理、撤収をして帰甲する。
 6 主任は、生徒・付添教員が全て列車に乗車した後、生徒・付添教員の乗車人数を(びゅうプラザ)中込に連絡する。(0267-62-0203)
 7 到着者の一覧表を作成する。
 8 その他

- (1) 当家の最終乗車列車は13時21分発であるが、できるだけ12時06分発の列車に乗車指導する。
 (2) 着1名は、小楢発6時40分の団体乗車責任者となる。
 (3) 着1名、同登1名は、小楢発8時40分の団体乗車責任者となる。
 (4) 着1名、同登1名・P1名は、小楢発10時29分の団体乗車責任者となる。
 (5) (日高)・着1名・P1名は、小楢発12時06分の団体乗車責任者となる。
 (6) (三森)・着1名・P1名は、小楢発13時21分の団体乗車責任者となる。

E 小瀬駅勤務

期：4名 ○春日-山名(1) 今村-中込-武井(2+C)

◇所在地：小瀬駅(0551-36-2045)

◇宿舎：高瀬校舎(0551-36-2066)

◆救急医：武重院(0287-22-0171)

1 翌朝、1日当番勤務終了後、小瀬駅に行き、駅と打合せの後、宿舎で休養する。

2 翌朝、6時30分小瀬駅勤務につく。

3 Pの係は、2日甲府駅6時09分発一小瀬駅6時46分着の列車で小瀬駅に行き勤務につく。

4 (今村・中込・武井)は、女子出発後、小瀬駅に行き勤務につく。

5 生徒の当番簿に欠立して、当番と打合せの上、ホームの適当な場所位置し勤務する。

6 勤務にあたっては、小瀬駅到着時刻、中央線上下の発車時刻を把握し、生徒の乗降の態、中央線ホームへの移動指導、乗車指導、乗車人員及び異常の有無を調査する。

7 小瀬駅16時10分、当番17時20分着の列車の最終生徒を、17時33分発の中央線へ乗車させ、係員も乗車して帰る。

8 主任は終了の旨を甲府駅主任に連絡する。

9 その他

(1) 小瀬駅到着時刻と中央線乗換列車発車時刻

小瀬駅到着時刻 中央線発車時刻 中央線到着時刻

6時34分→ 6時56分 14時22分→ 14時30分

9時06分→ 10時07分 15時26分→ 15時42分

10時51分→ 11時08分 16時21分→ 16時28分

12時39分→ 13時20分 17時20分→ 17時33分

(2) 中央線特急列車には乗車できない。

(3) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(4) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(5) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(6) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(7) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(8) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(9) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(10) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(11) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(12) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(13) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(14) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(15) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(16) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(17) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(18) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(19) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(20) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(21) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(22) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(23) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(24) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(25) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(26) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(27) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(28) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(29) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(30) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(31) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(32) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(33) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(34) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(35) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(36) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(37) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(38) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(39) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

(40) 乗客は高瀬校舎で休養させ、中山医院(0551-36-2078)、家庭、又は学校に連絡し、必要な処置を講ずる。

G 学校勤務

期：3名 ○村上(A+B) 兼役(A+B+C+D+E+H) 安達

1 日直者は、(村上・安達)とし、宿直は、(村上・兼役)がある。

2 (村上)は、1日男子出発主任となり、出発係と協力し、男子出発までの任務にあたる。

3 男子出発後、最終参加人数を集計・確認し、男子後援会行帳と本部に連絡する。

4 不参加者名簿を作成する。

5 (村上)は、男子出発・見送り後、女子を集合させ、最終検査を行なう。

6 宿直者は、2日 4時30分には女子生徒のために学校を開放し、5時00分には女子集合係と共に集合、乗車指導、点呼を行ない、5時30分にはバスを出発させる。(集合出発に関する事項参照)

7 (村上)は、同僚協力者の乗車を準備しておき渡す。

8 (安達)は、2日 3日学校勤務につく。

9 (村上)は、2日 8時40分より不参加者の出席調査を行い、多目的ホールで正午まで自習させる。

10 不参加者の検印カードの不参加者自習出欠欄に出席確認後捺印して、翌日に所定の場所に提出する。

H 運搬係

期：9人

同：6人

A班(野辺山班)＝赤池-長坂-矢嶋-神澤-田代(6)・(丸山-岡部(6))

同3名 ()

B班(小瀬班)＝○小塚・佐藤

同3名 ()

1 9月30日、運搬係主任(小塚)は、物品係主任(兼役)・各教員検印所主任立会のもと、輸送物品を引受け、5時00分には積込みを完了する。(物品一覧表を参照)

2 運搬車A(長坂班)は、1～7の関係物品を運搬する。

3 運搬車B(小塚班)は、8～17までの関係物品を運搬する。

4 運搬車C(岡部班)は、主に野辺山の物品を運搬する。

5 1日 8時00分集合し、運搬物品の確認、9時00分には担当地に出発する。

6 (神澤・佐藤)は、関係関係力者を輸送する。

7 運搬車の本数は、A・Cは野辺山、Bは小瀬とする。

8 2日、所属地帰校後、担当地の物品の回収をしながら帰甲する。

F 甲府駅勤務

期：5名 ○石原(2) 田中(A) 庄司(1+B+C) 若尾(1+B) ハーガー(1+B)

◇所在地：甲府駅(0552-54-7680)

◇体調所：スナックマロン(0552-51-5991)

1 (田中・若尾・ハーガー)・Pの係は、7時00分に甲府駅に行き、改札係と打ち合わせを行い、7時35分着の列車で到着する生徒の指導を行なう。

2 (石原・庄司)は、女子出発係の勤務終了後、8時00分より甲府駅勤務につく。

3 女子出発係の同4名は勤務終了後、生徒を輸送したバスに乗り、甲府駅勤務につく。

4 主任は、甲府駅改札口前に、家長と打ち合わせの上、教調所を報告する。

5 勤務は、スナック・マロンで休養しながら、上り列車到着時刻には当駅で下車指導と補助を行なう。

6 要緊時があれば、家庭、学校、必要に応じて医師に連絡を取りながら、適切な処置を講ずる。

7 本部または学校、その他からの連絡に対応しながら勤務し、甲府駅18時20分着の最終列車到着後学校に連絡をし、勤務を打ち切り帰る。

8 その他

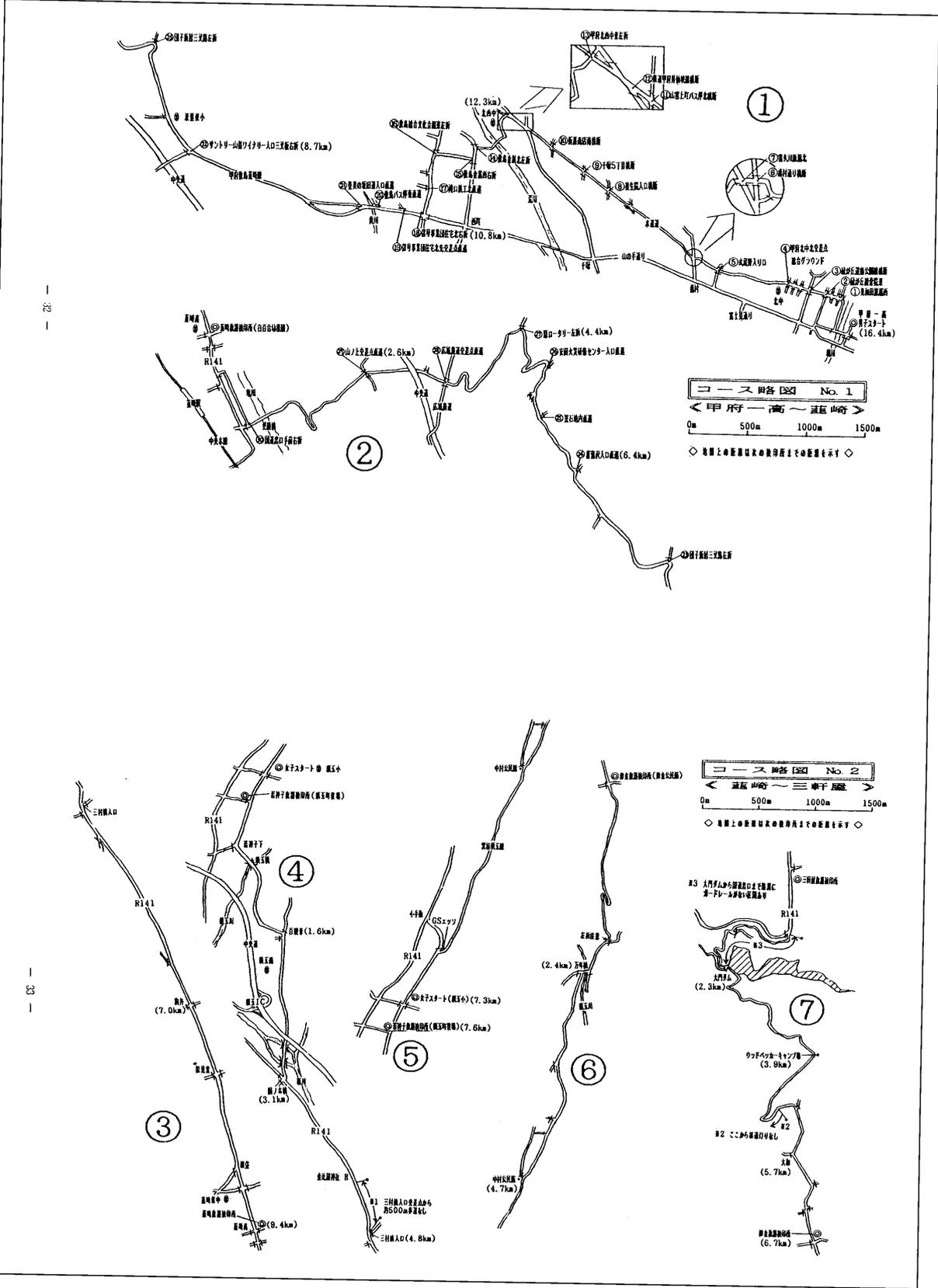
(1) 生徒乗車の甲府駅到着時刻(上り普通列車)

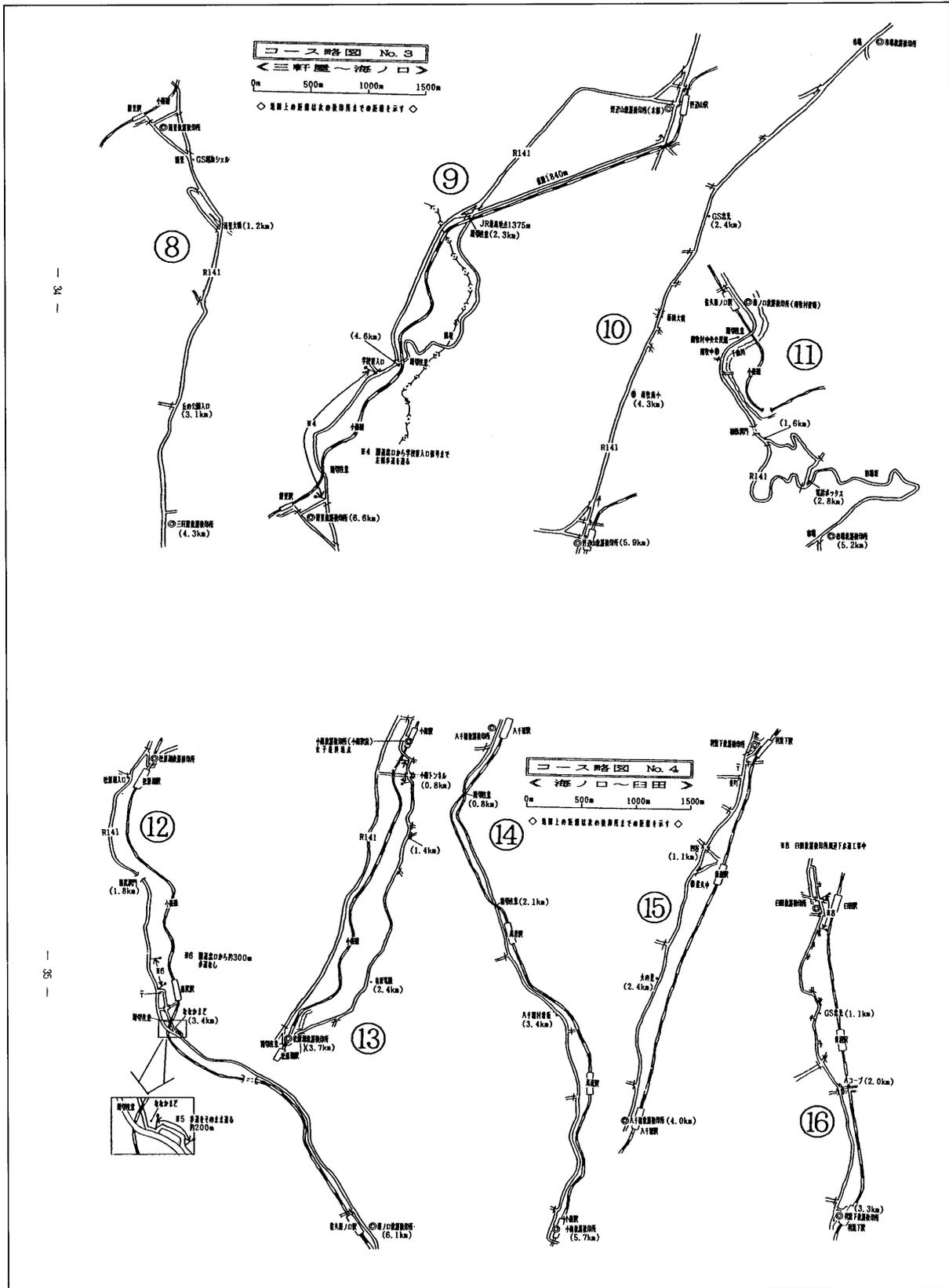
7時35分 10時44分 11時47分 15時18分 16時19分 17時49分 18時20分

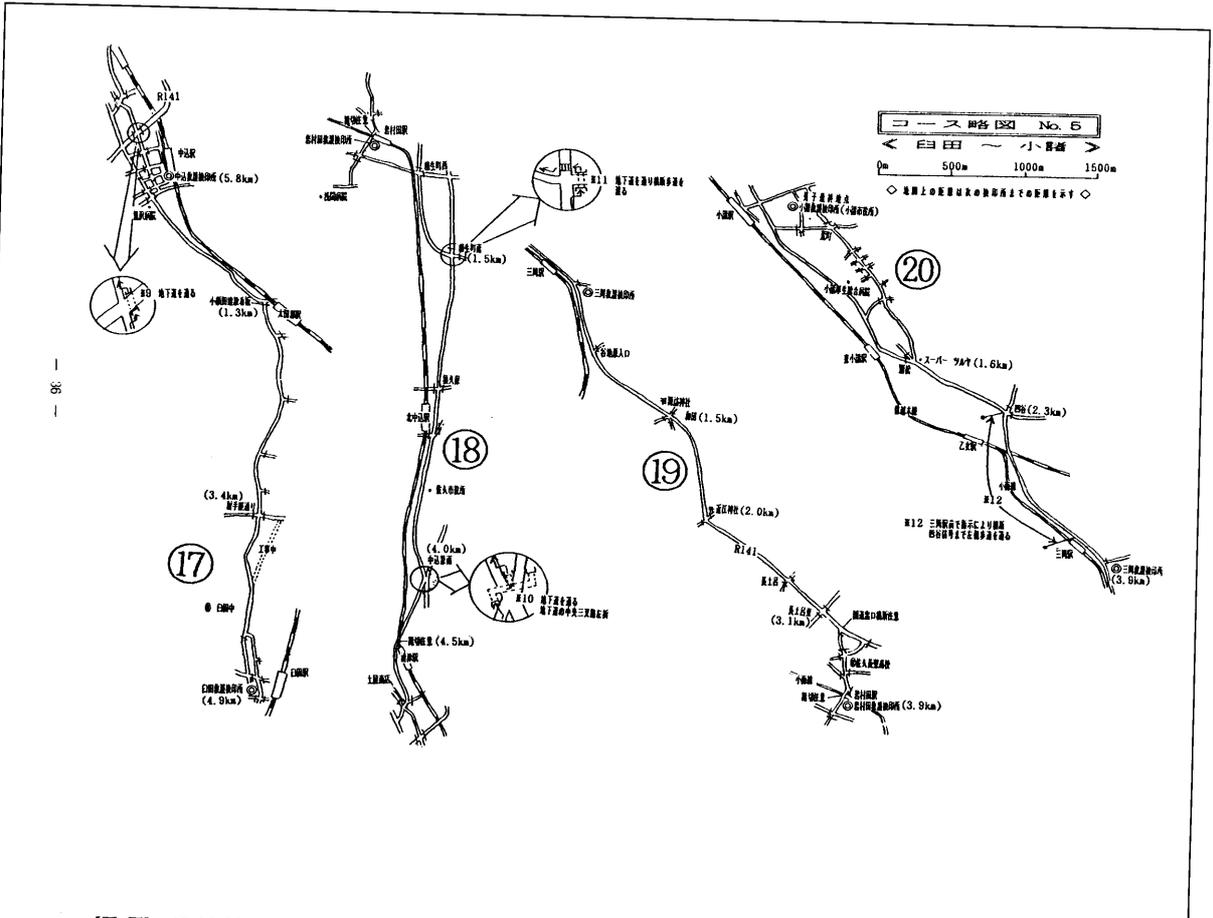
(2) 最終列車に乗車できなかった要緊時者がいる場合は、当所係が1名残り、該当者の到着に際し付き添い係員に協力し、状況に応じ適切に対処する。

(3) 保護者名簿を用意しておく。

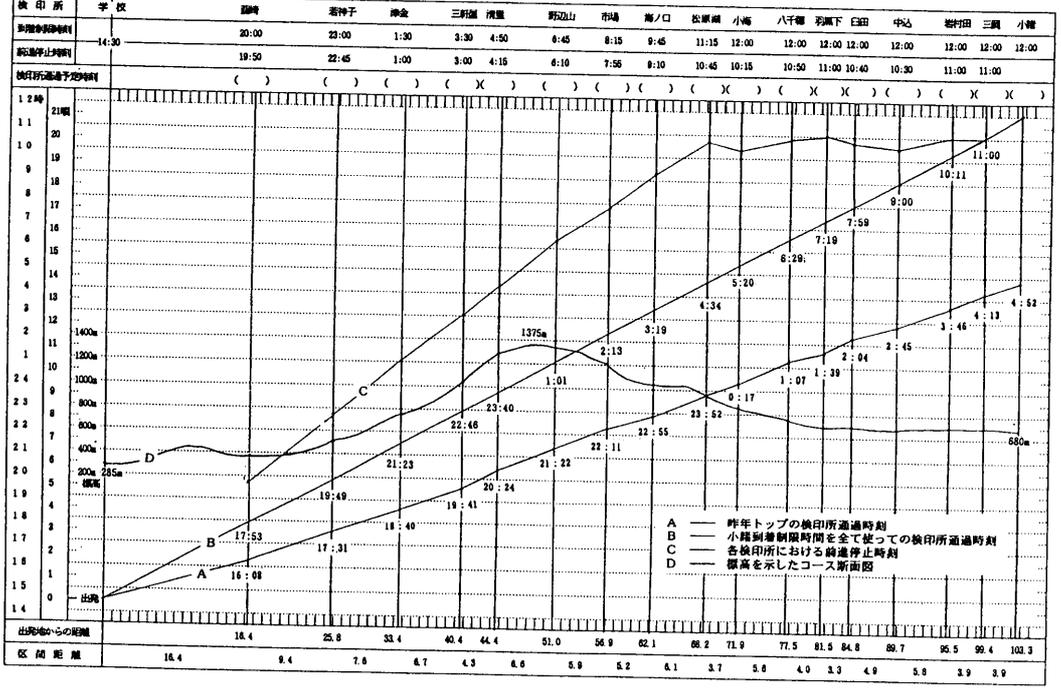
(4) 救急のため調車を必ず付けホームへの入場し調査をいたすため甲府駅改札係に連絡しておく。





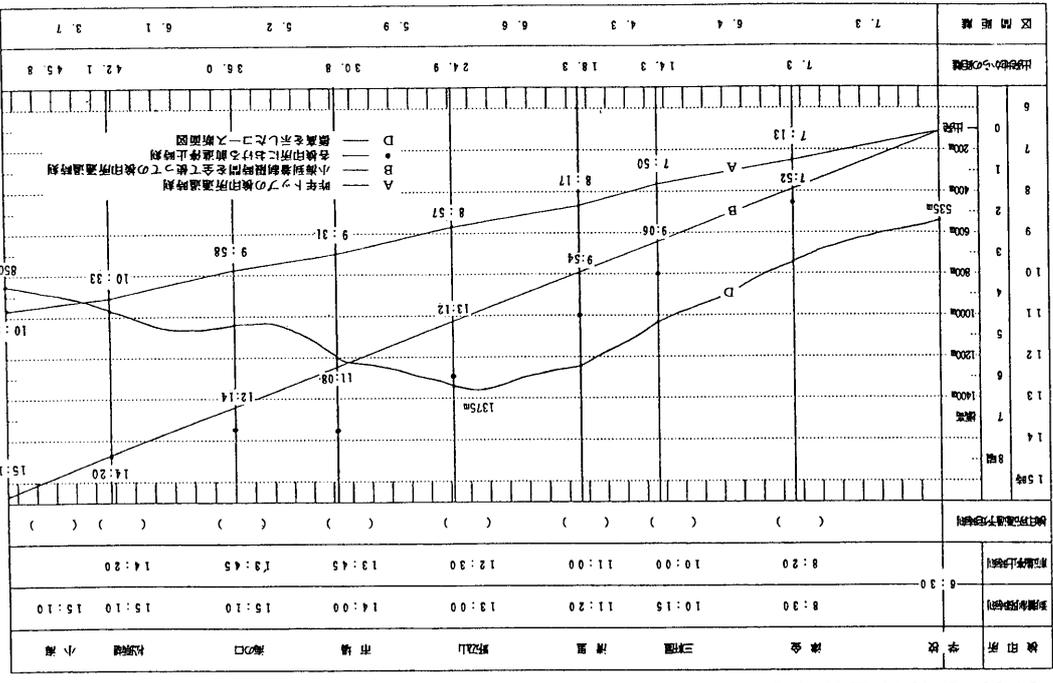


【男子】歩行計画国立案参考図



J R 団体乗車について

- 1 小諸（男子）・小海（女子）到着及び途中降車した生徒は、最寄りのJR小海線の駅より列車に乗車し、帰甲する。
- 2 列車への乗車は、学生団体特別乗車券「(英)乗車票」によって乗車する。
- 3 「(英)乗車票」は、(びゅうプラザ中込)より発売される。
- 4 各校印所主任は、予想乗車数の「(英)乗車票」を(吉成)より受取り、管理する。
- 5 各校印所主任は、乗車人数を確定に把握し、該当者全員が乗車した後、(びゅうプラザ中込) [0267-62-0203] に総乗車人数(生徒・付添者別)を連絡する。なお、びゅうプラザ中込への連絡は17時以前とする。
- 6 余った「(英)乗車票」は、全て(びゅうプラザ中込)に返却する。
- 7 「(英)乗車票」の終着駅は甲府であるが、甲府駅以遠のJR利用については甲府駅で一旦下車するか、予め乗車券を購入してから乗車する。(定期券所持者は可)
- 8 運賃の精算は、(びゅうプラザ中込)が窓口になり、一括して徴収する。
- 9 学生団体扱いを実施するため最遠駅を6駅(小諸・岩村田・八千穂・松原湖・野辺山・清里)にして特別乗車券を実施する。
- 10 「(英)乗車票」は、下車の際に駅の改札係員にわたす。
- 11 JR職員から「(英)乗車票」の提示要求があった場合はいつでも提示する。
- 12 学生団体特別乗車券をするすべての列車には、一般遠回り駅から必ず職員が1人以上乗車し、外連絡、生徒の指導にあたる。
- 13 「(英)乗車票」所持しない場合には普通旅客扱いになるので、必ず「(英)乗車票」を発行してもらい乗車し、紛失しないよう十分注意する。
- 14 臨時列車(9242 D)は、小海駅～小淵沢駅間の全ての駅に停車する。
- 15 団体乗車の運賃は、生徒5割、付添父兄・看護婦・教師は3割引きとする。
- 16 団体指定列車の座席は244Dとする。
- 17 その他
 - (1) 駅のホーム、車内では、他の乗客に迷惑のからないように行動する。
 - (2) 2両編成の列車(ワンマン車)への乗車は、1両目の後の入口から行い、下車は1両目の前の出口から行う。(乗車の際、整理券を取る必要はない)
 - (3) JR団体乗車に關わるトラブルが生じた場合は、本部に連絡し、本部から中込駅乗務課長(02667-63-5061)に連絡し対応する。



女子十団文乗務員区

JR 列車ダイヤ (70回強行遠足)

列車番号	222D 2両	226D 3両	230D 2両	234D 2両	238D 3両	240D 2両	9242D ^{3両}	244D 2両	列車番号
駅名	時刻	時刻	駅名						
小 諸		6:40	8:40	10:29	12:06	13:21			小 諸
三 岡		6:49	8:47	10:37	12:14	13:29			三 岡
岩 村 田		7:00	8:55	10:45	12:22	13:37			岩 村 田
中 込		7:21	9:12	10:57	12:33	13:48			中 込
白 田		7:33	9:20	11:05	12:43	13:56			白 田
羽 黒 下		7:39	9:28	11:13	12:49	14:02			羽 黒 下
八 千 穂		7:47	9:34	11:19	12:55	14:08	臨時増発 (9242D)		八 千 穂
小 海	5:26	7:58	9:45	11:30	13:14	14:19	15:13	16:10	小 海
松 原 湖	5:31	8:03	9:50	11:35	13:19	14:24	15:18	16:15	松 原 湖
佐久海ノ口	5:40	8:12	9:59	11:44	13:28	14:33	15:27	16:27	佐久海ノ口
野 辺 山	6:02	8:36	10:21	12:07	13:53	14:56	15:49	16:49	野 辺 山
清 里	6:10	8:44	10:29	12:15	14:00	15:04	15:59	16:56	清 里
小 淵 沢	6:34	9:06	10:51	12:39	14:22	15:26	16:21	17:20	小 淵 沢

乗継ぎ列車

列車番号	424M 高尾	434M 甲府	436M 甲府	440M 甲府	556M 立川	442M 高尾	340M 塩山	566M 高尾	列車番号
乗換え時間	22分	71分	17分	43分	8分	12分	7分	13分	乗換え時間
小淵沢発	6:56	10:07	11:08	13:20	*14:30	15:42	*16:28	*17:33	小淵沢発
甲府着	7:35	10:44	11:47	13:59	15:18	16:19	17:14	18:20	甲府着

上記以外の列車には乗車させない。
備考 小海線 238D (強行遠足のため1両増)・240D (強行遠足のため1両増)・244D (強行遠足のため1両増)・9242D (強行遠足のため臨時増発3両) * 始発列車

平成7年度 69回の救護検印所の実態

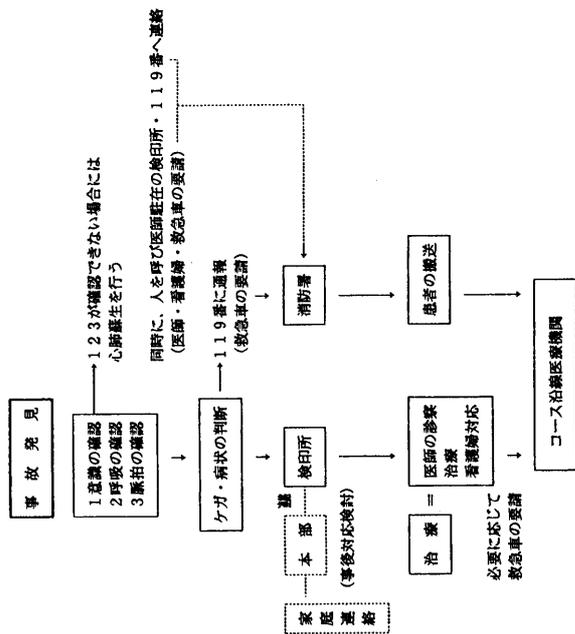
	① 韭崎	② 若神子	③ 津金	④ 三軒屋	⑤ 清里	⑥ 野辺山	⑦ 市場	⑧ 海ノ口	⑨ 松原湖	⑩ 小海	⑪ 八千穂	⑫ 羽黒下	⑬ 白田	⑭ 中込	⑮ 岩村田	⑯ 三岡	⑰ 小諸
前進停止時刻	男 19:45	22:45	1:00	3:00	4:15	6:10	7:55	9:10	10:45	10:15	10:50	11:00	10:40	10:30	11:00	11:00	—
	女 —	—	8:20	10:00	11:00	12:30	13:45	13:45	14:20	—	—	—	—	—	—	—	—
到着制限時刻	男 20:00	23:00	1:30	3:30	4:50	6:45	8:15	9:45	11:15	12:00	12:00	12:00	12:00	12:00	12:00	12:00	12:00
	女 —	—	8:30	10:15	11:20	13:00	14:00	15:10	15:10	—	—	—	—	—	—	—	—
勤務者の現地到着時刻	13:30	14:00	14:20	13:30	14:30	11:50	14:30	13:40	15:00	15:00	15:00	15:00	15:00	15:30	15:30	16:20	15:30
準備開始時刻	13:30	14:10	14:20	13:30	15:00	13:40	14:30	14:00	15:10	15:10	15:15	15:00	15:30	16:00	15:30	16:30	16:50
先頭到着時刻	男 16:08	17:31	18:40	19:41	20:24	21:22	22:11	22:55	23:52	0:17	1:07	1:39	2:04	2:45	3:46	4:13	4:52
	女 —	—	7:13	7:50	8:17	8:57	9:31	9:58	10:33	10:50	—	—	—	—	—	—	—
集中時刻	男 17:10	18:45	20:45	21:30	22:50	0:15	1:30	2:30	4:30	5:10	6:00	6:40	7:15	8:15	9:15	10:30	11:30
	女 —	—	7:45	8:40	9:40	10:50	12:10	13:05	14:00	14:50	—	—	—	—	—	—	—
最終到着時刻	男 17:58	21:30	23:12	2:40	4:00	6:13	7:25	8:45	10:43	11:50	10:40	11:31	11:33	:	11:50	:	11:59
	女 —	—	8:10	9:50	10:54	12:49	13:55	15:05	15:30	15:10	—	—	—	—	—	—	—
現地引き上げ時刻	18:40	22:30	12:30	11:45	13:30	15:30	15:30	16:00	16:30	17:00	13:30	13:30	14:30	13:15	13:30	14:00	15:00

※ 出発者数 [男子: 459人・女子: 474人]

前進中止者数 (途中落伍含む)	男 1	5	9	5	34	55	7	1	12	41	36	5	56	33	7	1	—
	女 —	—	1	4	8	12	14	60	38	—	—	—	—	—	—	—	—
前進者数	男 458	452	443	438	404	349	342	341	329	288	252	247	191	158	151	150	150
	女 —	—	473	469	461	449	435	375	337	337到達	—	—	—	—	—	—	到達

ケガ・急病等緊急事態発生時の対応

強行遠足実施中に発生した緊急事態（交通事故・急病等）に対して、次に示すとおり冷静かつ速やかに対応する。



- * 人命救助が第一であるが、交通事故・崖崩れ等の場合には、警察・行政等関係機関への連絡も必要である。
- * 救助・救急車の要請は、**同番なしの119番**（公衆・私用・携帯電話でも同じ）
- * 119番の通報で地域消防本部が対応、その後、本部から事故発生地の最寄りの消防署に可合が出力され、救急車の出動となる。事故発生時の場所を正確に伝える必要がある。
- * 携帯電話の場合は、甲府消防本部・長野市消防局につながり、所轄本部に転送される。

緊急時の連絡先一覧

検印所名等	電話番号	医看種	沿道医療機関	電話番号	住所
学校・韭崎	0552-53-3525	—	大久保医院	0551-77-2129	群馬県213-3
韭崎	0551-22-2908	看	葉袋整形外科	0551-22-0203	群馬県13-2
若神子	0551-42-2931	医看	堀川病院	0551-42-2221	群馬県73
津金	0551-46-2874	医看			
三軒平屋	0551-48-2592	看			
清里	0551-48-2362	医看			
野辺山	0267-98-2955	医看2	小滝赤十字病院	0267-92-2077	小滝町西蔵0
市場	0267-98-2452	看			
海の口	0267-96-2803	医看	南牧村診療所	0267-96-2112	南牧町0966-3
松原湖	0267-92-2235	医看	小滝赤十字病院	0267-92-2077	小滝町西蔵0
小海	0267-92-3713	医看2			
八千穂	0267-88-2470	看			
羽黒下	0267-86-2300	看	千曲病院	0267-86-2360	群馬県328
白田	0267-82-0347	医看	雨宮外科病院	0267-82-5311	白田町73
中込	0267-63-1133	看	黒沢病院	0267-64-1711	群馬県15-6
岩村田	0267-67-4236	医看	浅間病院	0267-67-2295	群馬県1862-1
三岡	0267-22-2998	看	小諸	0267-22-0171	小諸町2-31
小倉	0267-24-0416	医看5	厚生総合病院		
小淵沢	0551-36-2045	看	中山医院	0551-36-2078	小淵沢町407

* 列車内での急病等の発生については各列車に添乗している看護婦が対応する（1両目に添乗）

小諸警察署	0267-22-0110
佐久	68-0110
白田	82-0110
韭崎	0551-22-0110
甲府	0552-32-0110

医療関係協力者一覧表

施設場所名	医 師		資 質 婦		生後通達予想時間 (休・連・欠席)	備 考
	氏 名	電 話	氏 名	電 話		
0 番	大久保昭人	0552-77-2129	—	—	1H14:30~16:00	欠席中
1 基 崎			P赤木 民子	0552-26-5616	1H16:00~1H20:00	
2 若神子	*三沢 明彦	0551-42-2221 *			1H17:00~1H23:00	
3 津 金	山下 晴夫	0552-51-6332	P乙黒美恵子	0552-77-7163	1H18:00~2H 1:30 2H 7:00~2H 8:30	1H18:00
4 三軒屋			P土橋紀久子	0552-77-7165	1H19:00~2H 3:30 2H 8:00~2H10:30	
5 清 里	*吉田 和徳	0551-42-2221	P依田 良子	0552-51-4069	1H19:30~2H 5:00 2H 8:30~2H11:30	
6 野辺山	*青山 進	0552-33-5107	P山口しほ子 P渡辺 早苗	0552-51-5570 0552-53-1319	1H20:30~2H 7:00 2H 9:00~2H13:30	
7 市 場					1H21:00~2H 8:30 2H10:00~2H14:30	
8 海ノ口	*小沢 仁	0552-52-2790	P坂本 祥子	0552-35-5532	1H21:30~2H10:00 2H10:30~2H15:30	
9 必原湖	*藤松 典	0552-52-4794	P伊藤佐知子	0552-52-2095	1H22:30~2H11:30 2H11:00~2H15:30	
10 小 湊	*山西 政昭	0552-52-3305	P樋口 蘭 P若目智士子 P土屋美穂菜	0552-53-8930 0552-52-2132	1H23:00~2H12:30 2H11:30~2H15:30	
11 八千穂					1H23:30~2H12:30	
12 羽黒下					2H 0:00~2H12:30	
13 日 田	P内山 敬介	0552-52-5149 *			2H 0:30~2H12:30	
14 中 込			P大田つね子	0552-22-5618	2H 1:30~2H12:30	
15 岩村田	P大畑 和義	0552-54-3513	P野口美穂子	0552-22-5892	2H 2:30~2H12:30	
16 三 岡			P佐野 智子	0552-53-1389	2H 3:00~2H12:30	
17 小 瀬	P大森 淳二	0552-53-1556 *			2H 3:30~2H12:30	
D 小瀬沢			P小林かず子	0552-53-8219	2H 6:40~2H18:00	

P: PTA協力者 * : 外部依頼協力者

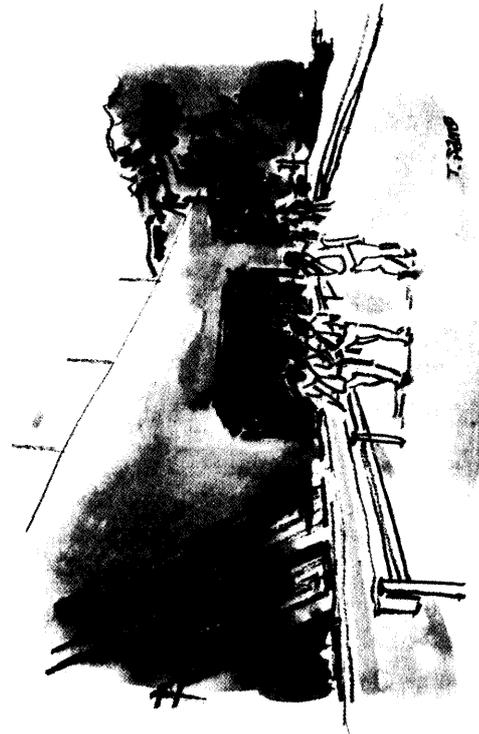
保護者の協力者氏名一覧は
個人情報保護のため割愛し
ました。



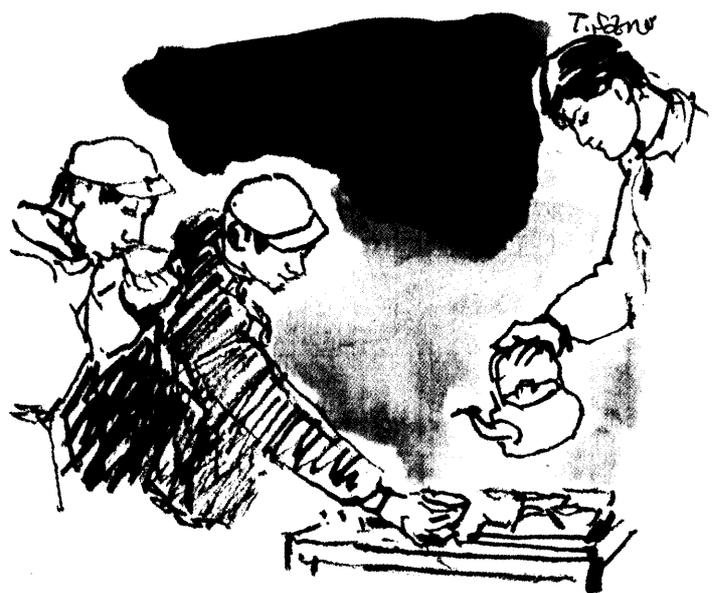
佐野智子・画

	名称(代表氏名)	住所	電話番号	専用電話
⑭ 松原湖	換印所 宿舎 小池氏宅 (小池寛太郎)	南佐久郡小海町 豊里八馬池	(0267) 92-2235	(0267) 92-2235
⑮ 小海	換印所 宿舎 小海駅前 小海橋 (木次 毅)	南佐久郡小海町 小海土村4281 小海4284	JA 92-2521 駅 92-2033 (0267) 92-2101	(0267) 92-3713 /
⑯ 八千穂	換印所 宿舎 黒沢商店 (黒沢 健) 末広路 (小山 勝三)	南佐久郡八千穂村 徳頼1430 小海4284	(0267) 88-2034 (0267) 92-2139	(0267) 88-2470 /
⑰ 羽黒下	換印所 宿舎 羽黒館 (三石 宗雄)	南佐久郡佐久町 平林114-5	(0267) 86-2300	(0267) 86-2300
⑱ 白田	換印所 休養所 下越公会堂 (柳沢 良浩) 佐田氏宅 (佐田トミ子)	南佐久郡白田町 下越175-2 南佐久郡白田町 三区田174	(0267) 82-2140 ☎ 82-2839 ☎ 82-2064	(0267) 82-0347 /
⑲ 中込	換印所 宿舎 清水屋 (清水祥太郎)	佐久市中込339-3	(0267) 63-1133	(0267) 63-1133
⑳ 岩村田	換印所 宿舎 林ノリノ木子屋 (土屋 義勝)	佐久市岩村田 西本1150	(0267) 68-0235	(0267) 67-4236
㉑ 三岡	換印所 宿舎 柏木氏宅 (柏木宇三郎)	小諸市御影新田2007	(0267) 22-2208	(0267) 22-2998
㉒ 小諸	換印所 宿舎 小諸市民会館 (鎌山 正之) ホノル小諸 (黒沢 伝樹)	小諸市相生3-3-3 小諸市本町1-2-3	(0267) 22-1700 (0267) 22-0950	(0267) 24-0416 /
E 小淵沢	駅 宿舎 小淵沢駅 高原旅館 (由井 秀明)	北巨摩郡 小淵沢町1024 北巨摩郡 小淵沢町1022	(0551) 36-2045 (0551) 36-2066	/
F 甲府駅	駅 休養所 甲府駅 (黒川 英明) スナックマロン (石川 治)	甲府市丸の内1-1-8 甲府市北口2-4-1	(0552) 54-7680 (0552) 51-5991	/

【備考】 公：公共電話
【注意】 (小諸・三岡) ⇄ (野辺山～岩村田) は市外局番から回す



佐野智子・画



佐野智子・画

資料

『本校に於ける強行遠足の意義と其の実際』
昭和12年（1937）12月20日《翻刻》

根津修蔵『甲府一高強行遠足の概要』
昭和47年（1972）9月《翻刻》



佐野智子・画

資料翻刻

本校に於ける強行遠足の意義と其の實際（抜粋）

「山梨県立甲府中學校」昭和12年12月20日発行

注：原文を写真製版しているため旧漢字及び旧かなづかいである。

昭和初年、強行遠足はすでに組織的な計画のもとに実施され、綿密な統計がまとめられるようになり、問い合わせも増えてきた。昭和10年(1935)、東京で世界教育大会が開催されることとなり、隈部以忠校長の発案で、強行遠足の沿革と統計とを英文で印刷、配布しようとしてまとめられたのが、この『本校に於ける強行遠足の意義と其の實際』である。が、英訳、刊行に至らず、職員室の戸棚にしまわれたままになっていた。12年(1937)、大野芳麿校長の手により出版、公表されて以来、日本一の行事として一躍有名になり、全国から教育関係者ばかりでなく、医学・体育学の分野の専門家の視察・研究が増えた。強行遠足草創期の理念を知ることのできる貴重な資料であり、73年を経て今なお続いている強行遠足の原点であると考へ、ここに翻刻した。

本校に於ける**強行遠足の意義と其の實際**

第一 強行遠足の意義

一、起 源

明治大帝の御徳を追慕し奉り、大正十三年明治節を中心として、全國體育週間の設定を見た時、本校では十一月四日を以て體育日と定め、全校職員生徒一同、一齊に強行遠足を行ふ事になった。

敢て強行遠足と名づけたのは、自分の體力に應じて歩けるだけ歩くといふ事を強調せんが爲である。

由來人情の弱點は安易なものとの妥協である。歩く場合でも少しく疲勞を感じると乗物の事を考へる。或はある程度で止めてしまふといふ事になり勝である。之等一切の妥協と怠慢とを排して、楛根限り歩くといふ事を重視したのである。今一つは今迄何處の學校でも、遠足の翌日は休日にするといふ事が不文律的習慣になつてゐたが、この習慣を打破して、平常通り午前九時始業で、授業を行つて行くといふ事を建前にした。

かうした所謂眞剣勝負に因つて、剛毅不屈の精神を養ひたいと思つたのである。

次に特に遠足を選んだのは、次の諸點から考察して、最もこの記念すべき運動日の運動として、適切であると思つたからである。

一、歩くといふ事は最も原始的、普遍的、個性的の運動である

歩く事には特別の技術も練習も要具をも要しない。老弱男女誰にでも出来る事である。

現今の各種競技會、試合、又は運動會等の催を見るに、その多くは一部選ばれたる所謂選手の活躍に止まつて、一般大衆の運動ではない。従つて全校一齊的の運動としては、この歩く事以外に適切なものはないと思ふ。

二、「歩く」ことの重要性

交通機關の發達は漸次歩くといふ事を輕視して來る。殊に本校のやうに盆地の中央部にあつて、汽車、電車、自動車、自轉車等あらゆる交通機關が通學に利用せられる學校では、ともしば歩く事が億劫がられ等閑視される。

その結果は脚力の減退となり、延いては健康方面にも憂ふべき現象を來す事になる。

だから歩くといふ事が最も自然な健康法であることを悟らしめ、その重要性を認識せしめたい。

三、自分の體力、脚力の認識

自分の體力や脚力に對して認識を持つといふ事はその人の一生に對つて必要な事である。楛根の楛根限り一日歩いて、どの位の里數を突破し得るか。之は自分一人でも試みられぬ事もないが、さて實行となると種々の障害や、決斷力の缺乏やで困難のものだ。

然し全校一齊の行動となると、一種の責任觀念も働かし、加へて興味もあり、競争心も生じて、本常に精一杯の力量が發揮出来るものだ。さうしてかうした催に因つて、眞に自己の體力脚力に對して強い自信力を持つ事が出来る様になる。

四、傳統を繼いで

古來武田流の軍學に於ては健脚といふものを重視し、甲州勢の超人間的の行軍は當時の戰國時代の武將の一大特徴であつた。

又近來にあつては、我甲和健兒よりなる歩兵第四十九聯隊はすぐれた行軍力を有するのを以て天下無比と聞いてゐる。

かくの如く歩くこと、健脚を誇る事は本縣民の特長であり特質である。この特質を承け繼ぐ吾等は、この尊い傳統を學びこの傳統を生かさねばならぬ。

五、絶好の時季

記念すべき明治節前後は秋天高く澄み、身心頓に引きしまり、かうした遠足を試みる好季節である。以上五點が歩くことを選んだ眼目である。

つまり最も自然的原始的な歩くといふ事を一晝夜二十四時間續行して、一面體育の向上を圖り、一面精神的訓練を施さうとするのである。

一、第一回の試み

第二回は大正十三年十一月四日を以て行はれた。

當日は全校生徒を自己の志望により三班に分ちて、各方面への遠足を行つた。

第一班 校庭より甲州街道を東へ制限時間内に自己の歩き得る限りを進み、歸途は汽車を利用すること。

第二班 本縣北巨摩郡六山村新府城址迄往復約八里。

第三班 本縣中巨摩郡巨本村昇仙峽迄往復約六里。

右の中の第一班が今日の吾校強行遠足の濫觴をなすものである。

當時の記録は不完全でその詳細を知る事は出来ぬが、その概略を記すと、當日は午前六時校庭出發中央線に沿つて東へ甲州街道を進み午後六時を以て終了時とし、正味十二時間歩き續ける事にしたのである。この最高記録は本縣北都留郡七野原町迄約十六里であつた。

この日職員は、一部は生徒と共に歩き、一部は自転車を御用し、共に生徒に附添つて救護の任に當つた。

凡て組織や設備等今日の如く整備したものでなく、よくあれでたいした事故をも生じなかつたものだと、今更ながらその大膽さに驚いてゐる次第である。

然しこの試みは吾人に甚だ尊い教訓と指針を與へて呉れた。

三、第一回の教訓

- 一、東方面は途中に笹子小佛等の坂路があり、且つ道路上に險惡の場所があつて、全校二千の生徒の運動舞臺としては不適當である。
- 二、新コースとして西方面、即ち信州往還を選ぶ。之は東方面に見るが如き諸障害なく、且つコースに沿つて、中央線が通じてゐて、歸途汽車を利用し得る便宜も東線と異なる所がなく寧ろまさつてゐる。
- 三、体育日の意義を徹底させ、眞に自己の持つ力量を遺憾なく發揮させ、學校が期待する目的を達成するには十二時間では物足らぬ。故に時限を延ばして、一晝夜二十四時間にすること、而してその出發の時間は午前零時とすること。
因にこの午前零時出發に就ては、その後種々研究論議が重ねられて、或は午後十時説などもあつたが、生徒の睡眠時間等の關係もあつて、この零時出發を變更するの理論に到達し得ない。
- 四、今後引續き舉行すること。
- 五、救護監督上に就ては更に一段の考慮を拂ひ、過失その他の事故を生じない様注意すべきこと。

四、第二回以後

第一回の結果から第二回以後は中央線富士以西の沿道、即ち信州往還を歩く事になつたのは前陳の通りであるが、第四回迄は足弱生徒の爲に、穴山村新府城址、及び御嶽昇仙峽遠足は第一回通りに依然として許してゐた。

然しこの頃になると、強行遠足に對して生徒はよくその眞意義を諒解し、その態度は著しく積極的になつて、かうした足弱の爲に設けられた方面への志望者は眞の病後者のみとなり、苟くも健康體である限りこの全校的運動に参加し得ないのを、一大屈辱かの如く考へる様になつた。因つて第五回からは西線と同方向にある北巨摩郡穴山村穴山驛迄の遠足だけを存し置き、御嶽昇仙峽への遠足を廢止した。

現に昨年度即ち第十三回強行遠足の際にも穴山驛行きは僅に四名に過ぎない。

之等の事實によつても本校生徒がこの遠足に對する意氣込の如何に大であるかが窺はれると思ふ。

かくて連年實施して、經驗を重ねて行く中に準備上、實施上、救護監督上等につき種々と教へられる所があり、その度毎に改善を加へ、漸次今日の體制を具へる様になつたのである。

五、其の日の概況

天候係の豫報及び天氣圖の研究によつて、いよく十一月四日に舉行と決定すると、職員も生徒も三日の式後歸宅就寢する。

電燈打る頃になると、交通不便の者は、漸次學校控所の特設休憩所に集る。十一時半頃には制服制

帽に巻ゲートル、草鞋姿凛々しく、辨當を背負ひ杖を握つた一千の健児が、電燈煌々たる校庭に集ふ、見送りの父兄も亦、頗る多い。

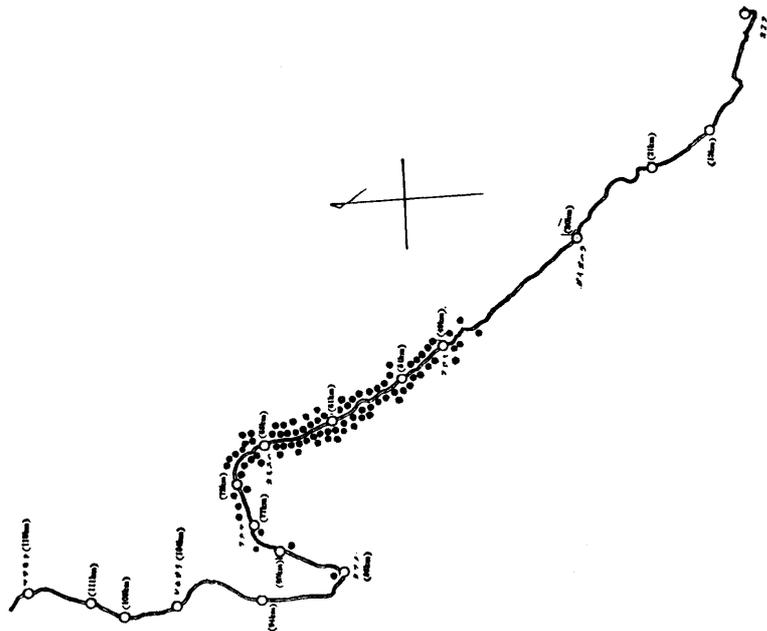
第一鐘によつて所定の位置に集合する、第二鐘は四日午前零時！鳴りひびく日新鐘、轟く陣太鼓、明るい篝火、カードを各學年の監督から受けると、それをポケットに入れる暇も惜しんで握つたまゝ校門を走り出る興奮した生徒の群、寫真班のフラッシュ、救護自動車の出動、かうした雑沓を以て、この大群は關屋辻邊を西進する、健児達は北斗星を仰いで西へくとひた歩み——見送りの父兄もぼつくと去る、やがて學校は元の闇の中に寂然と立つてゐる。

一時間餘にして、最早トツプは韭崎を通り、三時には暮ヶ原に至る、この間は闇の中を、釜無川の響を聞きつゝ、右に七里岩の黒い姿を眺めて進むのだ、睡魔は襲うても、元氣は已に松本をつく勢だ。暮ヶ原救護所の麥湯が盛んに用ゐられる頃には、夜は明けて、紅顔に喜悅は漲る。健康狀況から、此處で引き返す者等は殆んどない位だ。かくてこの長蛇は、縣界の山峽を、美しい紅葉境を、歩みつゞける。

海拔一千米の富士見高原の秋は爽か、左に南アルプスの高峯を仰ぎ、右は八ヶ嶽の秀嶺を望んで、健児等の希望はいよ／＼高い、この附近から道はよ／＼なり最も元氣になる處だ。

昭和十一年十一月四日正午 甲府出發後十二時間の状況

先頭既に86km突破
(●ハハ十人ヲ示ス)



午前九時稍々過ぎ、第一着は上諏訪救護所に到着する、間もなく健脚者は陸續とつゞいて休憩時も惜しんで潑刺たる元氣を以て西北へと進る、而して全校三分の二以上は少くともこの地には来る。

諏訪湖畔の道路の午後は乗物が雑沓する、然しこの埃道を颯爽と歩みつゞける我等健兒の希望には果てしがない。日は漸次山の端に傾く頃になると、流石に下級生は、下諏訪、岡谷邊で打切る者が多くなる。然し健脚を誇る者は、これ等の驛の名には縁はない。

天龍川に夕日は映えて、再び夜の幕が四方をつまみはじめても、電燈が驛に明るく燈されても、寒さが身にしみても、健兒は糠尻へ松本へと進むのだ、前途には難路善知鳥峠が横たはつてゐる、然しここに挑まずひるまさる甲中精神は燦として輝く。毎年この峠を越えて糠尻(二〇三、七軒)に到る者が五、六十名に及ぶのだ。

桔梗ヶ原の夜は暗く淋しい、この原野を尙、希望を捨てずに松本への十六軒を進む。然し松本で彼等の目的は終るのではない、更に大糸南線に健脚を進める者は、眞に剛毅不屈の精神の所有者である、それ等の者の脚は尙餘裕を残してゐるのだ、さうして十二時を目指して進んでゐる。

六、結果をかんがみて

この強行遠足を實施して來て、昨年で十三回になる。各回に於ける成績は別表に示すが如く逐年向上の跡を示してゐる。

最初は漫然歩くといふ事を唯一目的と考へて、その他は副次的收穫として軽く見てゐたが、この歩く事を續けてゐる中に歩く事自体以外に重大なる精神的陶冶の存することが明瞭になつて來て、この吾人の惟は教育的作業として偉大なる使命をもつ事を目覺する事が出來た。

或者は「一日中歩き廻る事は体育でも何でもなし」といつて非難する。或は体育的方面、醫學的方面から見ると論點があるかも知れぬが、然しこの遠足が直接原因となつて、病氣になつたり、身體をこはしたりした者が、過去十三回を通じて、殆ど皆無であつたといふ點から考察して、決して非體育的のものではないと言ひ得られると思ふ。

尤も吾々はこの運動實施に當つては、常に「無理をせぬやう」「飽く迄頑張れ」といふ事を注意してゐる。そして最高記録の向上よりも、全校平均軒數の向上を目標としてゐる。

血氣に逸つて、暴虎馮河の行爲をしてはならぬ。最初の元氣に任せて猪突的の疾走をしてはならぬ。病後や病身では絶対に参加しないこと、途中で故障が起つたら中止すること、等々も戒めてゐる。特に實施の前日には各學年各組に亘つて、學級の監督が生徒一人々々にわたり其の身體狀況につき細心の觀察を行ひ、如何かと思はれる者に就ては、適當の指示をなし、或は校醫の診察をうける等の細かい注意も拂つてゐる。校長からも講堂訓話其他の機會を利用し、この點十分に注意して、無理を厳禁してゐる。だから生徒は先輩の經驗を聞き、自身の體力に應じたる計畫をたて、その計畫に従つて行動して、無理のない事を期すると共に、頑張りの指針となしてゐる。

この様に注意深く行つて、非體育的ならざる様考慮を拂つてゐるので、この非難からは免れ得ると思ふ。

然し吾々はこの運動の効果に於ては体育的方面よりも寧ろ精神的訓練を重視するものである。

全校集めてのこの一大行事は、全校職員生徒をして至一感情の中に融和せしめ眞に打つて一丸とするものがあるのは勿論、尊い精神上の悟りや體驗から、吾人の目標としてゐる剛健不屈の甲中魂が漸次培はれて行くのを見て、欣快に耐へぬのである。以下其の效果の概略について述べて見る。

一、一日に世界を一周回半

第十三回の成績から見ると参加人員九百二十六名、一人平均一七、五里、この相乗積は、一萬六千二百五里で實に一日にして地球を一周回半して、尙餘裕あるのである。この外之がための準備運動やその他有意的に行はれる運動量を加算したならば、眞に驚くべき數値を示す事であらう。

全校一齊的運動日の催として最も適當のものである事は、この事實が雄辯に物語つてゐる。

二、歩く事の興味

十一月四日のこの體育日は學校行事中の最大呼物となつて新涼の動く九月頃になると、早くも之に對する心構へが始められる。

自轉車通學者が徒歩に代へて、足の鍛錬をする。毎放課後一、二里の散策を試みて、脚力を鍛へる。或は日曜を選んで草鞋脚絆に身をかため登山と足馴らしの一舉兩得の快味を貪る者等、生徒の興味は勃然としてこの體育日に向つて行く。

其他廢物に關する研究、歩行と食事との關係、杖に關する注意等歩く事に對する實驗的理論的研究が進められるのである。

かくてこの強行遠足實施以來、歩くといふ事に就て非常なる注意と興味とが喚起されて來た。この興味が永続して、彼等の一生涯を通じての運動法となるのも決して空想ではないと思ふ。

三、精神鍛錬

十里近くも歩けば非常な疲労と倦怠とを感ずるのは誰しもの經驗である。これ以上五里十里と踏み出すには非常なる克己と勇氣とを要する。最早脚で歩くのでなくて氣力で歩くのである。

焰々たる篝火に送られ、歡聲をあげて勇躍驛門を出發した一千の健兒も十數里を歩き續けては最前線に行く強剛のものは別として、流石に疲労を覺えない譯にはいかぬ。

夕陽將に沒せんとして晩秋の夕風身にしみ、一種の衰愁身に迫る時、坦々砥の如き信濃路を辿る。彼等の脚は痛み、彼等の疲労はその極度に達する。然し彼等の意氣は少しも衰へぬ。必死の努力を續けて、飽く迄もゴール目掛けて突き進む。この悲壯の決意、不屈不撓の精神、それは將來彼等に何物を齎すであらうか。

由來本校生徒は、盆地の中央の恵まれた環境に育まれた爲か、粘りと頑張りとに缺けてゐたかの感があった。

例へば運動競技や、野球蹴球等の試合などに於て、味方に少しく敗色が見えて來ると、試合を諦めてしまふ傾があつたが、近來面目一新、刀折れ矢つきる迄奮闘を續ける粘り氣が出て來た。これこそ強行遠足の行の哲學から得た尊い悟りではあるまいか。

又目下本縣山梨高等工業第三學年在學中の某學生が嘗て本校五學年生當時この強行遠足に於て、頑

張りくして、たうとう松本(三十里)迄いつた。その述懐に曰く、「人生は預張りである」と。

又本校卒業生で現に第一高等學校在學中の某學生が、昨夏歸省した時本校職員に語つた話に、野外教練の一日、同一學年のもの皆疲勞困憊して落伍したが、自分は嘗ての強行遠足の事を回想して、猛然たる勇氣を振起し、たうとう最後迄預張り通したといつてゐる。

百の金言も、千の名訓も机上の空論では價值に乏しい。眞の體驗から得た教誡は尊く強い。

冲天の意氣は燃えても、痛む脚、疲れた身體は見る目に痛々しい。荷車挽きや、自動車の運転手などが痛く同情して、同乗を勧める。一度二度は斷る。然し三度四度となると意志の弱いものは、遂ひうかうかこの誘惑に陥つてしまふ。又極僅少ではあるが街道を疾驅する乗合自動車を見ては、矢も楯もたまらなくなつて、こつそり一、二里之を利用する。或はある區間人知れず汽車を利用して、自己救済を企てる。かうした卑劣手段を弄するものが、この行事を始めてからごく僅少ではあるがあつた事は事實である。

學校では神聖なるこの運動行事にかゝる卑劣行爲の行はれる事は最大なる遺憾であるとなし、極力指導を加へ深い反省と自覺を促した結果、最近に至つてはかゝる不正行爲は全く跡をたち、彼等はいらゆる誘惑の陷阱を排除して、強い信念にたち正々堂々の歩みを續けるやうになつた。

濟職事件、利益問題、カンニング等かうした呪ふべき不正行爲が敢行される世相をかへりみる時、確乎たる信念に燃え、正道に立脚して、獨立獨歩する人士の養成は吾人に課せられたる任務ではないだらうか。

困苦に堪へ、窮乏に忍び、不屈不撓、進みて止まざる甲中魂、顧みてやましき所なくんば千萬人と雖も我往かんの甲中氣魄はかうして漸次に實を結んで行くのである。

四、感情の融和

毎年四、五年生の若干名は、一、二年生の足弱生徒をいたはり介抱しながら、メタル線返つて行くのを見る。一、二年生にメタルを獲得する優秀成績者が多いのは、之等かくれたる陸の力が預つてゐるのである。弱者に同情する武士道的精神、自己犠牲の尊い行爲であると共に、長幼相接觸の好機會である。

疲勞困憊した學友をいたはる濃やかな友情の發露は隨所に發見し得る。

疲勞しまつて寸歩も出ない友を相當に疲れてゐる身ながら抱く様にして伴ふもの、杖に縋らせて引張つて行くもの、一個の握飯を分けあつて飢を凌ぐもの、懷中藥を與へて友の氣力恢復をはかるもの、一杯の水筒の水を飲み交して渴を醫するもの、脚部の手當を施してやるもの、歸途の汽車中で腦貧血患者に甲斐々々しい介抱をするもの等、擧げ來れば擧すべき友情、涙くましい校友愛がどんなに展開される事だらう。

壘尻や松本迄にのびる健脚強剛のものも、亦互に助け合ひ、勵ましあつて、各自他の優勝を冀ふからこそあの輝やかなしい記録が作れるのである。

かうして艱難を共にして交はされた友情は彼等を強く堅く結びつけるのである。昨年始めて此遠足

に参加したある一年生の父兄が、一年のメタル線下諏訪(近十八里)を歩いて来た子供に感想を叩いた。「面白かったか」

「少しも面白い事はない。途中の景色を見る所か歩くで精一杯だ。その歩く事が苦しくて苦しくて、どこをどう歩いたか一寸も覚えなどはない。あゝ苦しいく」と、

唇々を呷りこけてしまふ。

暫くして上級の二・三の友がやつて来た。

強行遠足の話が出る。途上の愉快な話、最高記録者は誰か、誰が何時に上諏訪についたとか、臺ヶ原の麥湯、上諏訪の蜆汁、それから華やかな勇者禮讃の言葉等等。

疲勞に苦りきつてゐた一年生、忽ち元氣恢復、それからそれへと話ははずみ、今日の艱苦は誇らしい勝者の歡喜となり、強行遠足が楽しい愉快なものになつてしまつたといふ話がある。

苦しかった事もやがての思ひ出となれば、苦しさが大きければ大きい程、強い印象と興味とが伴ふものである。そしてかうした共々に味はつた思ひ出を語り合ふ時に眞に親愛の情が湧き出るのである。又一生徒の後日談に、

「桔梗ヶ原(撫尾と松本との間の淋しい街道、嘗ては時々追刺などが出沒して、夜の通行人を脅した等の話が傳つてゐる處)で先生に戴いたキャラメル程おいしかったものはなかつた」と、之は途中救護の職員がこゝで彼に會つて與へたキャラメルである。

夜の九時十時頃、二・三の級友と、トボく迎る淋しい田舎道、語る言葉もなく淡い懐中電燈をたよりに只管前進をのみあせつてゐる時、學校名入の提灯をともした先生に會ふ、その事だけでも彼等はとびつく程に嬉しい。況して情のこもつたキャラメル、彼等をして歡喜せしめ、日本一のキャラメルと感ぜしめたのも尤もな事であると思ふ。

かうした何でもない事でも、かうした機會には強い感激と感謝となり、不知不識の間に師弟の情誼が結びついて行くのである。

卒業生の會合などでも、先づ第一に話し出されるのは、この強行遠足の楽しい思ひ出である。

教師生徒卒業生、凡てを同一感情に融和せしめて、渾然として學校愛の一色の中に包含せしめるこの強行遠足の收穫も亦大といはねばならぬ。

七、今 後 へ

強行遠足が實施されるとすぐ翌日職員會議を閉いて、實施結果からの檢討反省を行ひ、少しでも改善すべき點は改善して、この行事の遂行に精進努力して来た。

今や十三回の經驗を重ねて、其の設備、方法、救護、監督等形式的方面に於ては完全に近い體制を整へて来た事を確信するものである。

學校のすべての教育的作業は、人格陶冶といふ教育究極目的達成のための手段であり、方法であり、道程である。吾人のこの企ても亦人格陶冶の一部面である事は勿論である。

従つて吾人の務むべき重點は形式的體制の完備もだが、よりこの企てによりて得たる精神的訓練を生かす内容的質質的方面に存するのである。形式體制の完備はよりよき精神的收穫を得んがための方に過ぎぬ。

形式完備を見た今日、今迄もさうであつたが、今後更に、彼等のこの體得した精神を、彼等の學業に、彼等の日常行爲に、不斷に反映せしめ、小にしては甲中魂、大にしてはよき日本人としての大人格を作り上げて、系統的組織的の指導を圖ること、これこそ吾人にとつて不息不退轉の精進であらねばならぬと思ふ。

既に本縣内に於ては本校のこの舉に賛同して、この強行的剛健遠足を行ふ様になつた學校に、山梨高等工業、縣立農林、市立甲府工業、縣立峽北農等がある。皆夫々に立派な効果を擧げつゝある。

吾人は今後かゝる企てが全國各種學校に於て實施され、やがて全國的の運動ともならん事を切望して止まぬ次第である。



佐野智子・画

昭和四十七年九月

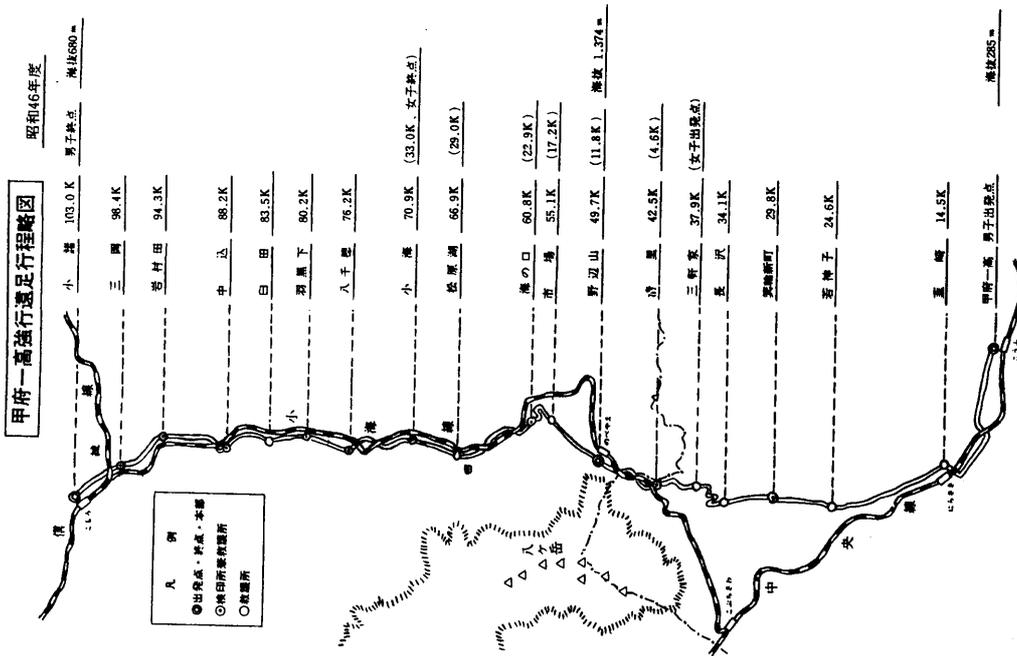
甲府一高強行遠足の概要

山梨県立甲府第一高等学校



目次

一、強行遠足の概況	4
二、強行遠足の沿革	5
三、小諸へ行くぞ	9
四、その準備	11
五、部外者からの協力	13



序

明四十八年度から、高校の教育課程が改訂されることになったが、これに伴って、高校教育の三領域の一つである学校行事等についても、新たな角度からの再検討が行なわれつつある。高校教育に関する専門雑誌に「高校教育」というのがある。東京神田の学校出版社から刊行される月刊雑誌であるが、全国高校長協会や高校教育研究会が共編している。その九月号が「学校行事の今日的意義」というテーマの下に特集されることになった。

その際、伝統ある甲府一高の強行遠足をぜひ掲載したいからとの執筆依頼があった。多忙のさ中ではあったが、「頼まれれば、越後からでも米搗きに来る。」という喩えもある。敢えてこれを引受けることにした。さて、執筆にかかったものの、どうまとめてよいか苦しんだ。頼みの綱は「創立八十五周年記念、強行遠足沿革誌」である。山田茂先生が編集委員長となって苦心を重ねてまとめたものと聞いているが、一四五頁にわたる膨大な記録である。これを再三再四にわたって精読し、なお不明の点は体験者の間を尋ねて回った。霧が晴れるように次第に全貌が明らかになるにつ

れ、今さらのようにその尊さを痛感し、それが私の意欲をかきたててくれた。徹夜も重ねて、やっと期限に間に合わせたものが「高校教育」に六頁にわたって掲載された。

この記事を読んで始めて強行遠足の全貌を知ることができたと多くの先生方からお讚めのことばをいただいた。本年の強行遠足も間近に迫っているので、これを関係者一同に配布したらとの発議がなされた。私としても、大切なところを削除されたり、しかも誤植等もあって、甚だ不本意に思っていた折であったので、全文が活字になることは願ってもないことであった。早速、元の原稿に追加訂正を行ない、些か肉付けしたのが、この小冊子である。私も、本校に赴任して、四回目の強行遠足を迎えるが、このような機会に恵まれて、本校の伝統ある行事を筆にし得たことに豊かな満足感を覚えている。何かとご協力下さった方々に対し、心から感謝の意を表する次第である。

昭和四十七年九月

校長 根津修蔵

本校では、毎年秋十月中旬に、甲府から小諸に至る百軒の強行遠足を実施している。昭和四十六年度の実施状況を主として、その概況を紹介してみよう。

一、強行遠足の概況

強行遠足は、男女によつて、歩行距離、出発時刻、制限時間等を異にしている。

男子生徒は、十月十三日午後二時登校、人員点呼、服装、携帯品の点検を受け、出発式を終えた後、午後三時、三年生を先発に、五分間の時差をおき、二年生、一年生の順に、太鼓の音に送られて、学校を出発する。そして翌十四日の正午まで、夜を徹して、二十一時間、たゞ歩きに歩き続ける。終点小諸に至る道中には、十七ヶ所にわたる救護所や検印所が設けられてある。(別図参照)生徒はここで、湯茶の接待を受け、体具合の悪いものは治療してもらい、個人カードに検印を受ける。

甲府・小諸の丁度中間に、国鉄最高地点(海拔一、三七四米)の野辺山高原がある。ここには、本部が設けられ、全線の連絡中枢機関となる。また、生徒には、焚火の下で、シジミ汁が給与される。高原の秋は爛け易く、霜にかじかんだ手に伝わる腕の暖かみには、忘れ難い思い出が残る。ここで、携行の握り飯包みを開く生徒が多いが、中には歩きながら食べるものもある。

昨年は、夜明けに雨に見舞われ、午前七時半には、全線に中止命令が出されたため、小諸到着者は十二名に過ぎなかったが、平年は二百名を上廻る。この数は男子生徒の約四分の一に当る。残りの生徒は、正午を見越して、各救護所ごとに前進が停止され、集結されて、最寄りの小海線の各駅から甲府駅へと送還される。生きにとつては、小淵沢駅での中央線への乗換えと、甲府までの跨線橋とが、難行者

行である。両足裏を、マで腫らし、二本の杖に縋つて、スキーを滑ぐように、一足一足階段を昇る生徒の後姿には、しんと胸を衝かれるものがある。翌日は、午前十時までに登校しなければ、強行遠足は棄権と見なされる。

女子生徒は、男子の出発した翌朝午前五時に学校に集合し、バスで三軒家に赴く。午前七時、三軒家を出発、野辺山を経て、終点小海に向う。歩行距離は三十三軒、制限時間は、午前十二時半までの五時間三十分である。昨年は、雨のため、そのままバスで引返したが、平年の終点小海到着者は、三百名を越える。この数は女子生徒の約八割に当る。従つて、距離延長の囁きも聞かれる。

さて、このような強行軍は、戦前の中等学校では、極く当り前の年中行事であつた。あるいは、百軒という距離は、戦前といえども稀であつたかもしれない。それが、甲府一高においては、五十近い回教を重ねて、現に生き続けているのである。暴挙というものもあろう。アナクロニズムと誹るものもあるかもしれない。しかし、それには、それだけの伝統があつて、現在に及んでいるのである。それを正しく認識してもらうためには、どうしても、本校の強行遠足の沿革に触れなければならない。

二、強行遠足の沿革

(一) 起源(大正一三年)

本校の強行遠足は、大正十三年を起源とする。この年、文部省から、全国の中学校あてに、明治節(現在の文化の日)を記念して、体育行事を実施するようにとの通達が出された。時の校長、江口俊博先生(第九代、大正十二年六月、昭和七年三月)は、十一月四日をもつて、本校の体育日と定め、全校職

員・生徒一同、揃って「歩く」ことを提唱された。

当日午前六時、校庭に集合した職員・生徒は、新宿方面・新府城跡(鎌倉市穴山町)・金桜神社(御岳昇仙峯)の三方面に分れて、それぞれ出発した。このうち、新府城跡と金桜神社とは、いわゆる遠足コースである。後の強行遠足の起源となったのは、新宿方面コースであった。

このコースにおいては、午前六時出発、午後六時前進停止という十二時間歩行制を定めて、甲州街道を中央線沿いに、新宿に向って歩けるだけ歩くこととした。そして、各生徒の到達点は、各駅の駅長の証明をもって当てることにした。その最高記録は、上野原(六四、〇軒)であった。

(二) 松本方面(大正一四・一五年)

大正十四年(第二回)から、二十四時間制となり、十一月四日午前零時学校出発、翌五日午前零時前進停止、丸一昼夜歩き続ける制度が採用された。ここに、本校強行遠足の原型が確立したのである。前回の新宿方面コースは、途中で笹子峠や小仏峠の難所があり、生徒の歩行には不適當であるところからやはり中央線沿いで、比較的平坦な信州街道が選ばれた。前回同様、中央線の各駅をもって、生徒の到達点とし、松本(二二〇、四軒)をその終点とした。

この松本終点コースは、その翌年まで、二ケ年間継続されたが、終点到着者が相当数に上り、歩行に余力のある生徒から、更にコースを延長するよう、要望が頻りであった。

(三) 木曾福島方面(昭和二・三年)

昭和二年(第四回)から松本終点制は廃され、二十四時間制で、余力のあるものは、松本を越えて、歩けるところまで歩くように改められ、そのコースは、木曾福島方面に延長された。

この木曾福島方面コースは、その翌年まで、二ケ年間継続されたが、その最高記録は、木曾福島

(一四二、〇軒、昭和二年)であった。しかし、このコースは、松本方面と途中の塩尻で分岐しておりかつ各駅間の距離が遠く、生徒の乗車指導上に難点があった。

(四) 信濃大町方面(昭和四年、三六年)

昭和四年(第六回)から、木曾福島方面コースは廃され、大糸線沿いの糸魚川街道が選ばれ、信濃大町方面コースに改められた。このコースは、一旦松本に至り、更にコースが延長されるので、甚だ明確であり、その後、三十六年(第三十六回)まで、実に三十一年間(二十九回)の長きにわたって継続された。回数が年数より二回少ないのは、二十年、終戦により国鉄が痲痺状態に陥ったことと、三十四年伊勢湾台風により中央線が寸断されたことによつて、強行遠足が実施不能に陥つたためである。

この間、二十三年には、学制改革が行なわれ、本校は、旧制中学校から新制高校へ移行したが、この伝統は、そのまま継承された。ただ、新制高校となつてからは、学校運営上、十一月四日の慣例は十月中旬に、午前零時出発は正午出発に改められた。また、併設された定時制・通信制の生徒に対しては、希望参加の門が開かれた。なお共学制による女子生徒に対しては、二十五年(第二十六回)から女子コースが特設された。女子コースは、最初、午前九時半出発、穴山(一九、二軒)を終点とする六時間半制であったが、その後、台ヶ原(二十六年、三〇、〇軒)、日野春(二十七年、三四、〇軒)、富士見(三〇年、四九、〇軒)とコースが延長されるにつれて、出発時刻も次第に早められ、三十三年(第三十四回)には、午前七時半出発の八時間半制となった。

この大町方面コースの最高記録は、二十四年大町(一五二、六軒)、二十六年木崎(一六〇、二軒)三十二年薬場(一六七、一軒)と、年を追つて次々と更新されていった。この間、降雨のため途中で中止したのは、七年上諏訪、十二年辰野、十五年松本、二十九年川岸、三十年岡谷の六ケ年であった。

なお、十九年には、勤労働員のため、三、五年生は参加不能となり、一、二年生のみ小野（九一、七軒）を終点として実施された。

上述したとおり、この大町方面コースは、三十一年間の長きにわたって、本校生徒に親しまれ、卒業生にとっても思い出深いものであったが、わが国経済の高度成長は、異常な速度で道路の舗装化を進めそれにつれて自動車の交通量も激増し、これ以上信州街道を利用することは、生徒を危険に陥れることに外ならない状態となった。

(五) 小諸方面（昭和三十七年～現在）

昭和三十七年（第三十七回）から、松本方面、木曾福島方面、信濃大町方面と、通算三十八年の長きにわたり、本校生徒の足跡の印された信州街道に別れを告げ、小海線沿いの佐久街道が選ばれ、小諸方面コースに変更された。このコース決定に当っては、本校職員をもって構成する実行委員会の議を踏まえて、甲論乙駁、まさに保守・革新の熱気溢れる論争が繰返えされた。

その結果、強行遠足を「苦しみの行事」から「楽しみの行事」へ転ずる方針が打出され、歩行距離も松原湖（六六、〇軒）を終点とし、従来の松本（一二〇、四軒）に比して半減されることとなった。かつ、清里に本部を設け、その清里寮（ポール・ラッシュン氏経営）には、模擬店を設け、プラス・バンドを養って、生徒をフォーク・ダンスやソフト・ボールに興じさせようという計画が立てられた。従って正午頃には生徒を清里に集めるため、男子は午后五時学校出発、女子は翌朝八時箕輪新町出発に改められた。しかし、案外に、生徒はこのレクリエーション会場に滞らず、更に前進を続けるものが多かった。

この反省に立つて、翌三十八年には、本部は野辺山に移され、終点は中込（八八、二軒）にまで延長された。更に、四十年には、本校創立八十五周年を記念して、終点は小諸（一〇三、〇軒）にまで延長

され、ここに、小諸方面コースは定着を見るに至った。この間、女子コースは箕輪新町～松原湖（三七、一軒）から、三十八年箕輪新町～海ノ口（三一、〇軒）、三十九年若神子～野辺山（二五、一軒）と変動したが、四十年（創立八十五周年）には高原のみを歩行する三軒家～小海（三三、〇軒）に定着するに至った。

小諸を終点とするようになって、最高記録のあり方も大きく変化した。従来は、制限時間内に何軒歩くかが焦点であったが、これからは、丁度マラソンのように、全行程を何時間で走破するかを焦点とした。四十年以降四十六年までの最高記録は、四十三年の十二時間二十七分である。しかし、中には、四十六年のように、トップが余力を持ちながら、落伍しそうな友達を励まして、四人が同時に決勝点を踏むという友情のゴールもある。終点到着者数は、四十年には一〇〇名であったが、その後逐年増加して四十五年（創立九十周年記念）には、二二三名に達した。昨四十六年は、雨のため、午前七時半に中止命令をだしたので、終点到着者が二二名に過ぎなかったことは、既に述べた。

さて、この小諸方面コースも、昨四十六年をもって、十周年を迎えたが、開発の遅れていた佐久街道にも、近年改良工事の手が進められるに至った。工事現場は、その都度迂回路をとらねばならず、実施上甚だ困難を来しているが、それにも増して、危惧されるのは、全面舗装化の完了した暁である。自動車の交通量は激増し、恐らく強行遠足の継続を不可能にすることであろう。山梨側から野辺山までは、既に坦々たる舗装路が開通しているが、野辺山周辺には、自動車の排気ガスによって枯死しはじめた松林も自立している。その対策を思案するにつけても、東海道のような遊歩道の建設が望まれてやまない次第である。

三、小諾へ行くぞ！

生徒は、この強行遠足を、どのように受けとめていることであろうか。よく教室の窓硝子などに「小諾へ行くぞ！」という落書きを見受ける。このような形で、自己の決意を顯示しなければおさまらない生徒の心境も理解できるような気がする。深夜、懐中電灯の光りを頼りに、真暗な林の中を小諾へ向って歩む。今別れて来た親しい友のことを思い、捕む足を引摺って、独り黙々と目的地へ向ってたゞ歩み続ける。それは、孤独との闘いである。そこには、何か人生に通ずるものがあるのかも知れない。

本校の生徒は、九九%までが大学進学希望者であるが、大学受験の可否、自己の将来の運命を、この強行遠足に賭けているような節も伺われる。救護所で医師に停止を命ぜられた生徒が、なお前進を懇願している姿に接すると、つい目頭が熱くなってくる。私は、例年、生徒を学校から出発させた後、自動車で生徒の跡を追い、各救護所を構って、小諾で先頭集団を迎えることにしている。その後、逆コースで、小諾に向って来る生徒を激励するのであるが、朝霜の下りた高原を、杖に縋り、あるいはガニ股になって、必死に歩み続ける生徒の姿に接すると、激励の声は喉につままって、とめどなく涙が両頬を伝ってしまふ。その姿は、人の心を打たずにおかない真剣さに満ち溢れている。

本校では、四十四年春から、政治活動が表面化し、本泉の拠点校として、次第にエスカレートして行ったが、その火蓋となったのは、伝統への挑戦であった。しかし、この強行遠足に対しては、不思議なほど抵抗は示されなかった。これに反対すれば、生徒全体の支持を失うものと恐れただけではないかと思う。それほど、この伝統は生徒の心の中に生き続けており、形骸化されたものとなっていないかということができよう。活動家も黙々とこの行事に参加した。また、四十五年は、本校創立九十周年に当

り、記念事業の一環として、同窓会より、参加生徒全員に記念メダルが贈られたが、このことは、この生き続けている伝統を、生徒の心の中に再確立させる点で、大いに意義があった。決して即効的な意味でなく、傷一つ残さず立直った現在を招来する原動力は、あるいはこの辺りにあったのではないかと思う。

本校の卒業生は、寄り合うと必ずといってよいほど、強行遠足の話に花を咲かせる。これによって、お互が同窓生であることを確かめ合い、親近感を高めていく手形のような感さえする。旧軍隊の経歴者は、強行軍に耐え抜いた原動力として、あるものは、苦境打開のエネルギーとして、この強行遠足を引用する。やはり、人生に通ずるものがあるようである。これらのものが、有形無形に在校生に影響を与えているのではあるまいか。

四、その準備

百軒、二十一時間歩行とは、確かに大行事である。しかも、生徒全員参加となれば、種々の角度から細心の注意が払われなければならない。長い伝統の上に立つからといって、決してマンネリズムに陥ることは許されない。以下、準備の主なるものを挙げれば、

(一) 強行遠足実行委員会の設置

年度当初の校務分掌決定に当り、必ずこの委員会を設置する。前年の実施状況に鑑み、日時、方法、コース等を徹細に検討し、職員会議の議を経て、当年の実施計画を樹立する。コースの実地調査は、少くとも、夏休中、実施一週間前の二回にわたって行なわれる。救護所との交渉、警察への依頼、国鉄との打合せ等を入れれば、十回前後となる。疲労した生徒の列車輸送の方法も、会員券方式を採り入れる

ことによつて、大きな改善が行なわれて来た。

(二) 健康診断

県内の他校において、強行遠足実施中に、女生徒が心臓麻痺によつて死亡するという事故が、三十五年と四十三年の二回にわたつて発生している。本校では、未だそのような事故はないが、事故を未然に防止する上から、実施一ヶ月前には、各家庭へ連絡し、各個人の健康状態に応じた掛付医師の診断を推奨し、その上で参加の可否を求めている。生徒の参加率は九五%を上廻るのが恒例である。実施一週間前には、要注意者並びに希望者に対し、校医による再診断を行なう。当日は、各教護所並びに全線移動に医師を配して、通過生徒に細心の注意を払っている。

(三) 予行演習

強行遠足の諸ルールを理解させ、自己の体力を認識させるため、本番に先立つて、予行演習を実施している。かつては、全校生徒を対象として、丸一日掛けて、男子は三八〇〜三〇〇軒、女子は一六〇〜二五軒の予行演習を行なつて来たが、六年前から、学校行事調整の要に迫られ、一年生のみを対象とする午后半日の十軒コースに短縮した。実施一ヶ月前になると、自転車・バイクの通学を廃して、練習の意味から、できるだけ徒歩通学を推奨しているが、関心の深い生徒の中には、夏休み中から清里辺りまで練習に励むものもいる。

(四) 服装

かつては、制服・制帽に巻脚絆、草鞋履きで、首に握り飯包みを巻き、腰には予備草鞋二本をぶらさげるのが、強行遠足スタイルであったが、現在では、交通安全対策上、暗闇でも人影が目立つよう、白スポン・白運動帽を着用するように改められた。上衣は、夜の冷気を防ぐよう、ジャンパー等の脱着は

自由に行なっている。草鞋は入手困難のため、運動靴が一般化した。この草鞋は強行遠足のシンボルとして、記念メダルのデザインに今も生き続けている。昨年は、運動靴に夜光塗料テープを貼付させたところ、自動車のライトを浴びて、夜目にもくつきりと浮び上り、甚だ効果的であった。

五、部外者からの協力

本校の強行遠足には、実に多角的な部外者からの協力がある。それらが蔭の力となつて、この大行事が円滑に推進されているといつて差支えなからう。実施当日は、場所によつては前日から、全職員が拳つて部署につくが、時には、OB教師からも応援がある。卒業生に至つては、それぞれ好みの場所を巡んで職員の手助けをするものが多数に上る。協力者の主なものを挙げれば、

(一) 父母の協力

昨年は、小諸コース十周年記念ということもあつて、父母からの協力者は百四十二名に達した。自家用車を提供して、全線または区間巡視を行なうもの、教護所・検印所に詰めるもの、深夜危険地域に独り立つもの、その真剣な姿には、頭の下がる思いがする。交通事情の悪化に伴い、今では父母の協力なしには、強行遠足の継続は考えられなくなりつつある。父母の中には、かつての協力の味が忘れられず子どもの卒業した後までも、自家用トラックや従業員を提供して、協力を継続して下さる方もいる。

(二) 医師の協力

本部・終点・教護所に配される医師は、すべて父母からの協力者である。たゞ独り、羽黒下教護所には、本校を卒業した医師が例年詰めて下さる。父母の医師の中には、夫人・看護婦を同伴され、十刻の休みもとらずに、生徒の治療に當つて下さる方もいる。当夜、校医は、各教護所を歴訪し、教護体制の

全般を視察する。学校では、一応の医療薬を用意するが、手持ちのものを使用される場合が多い。

(三) 無線クラブの協力

甲府に「山梨クリスタルクラブ」(会長清水義朗氏)というアマチュア無線クラブがある。五十名前後の会員を擁しているが、三年前から、強行遠足当日には、全員参加の自主的夜間訓練が実施される。野辺山に中継基地を置き、昨年は、全線に八台の無線車が配された。途中での出来事は、細大漏さず刻々と通報される。私が全線を往復しながら、諸判断を下すことのできるのは、無線あつてのことといえよう。

(四) 長野県側から寄せられる好意

甲府一高の強行遠足は、本県側よりも、むしろ長野県側において有名である。思うに、疲労困憊その極に達して、なおかつ目的地に向おうとする生徒の真剣な姿は、長野県側でなければ、見えることができないからではなからうか。沿道から暖い声援が贈られるが、幼い子を抱えた母親は、この姿を子ども心に焼き付けたいと漏していた。個人や婦人会から寄せられる牛乳やリンゴの接待は、各所にみられる。雨天中止の際、濡れた衣服を乾かしてもらい、暖かい食事を与えられて困窮し、私に謝礼を代って述べるよう頼みに来た生徒がいた。かなり以前のことであるが、長野県知事あてに感謝の手紙を書いたところ、折返し激励の返事をいただいたことがある。

臼田に依田さんというお店がある。今は亡きで主人の代から、握り飯・牛乳・リンゴの喰べ放題である。その資金は、年間の小遣いを貯めたものだという。現在は、息子さんの理解の下に、未亡人がその遺志を継ぎ、近所の奥さん達までがお手伝いに来ておられる。ある年、学校からの要請もあり、握り飯を廃したところ、がっかりした生徒の姿に接して、慌わてて、後続者のためにも米を炊いたという。一昨

年 本校創立九十周年 念式典に際し、特別表彰を行ったところ、会場の昇 云館を揺らすような拍手の渦が捲き起った。

終点小語では、到着した生徒の休息所として、公民館が開放される。市当局並びに市教委のご好意である。本年四月、新小諸市長となられた小山威雄氏は、過日甲府へご用務の途次、わざわざ学校へお立寄り下さり、ご激励のことはを下さった。また、本年、道路工事を避けるため、女子の終点を海の口とする予定であるが、兩枚村の役場をお訪ねしたところ、村長・助役・教育長総出で公民館の開放をご快諾下さった。その他、国鉄・警察署・道路工事事務所等関係機関から寄せられるご好意は、申すまでもない。

(四) 部外からの参加

本校の卒業生からは、毎年特別参加の申込みが絶えない。在校時代の記録を更新したい、あるいはあの感激に再び浸りたいというのである。中には、大学の学友を誘って、自分の感激を親友にも分ち与えたいというのもある。かつて、六十を過ぎたお年寄りが特別参加し、強行遠足の名物男となっていたが今はじくなられた。年によって、父親が参加し、偶然教護所でわが息子と出遭い、お互いに励まし合うほゝえましい光景に接したこともある。かつて、長野県側の沿道の市町村から、集団参加申込みがあつたが、今では逆コースで甲府を終点として実施しているという。長野県側の高校でも、強行遠足を取入れたところもあると聞いている。

強行遠足の疲労度がどの位に達するか、その測定は、体育界にとって興味のある問題である。四十五年、東京教育大から教授並びに助手数名、山梨大学から学生十名が、その測定に当られ、本校生徒二十名に対し尿・腱反射・フリッカー等のテストを行った。翌四十六年、東京教育大では、前年の反省に立

って、学生七名を特別参加させ、その実験体によって、細密な調査を行った。一応簡単な報告書が寄せられているが、明快な結論は得られないようである。

さて、本校の強行遠足に、なぜこのような協力や好意が寄せられるのであろうか。そこには、個人や学校とのつながりとは考えられないものがある。一概に郷愁とも云い捨てられない。何か現在の教育に欠けているものが、この強行遠足の中にあるのではなからうか。それは、人間として最も原始的でありかつ自然な「歩くこと」かも知れない。また、困苦に「耐えること」かも知れない。あるいは、両者の相乗されたものかもしれない。ともかく、その期待に添うことの中に、言い難い教育の意義があり、その実現を図ることの中に、われわれ教育者に課せられた使命があるように思えるのである。



佐野智子・画

本校の沿革（平成9年3月まで）

本校は寛政年間甲府城南の地に設置された甲府学問所を前身とする官学徽典館に淵源する。

- 1873（明治6年）5月 開智学校と改称
- 1874（明治7年）3月 師範講習学校と改称
- 1875（明治8年）3月 山梨県師範学校と改称
- 1876（明治9年）7月 市内錦町（現丸の内一丁目）に校舎新築
- 1877（明治10年）7月 師範学校内に中学予備学科設置
- 1880（明治13年）10月 「中学教則」の制定に基づき、山梨県中学校が師範学校内に設置される。同月23日開校の式典を挙（創立記念日）
- 1881（明治14年）8月 師範、中学の両校合併、山梨学校と改称
- 1882（明治15年）10月 徽典館と改称、師範学科、初等中学科設置
- 1883（明治16年）1月 校舎焼失
- 1884（明治17年）7月 はじめて徽典館初等中学科から卒業生1人を出す。
- 1884（明治17年）9月 校舎再建。10月開館式を挙
- 1886（明治19年）4月 「中学校令」制定。
6月 「尋常中学校ノ学科及其程度」を制定
- 1887（明治20年）3月 山梨県尋常中学校発足
- 1888（明治21年）1月 徽典館女教場を改修して、山梨県尋常中学校の校舎とする。
2月 山梨県尋常中学校予科設置（28年度廃止）、尋常中学校附属獣医専修科設置（23年度廃止）
- 1890（明治23年）4月 尋常中学校第1回卒業式挙
- 1899（明治32年）4月 「中学校令」改正に伴い、山梨県中学校と改称。
- 1900（明治33年）4月 甲府城内に新築、移転。
5月 山梨県中学校都留分校を谷村に置く。
- 1901（明治34年）4月 本校錦町分教場内に山梨県第二中学校が設立されたので、山梨県第一中学校と改称し、さらに同月県立山梨県第一中学校と改める。
6月 県立山梨県第一中学校都留分校を大月に移す。
- 1903（明治36年）4月 県立山梨県第一中学校都留分校を県立山梨県第二中学校都留分校とする。
- 1906（明治39年）5月 山梨県立甲府中学校と改称。
- 1924（大正13年）11月 第1回強行遠足実施。
- 1928（昭和3年）7月 西山梨郡千塚村（現位置）に新校舎竣工、移転。
- 1939（昭和14年）4月 補習科1学級併置。
- 1943（昭和18年）4月 補習科廃止。
5月 木造9室増築。
- 1945（昭和20年）7月 戦災のため生徒控所、小講堂、特別教室、新館等焼失。
- 1947（昭和22年）4月 学制改革のため第1学年募集停止。実務科1学級併置（1年間）。
- 1948（昭和23年）4月 学制改革のため山梨県立甲府第一高等学校と改称。全日制課程普通科、定時制課程（夜間男女共学、普通科）、高等学校通信教育課程設置及び併設中学校併置。木造2階建8

- 教室を増築する。
- 7月 甲府女子高校（現第一商業）に定時制課程の分校設置。
- 9月 校歌制定。
- 10月 定時制課程の甲府女子高校内の分校、市移管。
- 1949（昭和24年）3月 併設中学校廃止。
- 1950（昭和25年）4月 学区制設定、男女共学の実施（全日制課程普通科33学級となる）特別教室木造2階建6教室、準備室2教室増築。
- 1953（昭和28年）4月 全日制1学級減の32学級となる。
- 1954（昭和29年）4月 全日制2学級減の30学級となる。
- 1955（昭和30年）2月 体育館落成。
- 1957（昭和32年）10月 図書館、化学特別教室、定時制給食室完成。
- 1960（昭和35年）10月 創立80周年記念式典挙行。
- 1961（昭和36年）1月 武道場を移転して、体育館横に増改築。
- 3月 日新ホール落成。
- 4月 全日制2学級減の28学級となる。
- 1963（昭和38年）4月 全日制2学級増の30学級となる。
- 1964（昭和39年）4月 全日制2学級増の32学級となる。
- 1965（昭和40年）5月 コンクリート造新館9教室落成、全日制4学級増の36学級となる。
- 1967（昭和42年）4月 全日制2学級減の34学級となる。
- 1968（昭和43年）3月 本校、南高間総合選抜制度実施、本校全日制1年定員480名。全日制1学級減の33学級となる。
- 1969（昭和44年）4月 全日制2学級減の31学級となる。
- 1970（昭和45年）4月 全日制1学級減の30学級となる。定時制1年募集停止。通信制2・3・4年生中央高校にて授業ならびに事務。
- 10月 創立90周年記念式典挙行
- 1971（昭和46年）4月 コンクリート造4階建北館第1次分完成。
- 1972（昭和47年）3月 コンクリート造4階建北館第2次分完成。
- 10月 北館竣工記念式挙行、憩の庭完成。
- 1974（昭和49年）3月 本館前庭園完成。定時制第23回・通信制第17回卒業生をもって両課程廃止。
- 1975（昭和50年）3月 女子更衣室2室完成。本校、南高に二高が加わって総合選抜実施。
- 1976（昭和51年）2月 校門わきの前庭完成。1学級増の31学級となる。
- 3月 女子更衣室1室完成。6月、第二グラウンド（ハンドボールコート）完成。
- 1977（昭和52年）3月 本校、南高、西高に東高が加わって総合選抜実施。
- 4月 1学級減の30学級となる。
- 7月 図書館に冷房装置を設置。
- 8月 図書館北側の自転車置場改築。
- 8月 図書館から運動場南および本館との間の中庭舗装。
- 11月 硬式テニスコート（後援会所有地）完成。
- 1978（昭和53年）4月 1学級減の29学級となる。講堂北便所を便所および倉庫に改造。

- 1979（昭和54年）2月 格技場増改築。屋内体育館増築。受水槽新設。歴史資料集発刊。
- 1979（昭和54年）4月 2学級増の27学級となる。
- 1980（昭和55年）4月 1学級増の28学級となる。
- 10月 創立百周年記念式典挙
- 1981（昭和56年）5月 百周年記念館竣工記念式典挙。記念館前庭完成。
- 1982（昭和57年）1月 野球バックネット完成。
- 4月 百周年記念館史料室完備。
- 1983（昭和58年）2月 記念館北側の渡り廊下新築。西館南側の自転車置場完成。
- 1984（昭和59年）3月 防球ネット完成。（延L=76.5m H=12m）囲障（フェンス）改修。プール北側目かくしフェンス（L=39.4m H=1.8m）。グラウンド西および北ネットフェンス（延L=169.7m H=1.5m）
- 4月 本校、南高、西高、東高に甲府昭和高が加わって総合選抜実施。
- 8月 プール更衣室新築。
- 1985（昭和60年）4月 1学級減の27学級となる。
- 10月 創立105周年・強行遠足60周年記念式典および記念行事挙。強行遠足記念像完成。
- 1986（昭和61年）3月 校歌碑完成。校庭改修工事完了。ピッチング練習場完成。
- 4月 2学級減の25学級となる。
- 12月 旧音楽室解体後美術・スケート部室新築。
- 1988（昭和63年）4月 1学級増の26学級となる。
- 1989（平成元年）1月 弓道場完成。
- 3月 文化部部室（朱光館）完成。朱光館北側と日新ホール南側の自転車置場完成。
- 4月 1学級増の27学級となる。
- 1990（平成2年）4月 1学級減の26学級となる。
- 10月 校庭西側のネット増設。
- 11月 創立110周年記念式典および記念行事挙
- 12月 第二グラウンド全面改修整備。
- 1991（平成3年）4月 1学級減の25学級となる。英語科が設置される。
- 7月 校舎改築準備委員会設置。
- 9月 第二グラウンド西側土留・フェンス工事。
- 2月 コンピューター教室設置。LL教室機材更新。
- 3月 百周年記念館2階エアコンダクト新設工事。
- 1992（平成4年）4月 1学級減の24学級となる。
- 6月 甲府一高校舎改築工事県議会承認。
- 7月 屋外プール、管理棟完成。
- 8月 報賽祭（校舎に感謝する会）挙。仮設校舎に移転。校舎改築工事開始。
- 9月 本館校舎解体工事終了。
- 1993（平成5年）8月 新体育館完成 移転。旧体育館解体。文化創造館（日新館）着工。
- 11月 新校舎完成 移転。図書館解体。竣工式挙（17日）。日新ホール、西館解体。外構工事、グラウンド散水工事、外便所新築工事、部室新築工事、駐輪場新築工事、百周年記念

館塗装工事、仮設校舎解体工事、植栽工事に着手。

- 1994 (平成6年) 2月 バックネット裏防球工事完成。
 3月 グランド南側照明完成。第二グラウンド東側フェンス工事着手。
 5月 文化創造館(日新館)完成。
 9月 石橋湛山先生胸像設置—百周年記念館—(同窓会寄贈)。
 1995 (平成7年) 11月 創立115周年記念式典および記念行事挙行。
 11月 文部省指定「平成6・7年度高等学校教育課程研究指定校」公開研究発表会。
 1996 (平成8年) 8月 インターネットの接続環境が整う。
 11月 第70回強行遠足実施、マイクロバス購入
 1997 (平成9年) 3月 マイクロバス車庫竣工(平成8・9・10年度卒業記念)。

卒業生数(平成8年度末)

学 校 名	卒業年度	卒業生			
		男	女	計	
尋 常 中 学 校	明22～34	313	0	313	
県立山梨県第一中学校	明35～38	209	0	209	
山梨県立甲府中学校	明39～昭22	5,811	0	5,811	
小 計		6,333	0	6,333	
山梨県立甲府 第一高等学校	全日制課程	昭23～現在	21,718	6,840	28,558
	定時制課程	昭26～48	568	607	1,175
	通信制課程	昭32～48	88	249	337
	小 計		22,374	7,696	30,070
合 計		28,707	7,696	36,403	



佐野智子・画

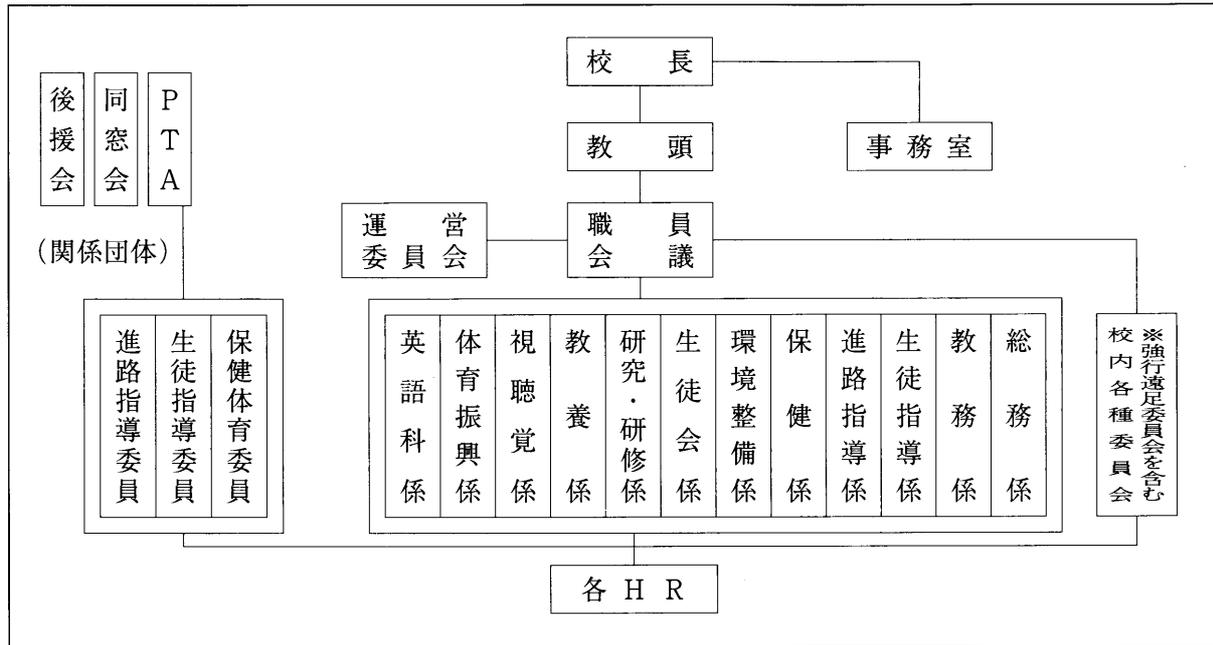
歴 代 校 長

○本校強行遠足は第10代江口俊博校長の時より始められた。

(就任欄の「代」は校長事務代行)

校 名	氏 名	就 任	退 任
山 梨 県 中 学 校 明 治 1 3 . 1 0 . 2 3	綿 引 泰 夫	代 明 治 1 3 . 1 0 . 1 9	明 治 1 4 . 2 . 2
山 梨 学 校 明 治 1 4 . 8 . 1 9	坂 根 正 範	代 明 治 1 4 . 8 . 2 0	明 治 1 4 . 1 1 . 9
徽 典 館 明 治 1 5 . 1 0 . 7	吉 瀬 田 川 静 亨	1 明 治 1 5 . 2 .	明 治 1 7 . 2 . 3
山 梨 県 尋 常 中 学 校 明 治 2 0 . 3 . 2 2	中 井 倉 雄 平 村 上 川 孚 泰 次 郎 中 川 登 郎 弊 原 藤 秀 正 大 島 正 健	代 明 治 1 7 . 4 . 8	明 治 2 0 . 3 . 2 4
		2 明 治 2 0 . 4 . 1	明 治 2 3 . 7 . 1 3
		3 明 治 2 0 . 7 . 1 3	明 治 2 3 . 6 . 3 0
		4 明 治 2 3 . 7 . 4	明 治 2 3 . 1 0 . 1 1
		4 代 明 治 2 3 . 1 0 . 1 1	明 治 2 6 . 2 . 6
		5 明 治 2 6 . 2 . 8	明 治 2 6 . 3 . 2 9
		5 代 明 治 2 6 . 3 . 3 0	明 治 2 6 . 4 . 3 0
6 明 治 3 1 . 5 . 3	明 治 3 1 . 6 . 3		
6 代 明 治 3 1 . 5 . 2 4	明 治 3 3 . 1 1 . 6		
7 明 治 3 3 . 1 1 . 8	明 治 3 4 . 3 . 2 6		
7 明 治 3 4 . 3 . 2 6	大 正 3 . 8 . 3 1		
山 梨 県 中 学 校 明 治 3 2 . 4 . 1	末 久 喜 十 郎 田 村 竹 喜 作 大 江 信 治 隈 口 俊 博 大 部 野 以 忠 永 野 芳 磨 近 藤 徳 潤 篠 原 兵 庫 宮 雨 田 二 亨 齊 藤 重 治 広 藤 俊 章 高 瀬 勝 雄 根 遠 一 蔵 若 津 林 勇 山 下 波 村 政 雄 岩 望 月 政 夫 三 澤 弘 廣 廣 瀬 重 毅 伊 藤 藤 口 稔 夫	8 大 正 3 . 9 . 7	大 正 6 . 7 . 9
9 大 正 6 . 7 . 9		大 正 1 2 . 3 . 2 6	
代 大 正 1 2 . 3 . 3 0		大 正 1 2 . 6 . 2 7	
1 0 大 正 1 2 . 6 . 2 7		昭 和 7 . 3 . 3 1	
1 1 昭 和 7 . 3 . 3 1		昭 和 1 2 . 8 . 3 1	
1 2 昭 和 1 2 . 9 . 1		昭 和 1 9 . 6 . 1 6	
1 3 昭 和 1 9 . 6 . 1 6		昭 和 2 1 . 3 . 3 1	
1 4 昭 和 2 1 . 3 . 3 1		昭 和 2 5 . 5 . 3 1	
1 5 昭 和 2 5 . 5 . 3 1		昭 和 2 9 . 1 . 1 7	
代 昭 和 2 9 . 1 . 1 8		昭 和 2 9 . 3 . 3 1	
1 6 昭 和 2 9 . 4 . 1		昭 和 3 2 . 3 . 3 1	
1 7 昭 和 3 2 . 4 . 1		昭 和 3 6 . 3 . 3 1	
1 8 昭 和 3 6 . 4 . 1		昭 和 4 1 . 3 . 3 1	
1 9 昭 和 4 1 . 4 . 1	昭 和 4 4 . 3 . 3 1		
2 0 昭 和 4 4 . 4 . 1	昭 和 4 9 . 3 . 3 1		
2 1 昭 和 4 9 . 4 . 1	昭 和 5 1 . 3 . 3 1		
2 2 昭 和 5 1 . 4 . 1	昭 和 5 5 . 3 . 3 1		
2 3 昭 和 5 5 . 4 . 1	昭 和 5 8 . 3 . 3 1		
2 4 昭 和 5 8 . 4 . 1	昭 和 6 1 . 3 . 3 1		
2 5 昭 和 6 1 . 4 . 1	平 成 1 . 3 . 3 1		
2 6 平 成 1 . 4 . 1	平 成 3 . 3 . 3 1		
2 7 平 成 3 . 4 . 1	平 成 5 . 3 . 3 1		
2 8 平 成 5 . 4 . 1	平 成 7 . 3 . 3 1		
2 9 平 成 7 . 4 . 1	平 成 9 . 3 . 3 1		

学校運営組織（平成8年度）



強行遠足委員会（平成8年度）

榎田 興二・五味 武彦・保坂 武雄・市川 洌子・赤池 和彦
 加藤 忍・矢崎 勉・土屋 美穂栄・大西 勉・山本 英樹
 村上 信・伊神 福陽・葉袋 武雄・春日 幸雄・金子 寛
 福岡 哲司・久津川 孝・依田 源・藤卷 敬正・吉成 謙
 中込 恵子

70回記念誌編集委員会

福岡 哲司・大西 勉・藤卷 敬正・渡辺 繁樹・矢嶋 夏江

関係諸団体（平成8年度）

(1) P T A

名誉会長	関口稔夫	(校	長)
会長	遠藤順彦	(3	年)
副会長	望月庄治	(3年・学年委員長)	
〃	興水孝樹	(2年・学年委員長)	
〃	土橋博司	(1年・学年委員長)	
〃	槇田興二	(教	頭)
〃	五味武彦	(教	頭)

(2) P T A保健体育委員会

委員長	田中政比己		
副委員長	齊藤達也		
〃	國友幸和		
〃	藤巻敬正	(体育振興係)	
書記	吉成謙	()
委員	神宮司素彦・齊藤博・今村裕・上野通也		
	興水修策・中村武彦・池谷仁・坂本信康		
	小林哲郎・山岸勝治・今村勝也・高山晏夫		
	加藤治男・飯島義久・名取忠男・古場哲郎		
	志村好啓・永田裕恵・古谷栄国・塚原幸男		
	増尾行廣・長谷川昌美・三村英文・曾雌正幸		
	竹原国弘・小澤房子・藤島康由・興水孝樹		
	佐久間信博・杉田智男・石原修・川崎敏行		
	松下清武・山村忠弘・大村邦明・北川今朝雄		
	矢崎正人・土橋博司・須藤信自・根津一保		
	広瀬源春・丹沢寛・水口義久・渡邊良樹		
	桐原勉・中込恵子	(体育振興係)	

(3) 同窓会

会長	太田源一郎		
副会長	海沼昭		
〃	井上中庸		
〃	井上雅雄		
〃	飯田祥雄		
〃	丸茂紀彦		
庶務	古屋力		
会計	藤原洋		
事務局長	小沢登		

・甲府中学・甲府一高第117回同窓会実行委員会

会長 竹越久高

同 編集委員一同



佐野智子・画

編集を終えて

平成8年（1996）、本校強行遠足は第70回を迎えた。大正13年（1924）以来、3回の中止があったから73年間の壮挙である。

これを記念して、生徒諸君には既に小冊子『強行遠足70回 歩け、心のかぎり』を編集、配布した。主に昭和37年（1962）、佐久往還コースになってからの記録の概要と70回大会に焦点をあてた内容であった。

併せて記念誌編集委員会では同窓会、PTA、旧職員の協力を得ながら、大正13年の第1回から今回までの強行遠足の歴史全般を概観するための記録（資料）等の整理を行ってきた。整理もなんとか終わり、ここに『強行遠足第70回記念誌 歩け、心のかぎり 1924-1996』を刊行できる運びとなった。

編集の過程で、73年-70回の強行遠足は膨大なドキュメント（記録）と〈思い〉の集積であることを思い知らされた。これをいかに集め、整理し、編集するかは大難事だった。

幸い『強行遠足20周年記念誌』（昭和40年）、『佐久往還強行遠足20周年記念誌』（同56年）が我々には伝えられている。私事に亘るのを許していただければ、スクールカラーである朱色の40年版沿革誌（三枝先生の挿し絵入り！）を生徒として手にしてから、既に30余年を閲したのかと、思えばまことに感慨深い。記録綴りも70回中数冊の欠本はあるものの、保管されてきた。OBや旧師の熟達の名文の数々も残っている。

ところが、この記念誌をさらに魅力的にするはずの写真が少ない。殊に草創期、戦前……。あっても年次がはつきりしなかったり、鮮明でなかったり。古くは昭和11年から数次に亘って撮影され、戦災にも焼けずにきた記録映画も見つからない。一部ダビングされたものを除き、記録映画を今回利用することは出来なかった。120年になんなんとする本校の資料保管・継承の大切さ、困難さを痛感した。

資料発掘、調査、整理の中で多くの魅力的な先輩にお会い出来た。樋泉靖志氏、樋泉明氏、今福利重氏、岩間孝吉氏、芦澤一洋氏など、とりわけ印象深かった。共通して感じられたのは、強行遠足は学校の行事であるが、同時にきわめて〈個人的な〉行事だということだ。

夜闇の中、苦痛に耐えながら歩を進める時、一人ひとりとは否応なく〈己〉と向かい合わざるをえない。強行遠足の数万人の参加者の裡には数万人の〈思い〉が蟠居しているのである。勝ち負けはないというものの、唯一の敵は歩行中も、歩行後も、北村透谷のことばを借りれば〈己てふ厄介なもの〉である。これを抱えつつ、甲中・一高の夜に学んだ者たちはシャイで〈ジェントルマン〉たり、〈アンビシャス〉なのである。

生徒たちは、今も、73年前と毫も変わることなく、苦痛に顔を歪め、汗と涙をしたたらせ、相変わらずやっかいな〈己〉を抱いては、小海へ、小諸へと歩き継いでいる。

73年を経て、今なお「歩き継いでいる強行遠足」のまとめとしては、この記念誌はまだ不十分の誹りを免がれないかも知れない。時のもたらす誤謬も混じっているかも知れない。叱正をいただきながら、10年後、20年後のさらなる充実を期したいと思う。

今回の刊行にあたっては、第117回同窓会総会の当番幹事の皆さんには物心両面でひとかたならぬ御協力をいただいた。心から感謝申し上げたい。

なお、資料には現代の社会通念上ふさわしくない表現も混じっているがそのままとした。オリジナルの味わいを残したいがためである。御寛恕いただきたい。

また、写真などの著作権については極力調査したが、お気づきの点があれば御指摘いただきたい。

（福岡哲司）



73年の歴史を物語る記録つづり

強行遠足第70回記念誌

歩け、心のかぎり 1924-1996

平成9年3月25日 印刷

平成9年3月31日 発行

発行者 山梨県立甲府第一高等学校

強行遠足第70回記念誌編集委員会

〒400 山梨県甲府市美咲二丁目13-44

電話 0552-53-3525 (代)

印刷者 オズ・プリンティング

〒400 山梨県甲府市中央三丁目8-10

電話 0552-35-6010 (代)

非売品

歩みをいざ

渡邊 弘 作詞

1. ハケ嶺の山のふところに
美しく いろどる もみじ
雲白く 山川清き
信濃路の秋をたずねて
たくましき 歩みをいざ
われら 甲府一高生

2. 同窓の心に深く
刻まれし 思いも 新た
日新の歴史とともに
心身のかぎり尽くして
はるかなる 歩みをいざ
われら 甲府一高生

3. 山鳥の鳴く夜更けて
結ばれし 心と心
輝ける明日に向かいて
朝焼けは雲の彼方へ
たしかなる 歩みをいざ
われら 甲府一高生

(昭和37年 作歌)

